

二次元

『魔法少女沙枝』の漫画も載ってるよ!

cover illustration by  
トモセシュンサク

# ドリーム

2D DREAM MAGAZINE

成年向け雑誌

今号の特集

# 催眠

サイエンス

表紙&ピンナップ  
テレホンカード  
応募者全員  
サービス

新連載小説  
正統派姫騎士陵辱!

**アリシア** 淫獄の姫騎士  
斐芝嘉和×桐島サトシ

大好評連載&読み切り小説

**対魔忍ユキカゼ**  
蒼井村正×竜胆

酒井仁×SAIPACo.

青空白雲×牡丹

上田ながの×アライノブ

木森山水道×ジョニー

二階堂安芸×kinntarou

大人気えっちマンガ&  
カラーマンガ

**ぱふえ**

NO.ゴメス/jema/SHUKO

嘉納あいら/おおたけし

カラーピンナップポスター

**本田直樹**

いるまかみり

トモセシュンサク

特別付録2

PCゲーム

**魔法少女沙枝  
でらっくす** 体験版



特別付録1 プロの催眠術師監修!!  
**催眠ドラマCD**  
※催眠ドラマCDはデジタル版には付属しておりません。

監修:ブラックキャット



立ち読み版

vol.63 2012 **04** DIGITAL EDITION  
デジタル版









魔女の肉體に囚われた姫騎士！  
歴戦のプライドが牝の悦楽に蝕まれていく！

著者近刊作品

トリプルとらぶる  
プリンセス

好評  
発売中!!



PRINCESS KNIGHT ALICIA

# アリス

淫獄の姫騎士

第一話 蠢動

小説  
NOVEL

いしほよしかず  
斐芝嘉和

挿絵  
ILLUSTRATION

きりしま  
桐島サトシ

総構えの城を取り囲んだ魔物たちが、獣のように吼える。外郭の城門には破城槌を振るうオーガが取りついていて、雷鳴のような轟音が間断なく響く。

一年に及ぶ今次の対魔王軍戦争は周辺都市を極力無視するといういままでない魔王軍の戦略によって、ベルセフォフ王国が常に後手を踏み続けていた。その結果、ついに王都が包囲されるという屈辱の事態に。戦力の消耗を可能な限り避けてきた魔王軍は、いまだに血気盛んで、勇猛で知られるベルセフォフの兵たちもその勢いに圧され気味だ。

「大丈夫。みんな、心配しないで」

王城のもつとも奥まった場所に立つ塔の一隅、展望台にもなる広間――。

「敵軍はまだ外郭を越えていません。彼らがしきりに怖い声で吼えるのは、この城を攻めあぐね、腹を立てているからですよ」

悲鳴を上げて身を縮める侍女たちを見直し、ベルセフォフ王国第三王女イミス・セフォフはいつもと同じおっとりとした笑みを浮かべた。

小柄で童顔、手足も細く胸も薄く見るからに華奢だが、王族としての自覚が為せる業か、その肝はしっかりと据わっている。

「ごらんなさい、あれを」

白指を上げて示す窓の先、連なる屋根の遙か向こうに、白い一団があった。白銀の鎧に純白のマント、高々と掲げた旗には「ベルセフォフの竜」――王国一の精鋭・近衛騎士団だ。

城門へ向けて肅々と進む一団に、歩兵は随行してない。先頭に掲げられていた隊旗も、門の手前でツイットと離れた。

「ほら、あそこに……アリシア様がいらつしやいます。歩兵をお連れでないという事は、これから突撃を敢行されるのでしょうか。だから大丈夫」

「い、いけません、姫様！ そんなに窓に近づかれ

ては流れ矢が……きゃつ!」

一際大きな爆音が響き、城門の向こう側に黒煙が膨れ上がった。魔物たちの咆哮も高まり、同時に守備隊の動きが慌ただしくなる。

「ああ、とうとう門が……」

「いえ、違います。アリシア様たちが打って出るために、門の外を焼き払ったのです」

幼さの残る頬を輝かせ、イミスが自信満々に言いきつた通り――。

「吶喊!」

「オオオオッ!」

まだ開ききつていない城門を押し退けるようにして、咆哮する白銀の騎士団が走り出た。燃え盛る油壺の残骸を蹴り飛ばし、炎に巻かれて逃げ惑うオーガたちを突き転がしながら、

「全隊、戦闘速歩! 列を乱すな、我に続け!」

一塊の砲弾と化して敵軍へ切り込んでいく。先頭で白刃を閃かせるのはアリシア・リデル。リデル公爵の娘で、近衛騎士団の長だ。返り血を避けぬその顔は、若く凛々しく、そして美しい。

黄金色に輝く豊かな髪を頭のうしろで無造作にまとめたアリシアは、姫と呼ばれる血筋であると同時に王国を代表する騎士でもある。

乙女らしく細い身体は束ねた鋼線のように引き締まり、振るう剣に迷いはない。形よく張り出した豊かな乳房、優美で肉感的な腰回り――若く瑞々しい女体を象った装甲は、部下たちに比べるとかなり少ない。特に胸の谷間はほぼ剥き出しで――しかしそれゆえに、剣筋にキレと幅が生まれる。

防備の薄さは要所要所に埋め込んだ魔法石と帷子代わりの魔法布で補い、軽さや動きやすさを極限まで追求した軽装鎧。振るう刃も細く優美な、刺突に適したエストック。

「逃げる者は追うな、刃向かう者だけ屠れ!」

引き連れた部下たちに指示しながらオーガが振るう戦斧を掻き落り、ツツと間合いを詰めて剣を一閃。馬の足下へコソコソと忍び寄るコボルトも見落とすことなく、剣先を突き込んで頸動脈を刎ね斬る。

アリシアほどではないが、率いている部下たちもみな手練れだ。四方から射かけられる矢をもととせず、小脇に抱えた長大な馬上槍を手足のように操って近づくと鬼たちを素早く的確に屠っていく。

「こいつあ鴨撃ちより楽すな、姫様!」

「姫様と呼ぶな、クルツ。馬を降りて自分の脚で走りたいなら別だがな」

軽口に軽口で応えつつ、アリシアも部下と同じ感想を抱いていた。魔物たちの抵抗が予想以上に弱い。総構えの城の広大な外郭をグルリと包囲しているため、各陣が薄くなっているのだろう。

（ここにきて兵を散らすとは……城を目の前にして、とうとう焦りが出たか。魔王も所詮は浅はかな魔物だな。これなら兵糧を焼くのも楽だ）

魔物も生き物だから糧を失えば弱体化する。まして、相手は一年も戦い続けている遠征軍だ。いまは勝利を確信して勢いついているが、輜重隊を狙ったこの突撃が成功すれば不安が生じ、圧され気味の戦況を一気にひっくり返せるだろう――しかし。

「隊長! あれを……!」

部下の声にハツと振り返ったアリシアは、城の東側の上がる狼煙を目にして歯噛みした。彼女たちが飛び出してきた門とは別の場所が、とうとう突き崩されたらしい。

組織として活動すれば人間のほうが教段優っているが、個々の戦闘力を比べれば当然、魔物に軍配が上がる。城内での乱戦となれば、守備隊はさらなる劣勢に追い込まれてしまうだろう。

そんなことを考えているうちに、魔法を用いた急報が魔王軍にも行き渡ったのか、周囲の鬼たちが一

齊に向きを変えた。外郭の破れ目から怒濤のごとく押し入って、一気に蹂躪するつもりなのだ。

兵糧を焼いても、帰る城を失えば意味がない。

「全隊、回頭！ 外郭に沿って敵軍を裂き割り、東の門を目指す！」

素早く判断したアリシアは躊躇うことなく手綱を引き、馬首を返した。敵軍の後方を攪乱すれば、城への流入を遅らせられるはずだ。

その狙いは半ば当たり、半ば外れた。

打ち破られた外郭から強力な兵団が迫り出し、魔王軍の波状攻撃を押し返していたのだ。

「ひ、姫様……魔物が、魔物と戦っています！」

「姫様と呼ぶな、クルツ。私も初見だが、おそらくあれはラーマの部下たちだな」

一糸乱れぬ集団速歩で戦場を突き進んできた騎士団は、速度を維持したまま針路を変え、外郭傍の激戦区から離れた。猪頭のオークが熊のように大柄なオーガと掴み合い、醜い瘡面のゴブリンと卑しい犬顔のコボルトが刃を交えているのだ。どちらが敵でどちらが味方か、まったく分からない。

「あんな獣じみた連中を手駒にするとは……あの魔女も、なかなか油断なりませんな」

「なんのなんの、俺たちを尻に敷いてる姫様のほうが数段上だろう」

「ハハ、クルツの言う通りだ」

「無駄口はそれくらいにしておけ。新手が来たぞ、ぬかるな！ 馬間を詰めて長槍に備えよ！」

部下たちの軽口を苦笑して聞き流しつつ、アリシアは密かに危ぶんでいた。

ラーマとは、半年前に王が雇った魔女の名だ。怪しげな魔法を用いる年齢不詳の妖艶な黒髪の美女で、芸を見せて王族を愉しませる御伽衆のひとりだが、どうやら魔物を使役できるらしい。

（確かに戦力にはなる——が）

おぞましい魔物を使役したとなれば、他国からは卑しい魔王の同類と見做されるだろう。目の前にある危機から脱するためとはいえ、勇名を馳せてきたベルセフォフ王国の権威は失墜してしまふ。

それを回避するには、近衛騎士団の赫々たる戦果が必要だ。魔王軍を撃退したのは妖しい魔女や醜い魔物たちではなく、アリシアを筆頭とする正統な騎士たちであったと、胸を張って言えるように。

「見た目はおぞましいが……ふん。ラーマの魔物たちはなかなか使える連中のようなだ」

聞こえよがしに言う隊長の意を汲んで、副長のクルツが同意する。

「指揮がよいのか、深追いしませんな。あれなら裏を取られることもない。我らと違って足が遅いから追いたくても追えないだけかもしれないが——まあ、城を守るだけならあれで十分でしょう」

「よし、守備は奴らに任せよう。我が隊は、これより魔王軍本陣を突く。なに、わざわざ駆け戻す必要はない。あそこに旗が見える。どうやら魔王は我らに首を差し出したいようだ」

ことさら朗らかに言ったアリシアは、白刃を頭上に振って戦場の視線を惹きつけた。統率力の弱い魔物たちはあつさり釣られ、持ち場を離れて三々五々集まってくる。魔王本人も戦場に突出している騎馬隊を見つけて浮き足だつたようで、本陣そのものが列を乱しながら動き始めた。

「クルツではないが、確かにこれは鴨撃ちより楽だな。鴨は逃げるが、魔物は向こうから近づいてきてくれる——よし、これより勝手次第！ おぞましい魔物どもの首塚を築け！」

「応ッ！」

野太い声で応えた騎士たちが、矢のように駆けて戦場に散った。

白銀の鎧こそ清々しいが、ベルセフォフの騎士は

実戦で鍛え上げられた荒くれ者が多い。みなから一目置かれているアリシアが手綱をしっかりと引き締め、解き放せば一騎一騎がたちまち餓えた白狼と化す。

とはいえ、危険な賭けでもあった。人間よりも獣に近い魔物は、小柄なコボルトであっても油断ならない敵だ。隊を散らせばそれだけ守りが弱くなり、損耗率が跳ね上がってしまう。

（みな、死ぬなよ……！）

胸中に祈りながら、アリシアも馬の腹を蹴り、一匹の餓狼となった。

前方から押し寄せてくるゴブリン隊へ真正面から突っ込み、行きがけの駄賃で首ふたつ。そのまま駆け抜け、丘を登ると見せて斜行、方向転換。高所から戦場を広く見渡し、比較的近く比較的大きな一団を選んで、再び突進する。

押し込まれれば勝ち目はないが、そもそも小柄な女騎士が軽装鎧を纏っているのだから馬は風のように駆ける。あまりの速さに鬼たちは武器を構えるヒマもなく、また、追い縋ることもできない。

神速の一撃離脱を、二度三度——繰り返すたびにみつよつと首が飛んだ。五度、六度——八度目の方向転換をした瞬間、アリシアの狙い通り、真正面に魔王軍の大將旗。

もちろん、鎧の背に跨った牛顔の魔王はまだ遠い。長槍を携えたグール衛兵の大集団に守られているが——。

「ベルセフォフ騎士団が長、アリシア・リデル！ 魔王陛下の御首、いただきに参った！」

吼えるように名乗った女騎士は、いままでと同様、欠片も躊躇うことなく突進した。

数日後——謁見の間を辞したアリシアの美貌は暗く翳っていた。

\* \* \*



「アリシア様……どうかなされましたか？」  
「え？ あ、これはイミス姫。いや、大したことはありませぬ」

廊下で待ち伏せしていた歳若の姫に声をかけられ、慌てて笑顔を取り繕ったものの、碧い瞳に残る憂いの陰は消しようがない。第一、歳の近い従姉妹同士として互いをよく知っているから、下手な嘘を吐いてもすぐに見破られてしまうだろう。

（それにしても……聡明な姫だ）

アリシアが心の底から尊敬しているように、イミス姫もまた、己の命を懸けて国に尽くしているこの女騎士を畏敬していた。自分が剣を取って戦うわけにはいかないが、その代わりに、できる範囲でアリシアを手助けしたいと常日頃から思っている。

「胸を張ってください、アリシア様。魔王の首を取れなかったのは残念ですが、でも、近衛騎士団の活躍によって魔王軍を追い払えたのですよ？ お父様もそう言っていました」

「はい。陛下からお褒めの言葉をいただきました」

「あ……ひよっとして、あの浅ましい魔女が、アリシア様の戦功を横取りしたのですか？」

「滅多なことを言っってはなりません、姫。あの方は実に奥床しい。むしろ私が彼女の戦功を横取りしたような形になってしまっただけ、心苦しいのです」

「まさか！ アリシア様が他人の手柄を横取りするだなんて、あり得ませんわ！」

「もちろん横取りなどしません。しかし相手から譲られることまでは防げませんので」

穏やかな口調で訂正しながら、アリシアの胸には苦さばかりが広がる。

敵本陣を切り裂いて戦況を決定的に覆したのは近衛騎士団だが、落ちかけていた城を救ったのは魔物たちだ。魔王軍を斥けたという名声は確かに欲したもの、同時に、守備隊として奮戦した魔物たちの

戦功は正当に評価されるべきだと考えていた。

なのに――。

「アリシア様や近衛騎士団のみなきまが魔王軍の本陣を突いてくれたからこそ、敵は浮き足だつて算を乱したのでございませぬ。私の拙い術などなくても、おそろく同じ結果になったはずですよ」

謁見の間、上機嫌の王に対して、アリシアの隣に跪いた魔女は頬に薄い笑みを浮かべながらつらつらと述べた。そのうえ、魔物たちへの褒賞は一切要らないと言う。

「本来なら人と交わることすら許されぬ、浅ましい者たちです。傷の手当てが済むまで城の一隅をお借りできませぬ。もうそれだけで十二分。長くて十日のお目汚し、どうか御容赦くださいませ――」

――あまりにも謙遜したその態度に、王はますます喜色を深めた。長らく空席になっていた後の座に、黒髪の魔女を据えてもおかしくないほどだ。

もちろん、ラーマは素性の知れない漂泊の魔女だから、王がどんなに望んでも后にはできない。だが、あの賞賛ぶりから推測するに、御伽衆のままとすることもあるまい。きつと近いうちに、王室顧問辺りに大抜擢するつもりだ。

（危うい。過ぎたる無欲は警戒すべきなのに……）

現王は名君でこそないが、暗君でもなかったはず――なのに最近では、傍で見ている者がハラハラするほど脇が甘くなっている。

確たる証拠はないものの、アリシアはラーマがなにか仕掛けているのではないかと疑っていた。術か薬か――とにかく、魔法使いは油断がならない。

そんな騎士の胸中を読み取ったように、幼顔の姫も柔らかな頬を膨らませる。

「あの方が己の手柄を譲るだなんて、きつとなにかよくない魂胆があるのだわ！ あんなおぞましい魔物たちを部下にする人など、信用できません！」

心情としてはアリシアと同じ――だが、軽々しく同意してはならない。イミス姫もいつか人の上に立つのだから、正しい方向へ導かなければ。

「言葉が過ぎますぞ、姫。確かに魔物たちの見た目は醜いが、彼らの奮戦があつたからこそ被害を最小限に喰い止められたのだ。戦功を公平に評価しないような王は、信頼も尊敬もされませぬ」

「でも……」

「姫も王家の一員ならば、情ではなく理に従いなさい。これは臣・アリシアとしてではなく、王族の先輩・リデル公爵の娘としての言葉です」

「……はあい」

いまだ不服そうな顔ながら、渋々首肯イミス姫。聞きわけのよい姫を、優しく見下ろす女騎士。

（私に甘えているからついつい本心が口を衝いて出ただけで、本当は姫もお分かりのはずだ）

まだ若いから言動は少々軽薄だが、しかし本質的には賢い姫だ。性根は優しく、しかも意外に肝が据わっている。このまままっすぐ育てば、王国の未来はかなり明るい。

「ところで、姫……久々に遠乗りしませんか？ 戦禍を確認するついでなので嬉しい道行きにはならぬいでしょうが」

「まあ、さすがはアリシア様ですわ！ 私がなぜ待ち伏せしていたのか、見抜かれていたのですね？」

女騎士が話題を変えると、童顔の姫はたちまち機嫌を直した。こういう切り替えの速さも、上に立つ者には必須の才能だ。

「違います。姫から誘われる前に、私が姫を誑かしたのです。そういうことになっておきませんと、また陛下に叱られますぞ。アリシアの真似などするな、女騎士はひとりいれば十分じゃ――と」

「うふふ。いまの口調、お父様にそっくり！」

明るい声を響かせるふたりの美姫が、ゆつくり立

ち去る廊下——その片隅の暗闇がゆらりと揺れて、黒い鍔広帽を被った人影が滲み出てきた。切れ長の瞳に冷やかな笑みを湛えた魔女・ラーマだ。

「はてさて、厄介なこと」

細腕を組み、拘束衣のような黒衣からいまにもこぼれ出しそうな乳房を揺すり上げた魔女は、彼女たちが消えた先を見つめて小さな溜め息を漏らした。

「相手が男なら誰かすのは簡単だけれど、男勝りの姫騎士様ではねえ……」

ぼやく脳裏に浮かぶのは、白刃を振るって戦場を駆けるアリシアの姿。荒くれ者たちを手足のように扱うかと思えば、わがままな王女をすっかり手懐け、理想的な王にすべく機会を捉えてこまめに教導している——魔女の目からすれば、この国で王に相応しいのはあの女騎士だけだ。

しかも、先日の一戦で王気がますます強くなり、兵たちからの信頼も増してしまった。公爵家の娘という立場を弁えて一歩下がっていかれるから、いまはまだ邪魔ではないが——早く手を打たなければ、この国を乗っ取ることが難しくなる。

「魔王と刺し違えてくれるのが一番よかったのだけれど……せつかく私が手引きして王城まで攻め寄せさせたのに、最後の最後で詰めを誤るだなんて。本当に、男って使えない奴ばかり。やはり私が手を出すしかないか」

呟く姿が薄れ、闇に溶けて——廊下によりやく、完全な静寂が戻った。

\* \* \*

その日の夜——。  
(イミス姫もなかなか、手綱捌きがよくなった。陛下の娘でなければ、義妹としてもらい受けて本格的に仕込まないほどだ)

馬たちの世話を終えて厩舎をあとにしたアリシアは足取り軽く、近衛騎士団の兵舎へ向かった。馬番

たちが明かりを持って先導を務めようとしたが、「よい。城内だし、月もある。危険はなからう」

気軽に断つてひとり歩く。

十日あまりの防衛戦の間、馬番たちは見張りに駆り出されたり炊き出しに使われたりと、ロクに休めなかつたはずだ。そのうえ、魔王軍が退いたあとにはすぐさま追撃隊が編成されたから、本来の仕事に追い立てられただろう。

(よく働いてくれた。あとでまたこき使つてやるから、いまは休め)

——と、ほかの将がしているように戯れ言混じりに労えればよいのだが、アリシアにはできない事情があった。不用意に労うと、凛々しく麗しい姫騎士にいいところを見せようとして限界以上に働く者が続出するのだ。

(無理をしないのが本当の忠だと、なぜ分らないのか……贅沢な悩みだが、ペルセフォアの民は性根がよすぎていかん)

自らの王気にはまるで気づかず、月明かりを受けて白く輝く頬に苦笑を浮かべる女騎士。

傍目にはずいぶん隙があるように見えるが、しかもまったく油断していないのがアリシアのアリシアたる所以であつて——。

灌木の茂みから不意に飛び出してきた影を、  
「ぬっ!!」

白刃一閃、欠片の動揺もなく斬つて捨てた。

と同時に鋭く踵を返しているから、うしろから飛びかかるうとしていた小柄な影も突きつけられた剣先に鼻の頭を軽く撫でられ、「ひッ!!」と間拔けな声をこぼすのが精一杯。

「その背格好……コボルトか。魔王軍の残党……ではないな。あの魔女の手下か?」

「ち、違う! 俺たちはラーマ様ではなくて魔王の……ぎゃっ!!」

最後まで言わずに、アリシアの剣が走る。  
「下手な嘘を吐くにしても、せめて主人への様づけはよせ。それに——馬に乗っていないければただの小娘とでも思うたか? 甘く見られたものだな。その無礼、貴様らの命で償ってもらうぞ!」

月光を弾いて一閃、二閃——そのたびに新たな影が倒れ、血の臭いと呻き声が増えた。闇を伝つて忍び寄つていた魔物は、十匹以上もいたのだ。

(いつかこういう日が来ると思つてはいたが……しかし、なぜいまなのだ? 先日の活躍で陛下の信頼を取りつけたのだから、しばらくは動かぬだろうと見ていたのに……)

訝しむアリシアの傍に、騒々しい足音と松明の光が近づいてきた。新しかと目をやれば、

「何事じゃ?! これ、そでなにをしておる?!」

重装近衛歩兵を引き連れた王だ。

「危険です、陛下! お下がりでください!」

「その声、アリシアか……城中で剣を抜くとは穏やかではないな」

遅ればせながら警戒した王が、近衛兵たちに前後左右を守られながら立ち止まった。王に弓引くつもりはないのか、舌打ちした小柄な影たちは微かな足音を残し、そそくさと闇へ散る。

(浅はかだな。仲間を残していったのでは、だれの仕業かバレてしまうだろうに……)

苦笑したアリシアだが、傍に寄つた近衛兵たちの松明が地に伏した小鬼たちを照らし出すと、

「ぬう……こ、これは? 魔王軍の残党か? 彼奴らめ、正攻法では城を落とせぬとみて、朕の寝首を掻きに来たのか……」

王はあり得ないことを言った。

(バカな……敵本陣が傍にあるならともかく、すでに百里も退いているのに。いくら戦に疎い陛下でも、これほどの外れなことを言うだなんて……)

背に噴き出す汗を押し隠し、剣を納めて頭を下げるアリシア。ラーマの術がどれほど王の思考力を弱めているのか、推察できない。毒蛇にならなければよいが、と思いつつ、

「畏れながら、これらはラーマの手の者かと。陛下ではなく私の首を狙っていたものと思われます」

言葉を選んで告げる。

「なに？ なぜラーマがそなたの首を狙う？」

「それは……あつ!!」

答えようとしたアリシアの頭に、王の手が無造作に乗せられた。

「なにのために？ どういう意味だ？」

閃く疑問より早く身体が動き、つらんと鞘走った白刃が王の腕を斬り飛ばす。

「きゃっ!!」

「……陛下ではないな!? ラーマか!」

「よく見破ったわね——と言いたるところだけれど、貴女、ちゃんと見破る前に剣を抜いたわね。本物の王様だったらどうするのよ？」

魔法の声で悪戯つぼく笑った王が、断ち切られた腕を無造作に振る。月光の中に白い腕が再生し——その手指は細くなよやかで、明らかに女の物だ。

「どうもこうもない。本物の陛下が意味もなく私の頭に触れることなど、あり得ぬからな!」

動揺を押し隠したアリシアは、凜とした口調で言い返した。とはいえ、本物の王だったら、と肝を冷やしたのではない。

（偽者だと、まったく気づかなかった……あれが手ではなく、刃物であったならば……）

いまごろ命はなかったらう。

これだから魔法使いは油断できぬのだ——齒軋りする女騎士の目の前で、王は肌も露わな妖しい魔女に、近衛兵は猪首顔のオークに、それぞれ姿を変える。闇を突いて襲いかかってきた先ほどのコボル

トたちは、アリシアの間合いへ入り込むための捨て駒だったようだ。

（しかし……分からねぬ。私を殺したいのなら、先ほどが絶好の機会であっただろうに……）

魔法の手の感触が微かに残る脳天を気にしながら、アリシアは慎重に剣を構え直した。なにか術をかけようとしていたのか、それともすでにかけられたのか——とにかく、この先は一切気を抜けない。

「そちらこそ、いったいどういうつもりだ？ 城中での斯様な狼藉、なんといい訳する？」

「うふふ……言い訳が必要なのは貴女のほうよ」

「なに？ どういう意味……あつ!!」

頭上に残っていた微かな違和感が、不意にドロリと溶けてうなじに垂れてきた。先ほどまで、羽ほどの重みもなかったのに——おぞましい粘り気を帯びたソレは生き物のように伸縮しながら、鎧の内側へ流れ込み、柔肌を伝って背や肩に広がる。

「なんだ、これはっ!!」

「私の可愛いスライムよ。冷たくて柔らかくてヌルヌルしてて、気持ちいいでしょう？」

「き、気持ちよいわけ……ない、だろうっ!」

魔法女に向けていた切っ先が揺れ、隙のない構えが乱れた。背を這う冷たいぬめりが脇腹を巡り、胸や腹、さらに尻や股間にまで迫ってくる。

何枚もの死人の舌に舐め回されているような、おぞましく不快な感触。あまりにも気味が悪いから、すぐ目の前にいる敵に集中できない。

「あらやだ、不感症？ せっかく綺麗な顔なのに、もつたないわねえ」

「戯れ言を……あつ!! く……ううっ!!」

おぞましい感触に肘まで包まれた両腕から不意に力が抜け、剣が落ちた。

いや、腕に絡みついたスライムは関係ない。太腿のつけ根、女にとつてもっとも大切な秘すべき割れ

目、指より器用に伸縮する冷たい粘液に掻き開かれたのだ。

感じやすい粘膜花弁に、細かな振動が刻み込まれる。何匹もの蛇が秘処に群がり、先の割れた舌をいやらしく閃かせて、ヒタヒタとせせつっているような

——かと思えば、

「ふあつ!! う……くうっ!!」

割れ目の縁に、無視できない快感。糸のように細く伸びたスライムが、女体の中でもっとも敏感な肉豆に螺旋状に絡みつき、キュイ、キュイと締めつけてくる。

（な、なんていやらしい……魔物!）

返り血を浴びても動じなかった女騎士の頬が、あまりの恥辱に強張った。滅多に揺れない心が千々に乱れ、鎧を脱ぎ捨てて秘裂を掻きむしりたくなる。

「うふふ……前言撤回。頬が真っ赤になっただから、不感症ではないようね」

「だ、黙れ、外道ッ!」

細い眉を吊り上げて頬を赤らめたアリシアが、怒りと羞じらいにギリギリ齒軋りしながら震える間も、柔肌に貼りついて身体中に広がったスライムは淫らに蠢き続けていた。

白銀に輝く胸部装甲の内側で、いくつもの小さな手となったスライムが、若く瑞々しい乳房をむっぎむっぎむっぎむっぎむっぎ——尻房を掻き割られ、穢らわしい排泄孔を撫でられて——指先のように尖った先端が必死に拒む括約筋を強引に押し分け、身体の内

にまで潜り込んでくる。

「お、おのれえ……ッ!」

これ以上の恥辱は許せぬと、足下に落ちている剣へ手を伸ばすアリシア。

「させないわよ」  
薄く笑ったラーマが術を使おうとして——転瞬、ギョッと目を見開いて大きく仰け反る。

その鼻先を掠めるように飛び抜けていく、ショートソード。剣を拾うと同時に、アリシアが腰のうしろに吊っていた予備の刃を投げつけたのだ。

不意打ちに面喰らって体勢を崩した魔女、その細く白い喉を狙って――。

「チェイツッ！」

渾身の突き込み。

だが、腕に絡みついたスライムのせいで剣先がわずかにずれた。魔女も首を振って避けたから、黒髪を数本斬り飛ばしただけ。

「く……ッ！」

歯軋りしているうちにも両腕は勝手に動き、目的を果たせなかつた剣を鞘に納めてしまう。

「惜しかったわねえ、騎士様。でも、危ないことはもうやめてね。貴女がいい仔になるなら、私も非道いことはしないわ」

「非道いことはしない、だと……？ す、すでに、しているではないか！」

「え？ まあいやだ、アリシア様って、ひよつとして処女？ 非道いことっていうのはねえ……うふふ。こういうコ・ト・よ」

「ッ!? う、くああ……っ!?」

尻穴を穿っていた冷たい粘液が、不意に凝縮して硬くなった。長く太く、そして大小の瘤を無数に生やした棒状の物体が、凜とした女騎士の穢れの肉穴を深くと刺し貫く。

「ただでなく――ヴンッ！ ヴヴンッ！」

弾力のある氷柱のような感触が、いきなり激しく震え始めた。

「あっ!? う、ああっ!? や、やめろ……と、止め……ろおっつ！」

肛門に発する、恥ずかしい激震。

恥辱の振動は腰骨を伝って背に響き、下半身の感覚が淡くなり、膝から力が抜けてしまう。

「な、なんだ、これは……く、う、ううう……」

「それはね、肛悦という感触よ。お尻の穴が蕩けてしまいうでしよう？」

「そんなこと、あるわけが……あっ!?」

ますます強まる激震に、女騎士の引き締まった背筋が鋭く反り返った。いくつもの瘤を生やした棒状の物体は、まるで生き物のようにくねりながら女騎士の排泄器官を押し広げ、掻き開き――奥へ奥へとさらに深く潜り込んでくる。

（な、なんだ、これは……腹に、響くッ！）

騎士という仕事柄、腹を殴られたり蹴られたり、刃を突き立てられたりしたことはあるが――内側から愛撫されたのは初めてだ。痛みとは明らかに違う、温かな波に似た異様な感覚が、尻穴の奥底に刻み込まれ内臓を伝い、ヘソの裏側までジワリジワリと広がってくる。

「正直になりなさい。それとも、やつぱり不感症なのかしら？」

「う、うるさいッ！」

叫ぶ声に迫力はない。気持ち悪いとも言いきれない。痺れるような、蕩けるような、いままで感じたことのない不思議な感覚。

（き、気を、抜くな……敵が、目の前に……いるのだ、から……！）

必死に己に言い聞かせるのに、排泄器官に深くと潜り込んだ淫棒が蠢くたび、闘志が徐々に突き崩されていく。

「んう……く、うう……！」

振動する冷たい瘤が腹の中で動くたび、喉の奥から甘やかな鳴き声が迫り上がってくる。懸命に歯を喰い縛っているつもりなのに、わななく唇から漏れてしまう。

（な、なんて浅ましい……声だ！ しっかりしろ、私はベルセフォアの騎士なのだぞ！）

歯を喰い縛るアリシアを追い詰めるように、

「うへへ……色っぺえ声だあ」

「あんなに勇ましかった女騎士様が、ケツの穴ア穿られて、いまにもイきそうな顔になってらあ」

近衛兵に化けていたオークたちが、醜い豚鼻を鳴らしながら包囲の輪を狭めた。

「く……寄るな、下郎ッ！」

眉を逆立てたアリシアがキッと睨みつけても、豚顔に浮かんだ下劣な笑みはますます深まるばかり。

「ら、ラーマ様……そ、そろそろ、オラたちの出番でねえですか？」

「つたくもう、仕方ない豚どもね。でも、触れてはダメよ。いやらしい女騎士様がすべてしてくれるはずですからね」

「ぐへへ、分かっつまさあ！」

喜び勇んだオークたちが、いそいそと鎧を脱ぎ捨てた。月光を浴びてそそり勃つのは、豚のモノに似た異様な男根。

魚の精巢のように白くヌラヌラ光るソレは、長さも太さも異様であつたが、それ以上に――尖端が急に細くなり、コルク抜きのように捻れて二巻きほどの螺旋になっているのが不気味だ。自在に動かせるのか、息を呑むアリシアの目と鼻の先で、グニユ、グニユ、とおぞましく旋回する。

「け……穢らわしい！ そんなもの、見せるな！」

「うへへ、まあそう言わずに」

「うっ!? あっ!? こ、これは……貴様の仕業か、ラーマッ！」

必死に背けようとしている顔が、逆におぞましいペニスへ向いてしまう。地についた膝が勝手に動き、剣を拾えなかつた腕が意思に反して持ち上がり――一番近くにいたオークの腰に、ぶら下がるような格好でしがみついていた。



それだけでも、舌を噛み切りたくなるほど悔しいのに——膝立ちの身体が揺れながら伸び上がり、臭い太腿に頬擦りするような姿に。

「く、う……ううっ！」

——ぬちより。

額に触れる熱い肉塊、鼻腔に粘つく生臭い芳香。

(き……汚いッ！ それに……なんだ、この……不気味な形は……ッ！)

人間のモノとは明らかに違う、獣の淫棒。普通のペニスで同じことをされてもきつと耐えがたいだろうに、よりにもよって、こんなおぞましい、異形の男根で觸られるとは——。

あまりの恥辱に臟腑が煮え、沸騰した血潮が頭へ上る。目眩を覚えるほどの憤怒——だが、魔女の妖しい術に操られた身体は止められない。

「ううッ!? む……んうっ!?」

嫌悪に歪む顔がさらに仰向き、石のように強張った裏筋を頬に受けてしまった。それだけでなく——自ら身体を上下させ、異形の男根に顔を擦りつけているような格好に。

熱くコリコリした肉塊が形よい鼻の脇を掠め、銅のように強張った裏筋が薄い脛を揉み込んでくる。螺旋状に振れた先端が女騎士の滑らかな柔肌を這い回り、顔中に青臭い粘液を塗り広げる。

「うひひっ！ 見てくたせえ、ラーマ様あ！ き、騎士様が、オラのチ●ポに頬擦りしてまさあ！」

「あらホント。いやらしいわね。魔王軍の術師に変な魔法をかけられてしまったのかしら？」

とぼけた顔で白々しく言う魔女を、アリシアは鋭い目で睨み上げた。

しかし、声は出せない。

剛棒と化したスライムに尻穴を犯されたままだから口を開けば恥ずかしい声が漏れてしまうし、なにより——。

(く、臭い……汚い、気持ち悪い！)

頬を、鼻を、唇を、豚面の魔物のおぞましい淫棒に蹂躪されている。熱く硬い弾力に柔らかな頬を揉み込まれ、青臭くヌルヌルとした先走り汁を塗りたくられている。

こんな状態で声を漏らせば、この気持ち悪い淫肉が口の中まで押し入ってくるだろう。

だからアリシアは必死に唇を噛み、いまにも溢れ出そうな嫌悪の呻きを懸命にこらえた——のだが。

「何事じゃ!? これ、そこでなにをしておる!」

再び王の声が聞こえ、先ほどと同じように騒々しい足音が近づいてきた。

今度こそ本物だ。

しかも——。

「……きやつ!? あ、アリシア様!」

いままで王に説教でもされていたのか、イミス姫までいた。

(あ、ああ……見ないでください、姫!)

妹のように思っていた姫に、優しく可憐で穢れなき姫に——浅ましい牝犬のような姿を、見られてしまった。王にも、兵にも、驚き呆れた顔でマジマジと見つめられてしまった——。

ただ恥ずかしいだけではない。騎士として、王や姫を守らなければならないのに——浅ましい魔女に屈している自分が許せない。羞恥よりも激しい憤りに、全身の血が逆巻く。

「な、なんとということじゃ……ラーマ、これはいつたい……」

「おそろく、先日の戦闘で浴びた返り血が原因かと。魔王軍の術師が、アリシア様にいやらしい罫を仕掛けたのでしょ」

「ち、違う、これは……むっ!? むぶはっ!? ん、王が言いくるめられてしまったては、状況はさらに

悪化する。だから思わず口を開きかけたのだが——恐れていた通り、異形の淫棒がすかさず口の中へ押し入ってきた。

嫌悪に強張る舌先に、甘辛い肉塊が触れる。おぞましく振れた先端が舌の上で踊るようにくねる。

「ぬ……ぬう……あの男勝りなアリシアが、まるで卑しい遊女のような性戯を……」

王の無神経な眩きが、女騎士のプライドを無造作に切り裂く。

(おのれ……ラーマめ!)

口腔を埋め尽くす淫肉をすぐさま吐き出し、いやらしい魔女を討ちたいのに——アリシアの唇は逆に窄んだ。月光を浴びてヌラヌラと輝く異形の淫茎にますますいやらしく絡みつき、締め上げて——。

「む、んうう……ちゅっ! ちゅば、じゅちゅ!」

淫らな音を立てながら激しく吸い立ててしまう。

(あ、ああ……陛下の前で、こんな……イミス姫の前で、こ、こんな……)

騎士にあるまじき、卑しい姿。魔物の淫棒自体の穢らわしさより、淫戯をしている己自身を恥じて、アリシアのプライドが軋む。スライムに操られた身体が必死に抵抗して、白銀の鎧の中、しなやかな背や腕、脚が、小刻みに震える。

「これが、魔王軍の罫……アリシアは、いつたいどうなつてしまったのじゃ!」

「いかがわしい術によつて淫欲を異様に掻き立てられている様子。ごらんください」

魔女が手を振り、女騎士に淫棒をしゃぶられているオークが一步退いた。口腔に埋もれていた淫棒が半ばほどまで抜け出す——。

「んあ……あモッ!」

頬を赤らめたアリシアが慌ててオークの腰にしがみつぎ、細い首を伸ばして必死に唾え直す。

もちろん、アリシア本人の意思ではない。



無敵の騎士隊長がサキユバスの催眠に墮つ!!



騎士団隊長

# フィリア

淫魔洗脳調教

うえだ

小説 / **上田ながの**  
NOVEL

挿絵 / **アライノブ**  
ILLUSTRATION

催眠監修 / **ブラックキャット**  
ADVISOR

讀者近刊  
二次元ドリーム文庫 206

**マソらぶ!**  
幼なじみは性奴隷  
好評発売中!



エリヤ歴1584年

リゼント王国王都シユラク・リゼントにて繰り広げられた王国騎士団と魔族の戦いは、多くの騎士、魔族の血を飲み込みつつ、ついに最終局面に突入していた。

飛び交う火矢は種族関係なく殺害し、首都シユラク・リゼントにおいても、生首が片付けられない状況であった。

「だが、勝利は我々に」  
王が確信していたのには、一つの信頼があった。

王都中央広場にて美しい二人の女が向かい合う。

一人は金色の長い髪を後頭部でまとめた女騎士。年は見た目十代半ばほどか。いかにも騎士の誇りを示すがごとく切れ長だが整った瞳。瞳孔の色は青歴戦を勝ち残ってきた筋はあるが無駄のないすらりとした体型。その胸元と腰回り――最低限の部分を深紅の甲冑が隠していた。白い柔肌を剥き出しにした鎧。装甲を最低限にすることで神速の剣技を生み出す為の装備である。対し剣先に立つは、ウェーブがかつた艶やかな黒髪を背中まで伸ばし、戦闘中だというのに妙に艶のある動きをする女。頭から伸びたる二本の角。魔族の証であるそれは、まだ可愛らしい顔と対比され、見る者を必ず射殺す力を兼ね備えていた。

乳房が今にもこぼれ落ちそうな、ポ

ンデージを思わせる衣装で身を包んでいる。

「たわわに突つた胸元が大きく開かれたパールの衣装。」

キュッと引き締まった括れといい、ツンツと上向きがかった、ヒップといい、すべてが規格外で見る者の視界を奪わずにはいられなかった。現に敵であるはずの彼女と肉欲に溺れ、殺された人間はこの街にも存在した。男では彼女とは戦えない。故に女性であるフィリアが当てられた。

彼女の名はリーズ。人を墮落させ、精気を喰らう淫魔にして、その女王。背中には蝙蝠を思わせる二枚の翼がついているが、既に飛ぶ気力はない。

双方ともが戦闘の狂気に飲まれ、フィリアの全身には斬つた敵の血が、そしてリーズの方は重傷で、全身がズタズタに切り裂かれていた。

フィリアは油断なく剣を構える。

「人間ごときに敗れるとはね……」

彼女の軍は既になく、苦々しげにさくらんぼのような高貴な口を開く。口調は軽いが、根底にある口惜しさを隠しきれないといった失笑だった。

「……人間を舐めるな」  
愛した戦友達顔が浮かぶ。

騎士は怒りで吐き捨てるように言い放つ。凜と射る声が中央広場に響いた。

「……お名前：聞かせてもらえませんか？」  
「我が名はフィリア――王都最強のフェニックス騎士団隊長、フィリア二世」

フィリアムド!! そして、淫魔の女王

「貴様を斬る者だ!!」  
名乗ると同時に大地を蹴つた。

「斬れるものなら斬つてみなさい!!」  
リーズは立ち上がり、消えかけの魔力を爆発させる。だがそれはフィリアも同じ。リーズは二枚の翼を広げ、全身に力を込めると、圧縮した魔力弾をフィリアに向かい解き放つた。

並の人間であれば近づくだけで肉体が消滅するほどの閃光。魔族特有の瘴気の過度に混じつた魔法弾が飛び来る。光弾の直径は3メートルはあるか。死肉と煉瓦を焦がしつ、女騎士に迫る。激烈せめぎ合うかと思われたが、

「ヒュッ」

フィリアは無情にも、リーズの誘い攻撃を読んでいたか、一切れも動揺を見せずに冷静にかわす。

あつけなく敵の懐に飛び込むと同時に、間髪いれず胸元に剣を突き立てる。

「貴様の浅はかな考えなど、私には通じぬ!」

銀の刃が月明かりを反射して煌めいた。とても綺麗な光景だった。永久とも思われる煌めきを放つ聖剣は、魔族の女の胸へと沈み込んでいった。

「……ぐあああああああつ!!」  
それは既に決定した。

まだ蠢くグロテスクな心臓が、彼女の敗北を示していた。

「つ、強いじゃない……」

さすがは闇の女王。苦悶に耐えながらも、泣きわめかぬ。フィリアは消えかけの光に、王の誇りを見た。

「黒色の血が溢れ出していく。」

「ぐはあッ……!」

「とどめつ!!」

幾ばくかの彼女の誇りをくみ、介錯するかのよう、剣を引き抜き構えた。目を閉じ、胸のペンダントを握り締める。一体戦の始まりはいつだったか。死んでいった者達もこれで……。

と、突如リーズは笑い始めた。

「ふ、ふふ……うふふふ……」

「何がおかしい?」

さすがにこの奇妙な行動には、フィリアも動揺を隠せない。勝利したとは確信しつつも、気持ち悪さは消えない。死にかけの蝶は朱の唇に血を垂らしながら笑う。本当に楽しんでるに……。

あつけにとられるフィリアの顔に、艶やかな魔の指先が伸びてきた。

「ああ、本当に貴女は強い。強いわ。これは、すばらしいことよ……」

「すばらしいこと……?」

いくら何でも、相手は魔族。人間相手に最後の賞賛など、普通は期待できないだろう。だが敵の最後の言葉。フィリアは騎士として耳を貸した。

「私ね……嬉しいの……わ、私はね……貴女みたいな強い娘が……。だ、大好き……フフ……。貴女を私の物にできる。アハッ、私の物にできるっ! ああ、心の底からズタズタにできるっ……そう考えると嬉しくて堪らないのお!!」

「……よ、世迷いごとかつ……!!」

死にかけの人間は後何文字を世界に

残せるだろうか。フィリアは騎士として聞かねばならぬと思いがちでも、リーズの異常な行動に恐怖し、つい言葉を手を振らした。

何故か心が揺さぶられる。

相手はサキユバス。言葉が危険かもしれぬゆえと、フィリアは後付けで理由を自らつける。

「……そ、れはどうかしらね……」

ニタリツとリーズの顔は悪魔の微笑に変わる。受けるフィリアは背筋に冷たい物を感じ、髪をなぜられていた手を払いのけ、飛びのこうとした。

何かの直感。だが時既に遅し。

額に置かれた指先から、なにやら強大な魔力が流れこんでくる。

リーズは逃げられまいと、高速で呪文を詠唱する。

「グアオンテ・デメステア・デルメシアロドストゥス……」

「ぐあつ！ うああああつ！！」

電撃に近い痛み。だが、妙な場所、脳の内側が痛む。それは容易にフィリアの脳の中心部に侵入し、内部スパークを起こさせる。全身が歪んでいくような痛み。幻覚痛か？ 操りの術か？

いずれにしても、いまさらそのような物が間に合うか！

「こ、このおおつ！！」

フィリアは再び心臓を貫き、更にそれを大きく切り開いたのち、流れるような動きで、首を刎ねた。

「があああああつ！！」

「ぐあがつ」

最大の連続咆哮。

最早気品の欠片も見当たらない。

しかし……

「うふ……うふふふ……」

「なつ……」

刎ねられてなお、リーズは笑う。だが、笑いながら肉体は、塵と化して消滅していった。

「……」

勝つたのか？

生首にまで笑われては、未だ実感がわかない。

呆然としているフィリアが動いたのは、それから30秒ほど経った後だった。

今、実感はなくとも、フィナーレが流れずとも、確かに世界に正義と光が戻ったのだ。

「……やりました母上……私は……フィリアはやり遂げました……」

今は亡き母に憧れ、同じ騎士の道を行んだフィリア。

彼女が盾となり守ろうとした国を、今はフィリア自身が守りたかった。今なら分かる、身を捨てて国を守った母の気持ち。

「母上……フィリアはどんなことがあっても負けません。これからも王国の盾として、……母上のように、この国の希望となることを誓います」

その小さな呟きは、星々に届いたのだろうか。

若すぎる英雄は、大地に剣を突き立て、その分身に自分の身体を預けながら、静かに女に戻り泣いた。

\*

「このたびはよくやってくれたフィリア。お前こそまさに我が国の英雄だ」

王の賛辞が向けられる。

「よくやってくれた。お前がいなければこの国は終わっていた。本当に、本当によくやったぞフィリア」

騎士団長の言葉が胸に染み込んだ。

リーズを倒したことにより、フィリアは国の英雄となった。正直英雄などと呼ばれても歯痒さを感じるだけなのだが、自分への賛辞は自分も騎士に育ててくれた母への賛辞にも繋がる気がする。母が褒められているようで嬉しかった。

「母上……」

フィリアが考えているのは母のことばかりであった。戦闘に勝利するまでは彼女が目標であった。しかし戦争その物が終わってしまった今、何を目的とすればよいのか。無論平和は喜ぶべきこと。だがどこか寂しいような感情もないと言う嘘になる。私は役に立った。だが、過去形にはしたくない。

そのようなことを考えながら、フィリアは深夜、浴場に向かう道歩いていた。

胸に手を当て、心に幸せだった幼き日を思い浮かべる。稽古に厳しかった母も、フィリアが格闘訓練中大怪我した時は、慌てて飛んできてくれた。

「あの時ぐらいか。私が泣いても怒らなかつたのは……」

昔を思い出しながら微笑む。

脱衣所の扉を開けたのは誰もが既に寝静まっている時刻。

人付き合いがあまり上手い方ではないフィリアは、特別の待遇を頼んでいた。英雄だつて少しは一人の時間も欲しい。

だが心のどこかでは、やはり嬉しいのか、鏡に映るフィリアは、少しいつもより跳ねていた。誰も脱衣所に居ない時だけ鼻歌を歌いながら衣服を脱ぐフィリアだったが、今日は上着を脱ぎながら、胸の辺りで静止させ鏡を見る。歌も止まる。

「母上……」

古い、優しき繋がり肩傷をなぞる。フィリアの胸も、立派に膨らんで参りました。もうすぐ私も、母上のように美しくも気高い、騎士に……

若干危ないようにも見える、恋人に送るような視線を向けながら、くると一回転して、自らの姿を母に重ねる。まじまじと背中、腰の括れ、そして男の陥落ポイントであるたわわなバストを眺める。

特別措置で深夜に浴場が使える役だ。今だけはフィリアは、一人の少女に戻っていた。

「ふふふ……あはは」

本人は気がついていなかったのかも知れないが、本心はよほど嬉しかったのだらう。いくら一人で使えない行動だとしても、普段ならばあり得ない行動だだが、奥底にはしっかりと母の鍛錬が染

著者近況

みついている。明日からはきつと一人の騎士に戻り、心を入れ替え鍛え直すだろう。本人もそう思っていた。

「おえ……」

突如、鏡を見ていたファイリアが吐きもどす。

何だ？ いや、本当は理由は分かっていた。下半身を見たからだ。そう、ついあそこ、の。

「そうだった……」

口では言いつつも、始めから分かっていた事実。じわじわと悔し涙がにじむ。

「……よもや、このような肉体にされてしまうとは……」

浴室にてファイリアは、晒した柔肌にあつてはならぬ男性器を憎々しげに見つめる。つもりだったが、それもできず目を逸らす。

映し出されるのは透けるような白い肌（肌）に小さい黒くたくましい下手物（下手物）がぶら下がっている。……いや、ファイリアにはそう見えていた。あの戦い直後に変えられてしまった肉体。あれから三日経ったというのに、肉体は元に戻ってくれない。

「くう……」

いくら目を背けてもある物はある。何故こんなことになった。

全体的に細身ではあるが、鍛え上げられた肉体は美しく均整を保っている。しなやかで、艶やかな曲線を描く少し上向きがかった乳房も、引き締まった

括れも、完璧なプロポーションとは言えないが、ファイリアの理想とした母に近く、間違いない見る者の視線を引きつけ、いやもう少し成長しさえすれば、釘付けにできることだろう。なのに……。なのに……。

美しさに名残を感じる目を向けつつ、ファイリアはその場にへたり込む。かたや英雄、かたや性的に崩壊させられた身体。視界に映る自分の肉体に心が不安定になっていく。

気がつくと女騎士は自然と陰部へと手を伸ばしていた。

「んっ……はうっ……」

脱衣所に泣きそうな、そして甘い声が響く。

自らの女に触れ、優しく愛撫する。英雄となった自分。肉体を変えられてしまった自分。これまでとは違う状況に不安定になる心。それが女騎士をオナニーに導く。

「くう、くやしい。こんな匂いなんかで……私が……」

払いのけられない男根の存在。ならばすべてを男根のせいにする。

「んっ……ふう……き……」

気持ちいいよ、という言葉は、奥に飲み込んだ。一応脱衣所ということを感じているのか、あるいはわざわざそういう理由を言葉を飲み込むことで臨場感をあげ、実はプレイを乗りなかつた。もう何も考えたくない。

いというのが、正直なところである。

「んっ……男なんて……クライ……」

ファイリアの指が、胸以外の場所、更にその奥へと伸びていく。

ぐちよぐちよ分泌する汁。噎せ返るような牝臭が脱衣所いっぱいに広がっていた。

「ソッ」

その時洗面台が鳴った。流しへ石けんが落ちたようだった。

「キヤッ……」

指が止まり現実に戻ってくるファイリア。

いいところだったのに、と夢の中で思っていたが、我に返ると青くなつた。

「わ、わたしったら……」

声のトーンもさがり、さながら二重人格のようである。

「い……いかん。私は騎士だ。今は英雄だ。お、オナニーなど、不潔な行動は、いくら感情が昂ろうとも、たとえ獣臭い匂いが股間からしていようと……私は……」

嫌でも興奮させられてしまう匂いに、首を振りつつ、風呂場へと向かう扉に、ふさぎ込むようにもたれかかる。

「くそ……。こんなモノ……」

そう思いつつも、ペニス（ペニス）は嫌でもオナナの心を引きつける。触れない存在に心の目でにらみつけると、ありがとうとでも言わんばかりに、びくびくと赤黒い肉体を微擦撃させた。

腹が立つ、腹が立つ、腹が立つ!! 一番リラックスできるはずの湯船に

つかりながらも、闘争は続いていた。

「くそ……。私は騎士だ。この王国を守った、安らぎを守った英雄だ!!」

湯船に口までつかる。

「……しかし一体、誰の仕業だ」

「……」

いいや、言わずもがな犯人は分かっている。

（リーズ……）

ぎりぎり奥歯を噛み締める。死ぬ手前になって自分にこんな呪いをかけるなど、一体何の恨みがあるのか。いや恨みはあるだろうが、死ぬ間際に行うような術ではないだろう。

理由を問いただしてやりたい。せめてもう一度リーズに会えれば。などと考えながら湯船から出ようかと思っていた丁度その時。

（もつとこの状況、楽しんじゃえばいいのに）

どこかから、声が響いた。静かな、甘いような声だ。

「楽しむ？」

普通なら、まず声自体に驚くだろうだがファイリアは、内容について聞き返していた。

（そう。そんなに楽しい肉体、与えてあげたのに）

楽しい肉体？ 一体何のことだ。私は楽しい人間などではない。声は妙に霞がかって聞こえた。どこかで聞いた声の気もするが、あ、霞がかつてるのは、風呂場なのだから当然か……。

（とりあえず、射精しましょ。射精）  
受けてファイリアはぼうとした気的な



表情をしていた。  
「射精? ……そうですね、しましよ  
う、射精……」

遠くを見ながら、台本を読むように  
答える。

(フフ。淫魔の呪いなんだから、ちゃ  
んと快楽を受け入れなきゃダメよ?)

ファイリアは適当な大浴場内の床に腰  
を下ろし、股間に手を伸ばす。

「く、ふう……んっんっ」  
(フフ。そーそー。素直なのが一番よ。  
これまで何度語りかけても無視されて  
私寂しかったわあ)

「ひっく……。ごめん……なさい」  
(あらあらあら)

その謎の声は、急に優しい口調にな  
った。  
(さすがに今日はよく効くわね。あれ  
だけ欲求をため込みまくっての、自己  
オナニーだもんね。身体の淫気ムム  
ンだから、今は私の魔術が効きまくり  
さ、じゃあ今日も調教始めましょうか  
今日こそは「ペニス」射精、できるか  
な?)

「ごめんなさい。ペニスは男の子にし  
かないの」  
(大丈夫股間を触ってご覧なさい)

「……あつたー」  
無邪気にはしゃぐファイリア。

(ね? 今は夢の中だから、何でもか  
なのよ?)

「か、かなう?」  
(そ。それは貴女の願ひ。さあ、その  
可愛らしいモノを触つて)

はいと言つてファイリアは自らの下劣  
なモノを触るが、すぐに手を引つ込め  
てしまう。

(まったく、何なのかしら。何故ペニ  
スに触れないんだか……騎士の意地?  
そういうところ……壊してやりたいわ  
ね。ほら、ペニスに触れなさい)

ファイリアは答えず、盲目にオナニー  
をしている。ペニスには触れず。  
(……。ペニスでオナニーしなさい)

「……」  
(ペニスに触れるの。分かる?)

「……」  
受け流し続ける。これらやりとりを  
いくどか続けた後、女騎士は俯いた。

(どうしたのファイリア。早くオナニー  
するのよ?)

「……やだ」  
(は?)

寝言のような小さな声。  
「リーズ、許さない……」

心の奥底で声の主をリーズだと無意  
識に認める。  
(そうきたか)

声の主——リーズは苦笑いをしてい  
た。だが、その後すぐに、あざける鼓  
動が伝わるほどの冷たい声になる。

(へえ……人間の潜在意識って恐ろし  
いワねエ。これは久しぶりの「ホン  
キ」勝負だわ。クククク……)

「マケナイ。私は騎士。英雄だ。お前  
なんか……敵には負けない」

(え? 敵? 敵ってだれ?)  
「おまえ……だ……」

うつろに催眠にかかったような状態  
でしゃべり返す。  
(違うよ、リーズはいい人だよ?)

「え……」  
寸間、ファイリアの思考は止まる。

(だつて、気持ちいいことを教えてく  
れる人のことを、いい人、つて言うん  
でしょ? 違うの?)

追い打ちがかかる  
「あ……え……?」

(人間界では、恋人のことを「いい人」  
つていうじゃん? 恋人つて、気持ち  
いいことをしてくれるでしょ? それ  
が敵? おかしくない?)

「そ……そんなこと……ない……」  
(え、なんでなんでどーして? だつ  
ておかしいじゃん言つてることが。じ  
ゃあちゃんと1から10まで説明でき  
るんだよな?)

「あう……あえ」  
マシンガンのように。だが、決して  
おかしなスピードに感じさせないぐら  
いの早さで、言葉が紡がれる。

言葉が響き始めると共に、頭がぼろ  
つとし始めたファイリアはその言葉に反  
論することができない。声からだんだ  
ん自信がなくなっていく。艶がなくな  
り、どろぬまにはまっっていく。

(気持ちよかつたでしょ? さっきの  
思い出してよ。オナニーして、すごく  
気持ちよかつたんでしょ?)

「ああ……。ああああううう」  
ファイリアはいやいやをするように、  
頭を抱え、左右に振りだす。

(あは。ばーか。そんなことしても無  
駄よ。私の声は耳から聞こえてるんじ  
やないからさ。悪くない私にケンカ売  
つてきたの、貴女でしよう? ほら、  
早く答えなよ!)

決して目は覚まさぬ程度の強さで、  
問いかけが続く。一体声の主は何を聞  
いてきているのだ? 分からない。分  
からない分からない。

「け……けんか……してな……」  
(してるよケンカ。私のこと、悪く言  
つたじゃん)

「あう……ご、ごめ……」  
混乱のまま、子供のように謝罪して  
しまう。

(貴女が悪いこと、認めるのね?)  
「はい……」

(じゃああやまつて。悪いことしたら、  
それが常識だよな。ハイ)

「はい……」  
ファイリアは震える唇を開き、答える。  
「やだ」  
(え……)

ファイリアの中で、何ものが止めた。  
それをもし言つてしまつたら、重しを  
載せられる術にはまっつてしまつたら、  
もう抜け出せない。

(いい度胸じゃない)  
声は周りの草花をなぎ倒すのではな  
いかと思える物に変わった。

だがすぐに別の可愛らしい声に変わ  
る。  
(だけどお、結局気持ちよかつたん  
でしょ? それとも気持ちよくなかつ

たのかな?」

「あぐ」

再び手で頭を隠し、首を振る。

「ほら、正直になって。自分に嘘はつけないよ。貴女は今、悪いことをしてらんだよ。大嘘をつくっていう、悪いこと」

「う……うそなんて……」

「そう? じゃあ嘘じゃないか、よく思い出して。オナニーしていたことを。気持ちよかったか、良くなかったのか、よく……思い出すの」

「や、やだ、もうやだ、ゆるして」

何か得たいの知れない脳内の活動に怯えるフィリア。

「あれ? 何に怯えているの? オナニー。想像セックス。気持ちよくなかったの?」

「ぎ、きもちよかったです。だからもう許して。これ以上私の心に入りこまないで!」

認めてしまえばいい。そうすればこの苦しみから解放される。

「そう。分かった」

願い通りリーズは頷く。

「貴女って嘘つきの最低牝豚ね?」

「ひっ」

が、こちらが思っていた領きとは違った。

「その場限りの嘘をついたって分かるのよ。それが騎士のすること? 騎士団の倫理観ってどうなってるわけ?」

「ぎ、騎士団は関係ない」

「お母様の育て方が悪かったの?」

「お、お母さんを悪く言うな」

騎士団を、母を悪く言うことは許されない。必死に抵抗する。

「お母さんを庇うなんて立派ね。でもさ……こんな卑猥な身体になっちゃってお母さんどう思うかしらね?」

「こ、こんな身体にしたのは、あ、あなたでしょう」

「でもそれは過去のことでしょう? それに今こだわっているのは貴女。せつかく引き換えて得られた国の平和なのに、ネチネチネチネチポが生えたことばっか。恥ずかしくないのかしら、命を懸けた、王国騎士として」

「くっ……んぐ……」

「騎士道とこれは、関係ないって顔してる? ずぼし、でしょ? でも、よく考えてみて。一体何人の仲間が死んでいったの? その一人一人の顔、仲がよかった順番に思い出してみて。その人たちは、命さえなげうって平和を得ようとしたんだよね。なのに貴方はなに? 死んでもいいし、一生残る傷を負ったわけでもない。ただチンポが生えただけ。それをねちねち。英雄扱いつても、ようは美味いところどりでいいでしょ? みんなの血でできた平和なのに、貴女は寝ても覚めてもチンポポ。恥ずかしくないのかしら。こしばらくで、彼らのこと思い出した? 祈った? 騎士道精神で、何だっけ?」

……みんなは一人の為に。一人はみんなの為に。

フィリアの脳裏に言葉が浮かんだ。

「うあ……」

フィリアは叫び始めた。

「でていけ! でていけ、でていけ!」しきりに頭を硬い物に手当たり次第といった感じで、ぶつけていく。

「あははは。始めっから夢の中で、私に勝てるわけがないじゃない。これ、歴代の人間達すべてを犯し墮としてきて、淫魔の秘術だよ。思考を低下させて、潜在意識のみの状態にして、遠隔でたらしこむ。狙われたら最後の人間の頭なんてか〜んタン!」

「やめて。やめてくれ。大事な物なんだ。だから……」

「大事な物だから、壊してるにきまつてるじゃん。あんたは私を一度殺してくれたわけだしね。大丈夫だよ、朝目が覚めたら何されたかもコロッと忘れちゃうから」

「や、やだ。大事な物なんだ。まだ抱いていたいんだ。これがないと私は生きていけない。お願いだから」

「そうね」

「甘く、ゆつくりとした奏で方。何でもするから」

「ふ〜ん、何でもするのね」

この状況から逃れられるのならばそれでいい。逃げることを考えてしまふ。

王国にその知らせが届いたのは、それから約一週間後のことだった。

「リーズが……生きて……」

報告をもたらしたのは、リゼント王国の魔術斥候兵である。王国は王都決戦の後、魔族の生き残りを殲滅すべく各地に斥候を出していた。そのうちの一人が、リーズとよく似た魔力波を探知し、ついにそれがリーズ本人だということまで調べ上げたのである。ただ、この兵からの連絡はそこで途絶えた。

「我々はなんとしても女王を……リーズを殲滅しなければならぬ。これは至上命題である」

騎士団にとってこれは緊急の課題だった。

それはフィリアとてよく理解している。あのリーズが生きていた。何故なのか理由は分からないが生きていたのだ。必ず滅ぼさなければならぬ。

が、この作戦会議の最中、フィリアはまともに意識を集中できずにいた。原因は陰部に感じる熱い火照りである。あれから一週間、フィリアはことあるごとにあの心の声を聞いた。何でもすると答えてしまつてから、何故だか声には逆らえない。言われるがままに肉棒を扱きもしてしまつていた。が、最後のところで射精にまでは至っていない。騎士としての矜持が、ぎりぎり

のところを女騎士を支えていた。それが裏目に出たというべきだろうか? 常にベニスを扱きたいという欲求に耐えなければならなくなつてしまつたのである。

「耐えるくらいわけないわよね。だつてリゼントの盾なんだから」

ほーら  
だんだん熱く  
なってきた

服を脱ぎたく  
なるだろ？

くくく  
我が術中に  
堕ちたな

この学園で  
俺を阻む者は  
もういな…

退魔教師の  
教育的指導が炸裂！

退魔教師  
橘 愛莉を  
甘く見ないで  
欲しいわね

あんなチンケな  
催眠術  
かかるわけ  
ないでしょ

赤点よ





やり返せ!!  
なさい!!

毎年から

退魔教師  
橘愛莉

幻惑の補習授業

漫画 COMIC ぱふえ



学園の生徒に  
手を出させない  
わよん♡

この私が  
いる限り





みんなー  
もっと頑張ら  
ないと留年よ

この程度の  
テストで赤点  
だなんて

頭悪い以前に  
やる気がない  
証拠なのよ!

今日ができる  
ようになるまで  
帰さないから

覚悟  
なさい!!



橘先生  
おつかねえ

だが  
それがいい



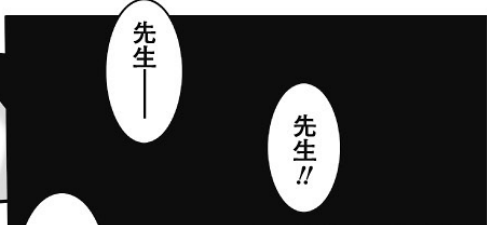
ホーソン

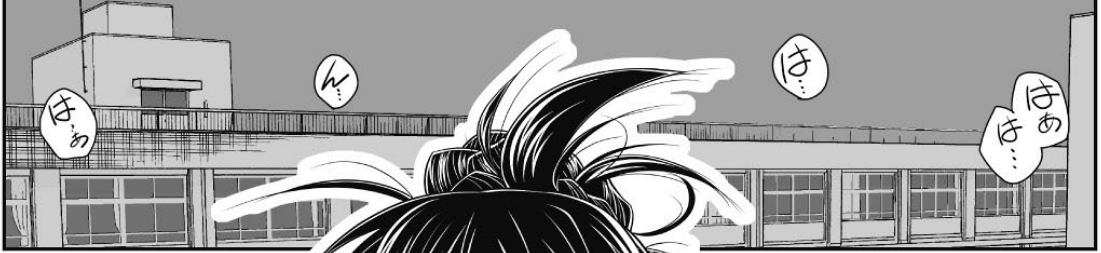


でもちゃんと  
できた子には  
ご褒美を  
あげるから

頑張りま  
しょうね♥

ニハ♥





ちよつと  
脱ぐわね

暑...うい

あゝ

はあ  
はあ

しゃ

は...あ



大丈夫  
ですか？  
せ先生



おおい  
先生...

ん

見えた

何だ  
急に!

なんかな?  
エロいかな?



は...今日は  
暑いわねえ



んー?  
どうしたの  
みんなあ

集中しな  
さいよお



お前は「先生」と呼ばれるたび発情する



性感が高まり  
理性が薄まる



そして「先生」の言葉で

これでいいんですね？

えっ!?

ああよくできたわ…

ね…



クワン

「よくできた」

それじゃあ



ええええ  
えええ!

せ先生  
何を？

フフフ♡

うわっ  
ちよ…



やだ私  
何を...

そうだわ  
ご奉仕しなきゃ  
いけないのよね

何って...  
頑張ったら  
ご褒美あげる  
約束でしょ♥



まのこ  
したくて  
たまらない

先生!  
ぺろぺろっ  
て...うわ♥





「先生」！  
ヤバイってこれ  
だ…め！

お乳で挟ん  
じゃおっと

ふふふ♡

ああ  
やあ♡

うおお  
マジかよ  
あの  
橘「先生」が

胸…すごく  
敏感に…っ  
なって♡

「先生」俺も  
してくれよ  
くっそー

あは♡  
おっぱいの中で  
暴れてる♡

でもコレ…  
やばくね？



んんっ  
元気な  
おん♡ん♡

うわあ  
そんな  
したらあ

ふおれなら  
補習合格よ

くすくす♡  
もう限界？

おん♡ん♡  
ガチガチで  
熱くなっちゃ  
ってるわよ♡

いっ♡  
おん♡

あ♡







体が疼いて  
たまらねえん  
だろう？

おおお  
お掃除  
フェエラまで

「よくできた」  
ご褒美に



よくできた



「先生」  
「よく  
できた」♪



なあ？  
「先生」♥

は...あ  
これ...挿れ  
ちやうのお

貴方の...  
お■ん■ん  
何点...か

愛莉の  
お■んこで  
採点して  
あげ...る



俺のチ■ポ  
ご馳走して  
やるよ♪

あ...



「よくできた」  
生徒には  
ご奉仕  
するんだろ？

にや

# 女少尉 催眠調教に墮つ

き もり や ま す い どう

小説 / **木森山水道**

挿絵 / **ジョニー**



伶俐な女軍人が、  
催眠調教に溺れゆく  
!!

## 【特別指令書】第一〇四号

山本征一特務准尉

この者に南雲和泉少尉の懐柔を命じる。

陸軍第六支隊司令官 東城平一郎

「何だ貴様ら、そのていたらくは！」  
澄み渡る空の下、屋外訓練場の片隅に女少尉の怒声が響き渡る。

歳の頃は二十代半ば。「氷の少尉」と呼びたくなる女軍人だった。

切れ長の目は研ぎ澄まされたナイフのように鋭く、尖った顎の細面が彫像めいた怜悧な美貌を際立たせる。

身に纏う軍装はバリツとしていて少しもよれていず、持ち主の厳しい性格を物語っていた。

そんな女少尉は女の魅力も豊富だ。胸元は砲弾を抱えているのではないかと疑いたくなる成熟ぶり。

腰も細く、長い手足のしなやかさは野暮つたい軍服越しでも窺えた。

尻まで伸びる黒髪は艶やかで、清水の流れを連想させる清廉さだった。

「南雲和泉少尉、これは一体どういうことです」

女少尉が振り返ると、山本征一特務准尉が立っていた。

歳は二十代後半。Yシャツにスラックス、上に白衣を着た眼鏡の男だ。

基地では軍医を務める士官だが、こけた頬と土気色の肌が薄気味悪さを振り撒いている。

軍医の視線は、地べたに大の字になりながら肩で息をしている南雲の三人

の部下たちへ注がれている。

「どうもこうもない。私の訓練についてこれず、倒れてしまったのだ」

「訓練ですか？」

「ああ。たかだか、野戦訓練と格闘訓練を三時間ずつだ」

「……今日は休日ではありませんか。日頃の厳しい訓練の疲れもあるでしょう。もう休ませたらどうです？」

南雲は柳眉を逆立てて怒鳴った。

「これくらいで音を上げる弱卒に休みなど不要だ！ 鍛錬を欠かしては、いざと言う時に役に立たん！」

「……左様ですか。ところで、少尉殿も同じメニューをこなされたので？」

「無論だ。私が敵役になり、曹長、軍曹、伍長の三人と戦いもしたしな。一度も負けなかったぞ」

准尉が彼らを見やると、気がついた三人は気まずそうに目を逸らす。

「士官学校を主席で卒業したとは聞いてましたが、ここまで優秀とは」

山本が感心したように呟いた。

「フン、私などただの新兵だ。他に優れた者などごまんといる」

言葉には謙遜の響きはなく、本音なのだろうと山本は感じた。

「なるほど……容姿端麗な上に、ここまで実直で実力もあるのなら、是非とも懐柔……完全に手懐けておきたいという上層部の気持ちも分かる……」

「ん？ 何か言ったか山本准尉」

「あ、いえいえただの独り言です」

誤魔化しの愛想笑いを浮かべながら

山本が続けた。

「そうそう、先日の健康診断に関してお話があるのですが、医務室までお越しいただけますか？」

南雲が部下たちを一瞥する。彼らはまだ激しくあえいでいて、とても訓練を続けられる状態ではなかった。

「了解した……貴様ら、今日の訓練はここまでにする！」

すると、彼らはよたよたと立ち上がり、青息吐息で「訓練、感謝します」と言いながら、南雲に敬礼した。

「躰が行き届いているようですね」

「そうだ。軍人たるもの、力だけでなく礼節も弁えねばならんからな」

キビキビと歩きながら、女少尉は当たり前前のことのように断言した。

「よし、健康診断の時に軍帽に仕込んだ催眠導入装置が上手く効いたぞ」

蜘蛛が巣に絡みついた獲物を見るような目で南雲を眺める山本。

何食わぬ顔で医務室に誘い込み、隙を見つけた今しがた、手持ちのリモコンで装置を作動させたのだった。

南雲は虚ろな目で人形みたいに突っ立っている。

「では、所属と名前を言いなさい」

女少尉の目を覗き込みながら言う。「陸軍第六支隊陸戦隊……第三小隊長……南雲和泉少尉……」

途切れ途切れに紡がれる言葉は機械的で、普段の覇気がまるでなかった。

「セックスの経験はあるのかね？」

突拍子もない質問だが、山本にとつてはひどく重要な事項だった。

「ありません……」

山本が口角を吊り上げる。「では処女かね？」

「はい……」

「自慰の経験は？」

「二回です……」

質疑応答は暫く続き、最後に山本が厳かにこう言った。

「それでは南雲少尉、貴官の新しい任務を教えよう……」

じっくりと南雲の目を覗き込み、ワタシの催眠術で牝ブタに調教されることだ。復唱したまえ

「はい……自分は……山本准尉に牝ブタに調教されます……」

南雲和泉は虚ろな声で言った。

任務一日目  
調査の結果、催眠術を使った性奴調教で懐柔するのが適切と確信する。

催眠術の持続期間は短期であり、効果を永続させるには本人の心からの同意が必要となる。

故に、まずは身体を淫らにし、ゆくゆくは快楽を餌に完全籠絡する。

本日かける催眠術は次の通り。

一、山本征一に性奴調教されるのは正当な訓練と認識させる。

一、口淫の技術、知識、愛着を付与。

一、精飲で絶頂すると認識させる。

一、訓練の記憶を封じる。

※

「ハッ……私は……？」  
「おや少尉殿。気分でも悪いので？」  
向かいの山本が怪訝な顔をしている。

「いや、なんでもない」  
一瞬、立ち眩みめいた感覚に襲われたが、もうなんともない。  
（あれしきの訓練で疲労したのだろうか？ だとしたら私も情けない）

胸中で溜め息をつくとき、山本が言った。  
「今日の特別任務に入らせていただきますがよろしいですか？」  
「了解した」

軍靴を鳴らして敬礼し、教官になる男に凛々しく挨拶する。  
「本日の牝ブタ調教をお願いする」  
「こちらこそどうぞよろしく」

山本は笑みを浮かべながら歩み寄ってきて、背後にびったり密着した。  
肋骨の深く薄い胸板を背中にぐいぐい押し付け、腰も尻に、太腿も太腿にびったりとくっつけてくる。

衣服を挟み、異性のゴツゴツした肉と温もりが伝わってくる。  
「……密着し過ぎではないのか？」  
訓練とは言え、無防備な背中にこうも貼り付かれては正直不快だった。

薄気味悪い男の胸と触れ合う背中に、ゾッと寒気が走り抜ける。  
「いえ、これくらい当然です」  
だが、教官にそう言われれば従うしかない。

（これは訓練だ。気に入らないことがあっても耐えねば）

あつても耐えねば）

「まずはこのご立派な巨乳から調教することにしましょう」  
両腋の下から手が渡ってきて、開いた十指が胸元に貼り付いてきた。

「胸を性感帯に鍛え上げることが、立派な牝ブタになるための第一歩です。まずは感度を調べてもらいます」  
「わ、分かった……」

枯れ枝みたいに細い指は、軍服ごと乳房を揉みしだいてくる。  
「ほう、とても掴みきれませんなあ」  
手の平から乳房をはみ出させながら、握り締めては放す動作を繰り返してきて、その度に乳肌が伸縮させられる。

指に押されて乳肉が深く沈み込み、息が詰まる思いを強要され、男に胸を揉まれてはいる実感を味わわせる。  
「どうですか？ 気持ちいいですか？」  
触診する医者みたいに山本が言う。

「……いや……気持ちよきは」  
肉を伸び縮みさせられているという感覚しかなかったので、そう言う。乳首の辺りはむず痒い気がするが快感と言うほどでもない。

「ふむ、ならばこれでどうですか？」  
下乳に手の平を貼り付かせ、乳房の底から全体を強く弱く揺すってくる。振動が乳房の内部を駆け抜け、じゅんという重いむず痒さを残していく。

「こんなのも別段……」  
「おっと、まだこれからですよ」  
山本は底からの揺さぶりと胸揉みを交互に行い乳房を責め立て始めた。

（乳肉をひしゃげさせられたかと思えば、乳房の内部から揺さぶられる。ん……これは……くう……）

胸揉みでは乳房の表層に、胸揺すりでは乳房の内部にほの甘い痺れが染み渡り、蓄積していく。

ぐにぐにゆ、ぶるぶるつ、ぎゅち。  
「んっ……はあ……んふう、はあ……」  
しつこく責められている内に、乳房が火照り、甘い痺れが濃くなってくる。

「感じてきたようですねえ。ではじかに触れさせてもらいましょうか」  
腕まくりをすると、こちらの軍服を乱し、服の中へ両腕を入れてきた。

生温かく、骨ばった腕が柔肌を這い進む。ブラのホックを外し、服の中で転げ出た瑞々しい乳房を鷲掴みにする。  
「く、ふうっ……むねが……！」  
布越しで揉まれていた時と違い、今度はダイレクトに指が乳房に食い込んでくる。火照る乳房にピリッという快感電流が走り、思わず背中が仰け反り、声が上擦った。

山本がくくくと忍び笑いだした。  
「ほう……流石、若い上に身体を鍛えているだけあって、随分と弾力の強い胸ですね。肌もよく吸い付いてくる」  
足を絡ませ、背中に胸板をグイグイ押し付けながら、肉砲弾を下から上へ捏ね、ギョッと握り潰していく。

「ふはあ……はあ……ああ……」  
「胸、どんな具合ですか？」  
教官が尋ねてきたので、気恥ずかしかったが忠実に報告する。

「んんっ……どんな熱くなってる……くふう……痒みみたいな感覚が……」  
生まれて初めて感じる感覚に戸惑いながら、声を震わせて返答する。  
「それが牝ブタの快感です……よく覚えていてください」  
（これが牝ブタの快感……？）

それは、乳房の中がドロドロに溶けて渦巻いているような感覚で、もつと味わいたいと思わせる魅力があった。  
「つくう、そ、そこは……！」  
シャツに浮き出ている指たちが、いつの間にか勃起していた乳首の周辺に集まりだした。

布を恥ずかしく盛り上げる肉柱は小指の先ほどのサイズだった。  
「少尉殿の勃起乳首は、グミみたいに弾力が強いんですねあ」  
両側から指で潰し、弾力を確かめるようにクニクニ揉んでくる。  
かと思えば、一本の指でコロコロ転がし、人差し指の腹で乳輪ごと乳房にめり込ませる。

「んふう……はう……くふう……」  
「乳首はどんな具合ですか？」  
また教官が尋ねてきた。

「はあ……挟まれて潰されると、乳房の中までピリッと痺れて……転がされると乳首の根元に甘い電気が走ったよう……くうっ……」  
甘くあえぎながら掠れ声で報告すると、教官は褒めるように言ってきた。

「それも牝ブタの快感ですよ」  
片手で乳房を揉み、別の手で乳首を

（著者近況）



転がしながら教官は続けた。

「では、今度は牝ブタ絶頂快感を体感していただきましょうか」

「牝ブタ……絶頂快感……？」

調教者はさかんに胸を揉み、執拗に乳首を刺激してくる。

牝ブタ快感と教えられた感覚が、乳房と乳首でどんどん膨れ上がり、同時に頭の中が白んでくる。

「今、身体はどんな具合ですか？」

「胸も乳首も牝ブタ快感で一杯で……んあ、すごく熱い……身体も熱く……」

……ああ、私の身体は一体……」

男と密着する背中が、尻が、太腿が粘り癒癒を起こしていた。

弄られる胸だけでなく、身体に細かい汗が浮いてきて、軍服の中が急速に蒸れていつている。

心臓の鼓動が早くなり、吐き出される呼吸は熱く重くなってきた。

「それでいいんです……ひどく身体をビクビクさせて……絶頂はもうすぐですよ……ほらほら、胸を揉まれて乳首を弄られ、達してしまいなさい」

乳房を弄る手の平も熱くなって汗ばんでいた。胸肌にびったり吸い付いて蠢き、乳首に自身の熱を染み込ませ指紋の凹凸で擦ってくる。

「チュブ、レロレロレロ……」

「ああ……ああ……アアア」

乳首と乳房から快感を搾りながら、山本は唾液たつぷりの温い舌でうなじを舐めしゃぶってきた。

厚い舌のプリプリした感触が這い回

り、細かい汗の浮いた美肌に生温かい吐息がはあはあと吹き付けてくる。

「あ、こんなの初めてだ……んアア！」

乳房の中で荒れ狂う快感の奔流がますますうねりを増し、キーンという耳鳴りが耳の中で鳴り響く。

「ブジュルブジュルジュルツッ！」

音を立ててうなじを吸われ、乳首を乳房の内部へ強くめり込まれた刹那、

「ああ——んぐぐぐううっ！」

怒涛のような快感の衝撃が襲い掛かってきた。天高く打ち上げられ、快楽の中で爆散したかのような甘美感。

軍靴の中で足指が丸まり、背筋が仰け反り、乳首を押さえられている胸が、はしたなく前へ突き出る。

「はあ、はあ……これは……一体」

十秒近いエクスタシーの波が過ぎ去った後、呆然と呟いていた。

「それが牝ブタ絶頂快感です。よく覚えておいてください」

満足そうにそう言うど、教官は下着ごとストラックスを下ろし、手近なベツドに腰掛けた。

「さあ、今度はフェラチオ訓練です。フェラチオです。分かりますか？」

「は、はい……」

経験はないはずなのに、何故かできる気がしたので首肯する。

（だが、これを舐めたり口に含むのか）

不健康そうな持ち主とは裏腹に、逸物は逞しかった。

手で掴んでもあまりありそうな長さ

を誇り、太さは拳銃の口径よりも太い。

剥き出しの亀頭は黒ずんだ紫色をしていて、落下傘みたいに開いている。

竿の色も黒ずみの強いチョコレート色で、ポコポコ浮き出る血管もグロテスクな青紫色をしていた。

（うっ、この臭い……）

跪き、肉棒に顔を近づけると、亀頭からイカめいた悪臭が漂ってきた。

（口に含むなどとても……だが、フェラチオをしなければ、牝ブタになれないのだ……牝ブタになるために！）

取りあえず、先っぽを舐めてみようと思ひ、おずおずと舌を伸ばして尿道口を一舐めする。

（な……に……？）

不思議なことに胸一杯に陶醉感が広がって、嫌悪感が瞬く間に霧散した。

気がつくと、亀頭をパクリと啜っていた。唇の裏でカリ首の裏をガツシリ密着させ、正面から尿道口をペロペロ舐める。

「その調子です。亀頭がドンドン熱く気持ちよくなってきましたよ」

教官の言葉に自信が湧き、心の赴くままに口淫を行う。

「ジュブウ、ジュブツ、ジュブジュブ」

窄めた頬の裏で亀頭を包み込み、髪が舞うほど頭を激しく前後させる。

手は竿を握り、シュツシュツと抜く。

「どうです？ ペニスは熱いですか？」

……ああ、口はそのまま、イエスならピースをしてください」

燃えているように熱いので、上目遣いをしてしながら空き手でピースをする。

続けて、ペニスは硬いか、ドクドク脈打つてるかなどを尋ねてきたが、鉄のように硬く、心臓みたいに脈打っているの、奉仕の手を休めずにピースを送った。

「フェラチオは楽しいですか？」

上気した顔を見せながらピースする。

最初に嫌悪感を感じたことが嘘のように、今ではフェラチオをすることが楽しくて嬉しくて仕方がなかった。

プリプリした亀頭や竿の脈動が唇や口内に響いてくるとじいんと胸が熱くなる。

舌でカリの裏をほじり、皮の繋ぎ目をチロチロ舐めていると、肉棒がググッと膨らむのには胸がときめいた。

（ああ、すごい……牝ブタ絶頂快感くらいいいかもしれない……はああ、精液は……精液はまだなのか……早く飲みたい）

フェラチオなど初めてで、ましてや精液を飲んだことなどないというのに、どう言うわけか、早く口内射精して欲しいと熱望してしまう。

「チュツ、チュツ、んはあ、ンムツ、んふうっ、プチュツ、チュブ……」

鼻息を荒らげながら、口の中に含む亀頭をバキュームし、竿を抜く手の動きを早める。

（か、カウパーが出てきたぞ……ああ、舌に垂れて……んア、なんだ……？）

汁は粘く苦しよっぱかったが、その味は何故か、胸を蕩かせるような多幸感を感じさせる。

(汚らしい汁のはずなのに……はあああ、もっと舐めたくなくなってしまおうっ)

竿を抜く手が速まり、亀頭を吸いしやぶる頭の振りが激しくなる。

「精液を飲みたいのですね？」

空き手でピースを送りつつ、ツヤツヤの紅潮顔で亀頭冠まで呑み込み、何度も何度もバキュームする。舌はピクピク膨れる亀頭表面を執拗にねぶる。

「ならばたつぷり飲んでください……出しますよ……んっ、むうん！」

激しく脈動していた熱い亀頭がプツクリ膨れ上がり、最後の痙攣をした。

ドビュビュビュッ！ ドビュンツッ！

山本は頭をガツン握り、遠慮なく精液を放出してくる。

(んぐああ……精液が……ぐう、口の中に飛び散って、へばりついて……)

栗の花めいた匂いが口内に充滿し、濁液の重く粘り感触が舌に伸しかかる。

(苦い……だが美味いっ……んぐっ……喉に絡みつーんあツツッ！)

ゴクンと嚥下した瞬間、再び牝ブタ絶頂快感に襲われた。喉を蠢かす度に新しい快感波動が押し寄せてくる。

牡棒を啜えたままの体勢で、ブルブルと淫らに総身を痙攣させる。

(ああ……気持ちいい……)

「ザーメン美味しかったですか？ 牝ブタ絶頂快感きましたか？」

亀頭を啜る唇の端から白濁の雫を垂らしながら、ツヤツヤに上気しきつた顔を上目遣いで教官に見せる。

そして、微笑とWピースを送った。

## 任務二日目

本日は胸の調教を進めると共に、アヌスの開発を始める。

また、他人に見られることで昂る性癖を植えつけることを試みる。

本日かける催眠術は次の通り。

一、訓練の記憶を蘇らせる。

一、山本征一に性奴調教されるのは正当な訓練と認識させる。

一、視姦で感じることを認識させる。

一、男を挑発する台詞を刷り込む。

一、胸淫の技術、知識、愛着を付与。

一、精飲で絶頂すると認識させる。

一、尻への挿入を快感と認識させる。

一、訓練後、少尉及び関係者の記憶を封じる。

南雲と山本は、屋外訓練場の外れに最近できたプレハブに来ていた。

何故か、外壁一杯に段ボールがびっしりと貼られていたが、それを除けば何の変哲もない金属造りの物置だ。

「今日の訓練を始めましょう」

「牝ブタ調教を宜しく頼む」

軍靴を鳴らして教官に敬礼すると、彼の勧めで椅子に座る。

窓のない六畳ほどの内部には椅子が二脚あるだけで、あとは山本の鞆のみふたりきりの室内は、天井の照明が隈なく照らしている。

ふと昨日のことが頭に浮かぶ。

目今の教官に、初めて女の快感……いや牝ブタの快感を教えてもらった。まだ馴染みが薄いのが、不快なものではなかっただけは断言できる。

(思い出すとドキドキする……立派な牝ブタに近づいている兆候だろうか)

だとしたら、実に喜ばしい。

特別任務の完遂に近づいている充実感を感じながら、胸元に手を伸ばした。

軍服とアンダーウェアを崩し、愛用しているブラのホックを外す。

カップを押し付け、ボロン、と乳房が軋げ出た。フルフルと重たげに振幅した後に落ち着く。

「手は頭の後ろに」

そう言いながら、山本は乳房に引っかけたカップを上乳に乗せた。

「軍服の上から見ても大きいのに、裸にすると更に大きい……着やせる乳房、と言うところでしようか」

「訓練中に邪魔にならないよう、締め付けの強いブラで抑えているからな」

「なるほど……それで、サイズは？」

「九十一センチのGカップだ」

将校らしく背筋を伸ばしているのに、肉砲弾は堂々と前に突き出ている。

製図したみたいに美しい円曲線を描きながら膨らんでおり、見る者を圧倒する量感を振り撒いている。

「乳輪まで抜群とは恐れ入りますよ」

程よい大きさの乳輪は目に眩しい雫色で、肌色の乳肌の中で輝いている。

乳首は球形と言うよりは円柱に近く、勃起するとその輪郭は明確になる。

「そんなに近づく必要があるのか？」

鼻の先つぽと乳首をほとんどくっつけて見つめているのだ。

規則正しく吹いてくる鼻息が乳肉の表面を撫で、胸の谷間に入ってくる。(こんな風に……胸を男に見られるのは初めてだ……)

無遠慮に見られ、正直あまり言い気分ではなく、吹き付けてくる鼻息も気色悪かった。

だが、これは訓練で相手は教官。文句を言うわけにもいかない。

「何をおっしゃります。これは、見られるだけで快感を感じるようになるための訓練なのですよ」

「そう、なのか……？」

理解しかねたが、教官が間違いを言うはずはない。

「さあ、牡の視線を意識して」

教官は瞬きを忘れ、穴の開くほど見つめてくる。

「んっ……はあ……はあ……」

(どうしたんだ……胸が締め付けられているみたいだな……)

矢のような視線を意識すると、それが当たる乳首が、火照ってきた。

「感じてきたのですね……乳首や胸を調教された時のことを思い出してください……あの快感を……」

心に染み入ってくるような低い声を聞かされていると、昨日の快感が乳肉や乳房に蘇ってくる。

乳肌まで火照りだし、むず痒さめい

ら

た仄かな快感まで起こりだす。

「まさか……見られているだけで……快感が起るなんて……」

心臓の律動が早まって、胸が甘く詰まり、息にこもる熱が上がつていく。

「はあ……はあ……興奮する……」

「いい反応です……では、ワタシを煽ってください。乳房を持ち上げたり落としてたりして揺らし、もつと見てくださいと懇願するのです」

（む、胸を見せつけるなど……）

軍人としては相応しくない行動だが、教官の言葉には逆らえない。

「こ、こうか……」

言われた通り、両胸の下乳を手の平で持ち上げ、落とすことを繰り返す。

「もつとゆつくり、もつたいつけて」

言われた通り、亀の歩みくらしいスローに乳房を持ち上げては、ゆつくりと手の平を抜いて自由落下に委ねる。

九十一センチの肉砲弾は、落下する度にフルンフルンと上下左右にゆつたり弾み、乳肌を波立たせ、やがて落ちていく。

見られて興奮したために、柔肌には細かい汗が浮いていた。乳房が弾む拍子に体臭と一緒に肌から飛び散り、周囲にほの甘い牝臭を撒き散らす。

「黙ってないで台詞も！」

「あ、ああ……わ、私の胸を見ろっ」

「そんな将校喋りでは駄目です。甘い声で牡に媚びて……牝ブタらしく！」

叱咤されると、どういうわけか求められている喋り方が湧いてきたので、

その通りに言ってみる。

「め、牝ブタのいやらしいおっぱいを、どうか鑑賞ください……」

「いやらしいおっぱいは具体的にどういやらしいのですか？」

「いやらしいおっぱいは……汗をかき……いつもよりも張り詰めてすごく火照っています……乳首もジンジンして、痛いくらいに勃起してしまってます」

半裸の軍服少尉は、教官に促されるまま商売女のような口上を口にする。

「どうしてそんなにいやらしくなったのですか？」

「教官様にじつと見られて、指導していただいていたら勝手に……」

「牡を扇情している内に……牝ブタ少尉殿は発情されたわけですね」

教官は厳然と断言した。

「発情……触られてもないのに」

そうなることが目的の訓練なので悪いことではないのだが、ショックを感じずにはいられなかった。

誇りある軍人としては、相応しくないのでから。

「結構なことですよ。順調に牝ブタとして鍛えられている証ですよ」

褒めるように言ってくる。

それを聞いた途端、自分は間違っていないという気持ち湧いてくる。

（そうだ、これは訓練……牝ブタに近づくことで正解ではないか）

今しがた感じた汚辱感も塗り潰し、士気がいよいよ高まってくる。

「ではパイズリ訓練へ参りましょう」

「パイズリ……？」

「そうです。分かるでしょう？」

見つめられていると、経験はないができる気がしてきた。

山本は股間を露出させた。

（これを胸で挟んで……抜いて射精させればいいんだ……しかし……）

昨日フェラチオをしたモノとは言え、胸で挟むのには若干抵抗を感じた。

乳房を見ながら扇情されたためか、逸物はもう完全に勃起している。

剥き出しの亀頭からも、ムンムンと牡臭さが放たれている。

「さあ、パイズリ訓練です」

教官が促してくる。

（これは訓練……やらなければ……）

意を決して跪く。両手で乳房を開いて谷間を広げ、胸板に裏筋を密着させて乳房を閉じた。

タパン……フルフル……

（これは……ああ……すごい……勃起ペニスの感触が胸に伝わって……）

内側から乳肉を押し広げる牡棒は、胸が焼けてしまいそうなくらいに熱く、鉄棒みたいに硬かった。力強い脈動は、乳房を芯から揺さぶるほど。

乳肉を飛び越えてびよこんと飛び出している亀頭を見ると、胸がトクンと高鳴ってしまう。

先ほどまで感じていた嫌悪感が嘘のように消滅し、代わりに昨日初めてフェラチオした時の官能が湧いてくる。

「そんなにうっとりモノを見つめられるとくすぐったいですな」

そう言うと、山本は足下の靴から一本のボトルを取り出す。

トロ〜ツ、ピチャアア〜

「ローションで滑りをよくしますよ」

粘り気の強い粘液は、真上から亀頭をデコレートし、乳房も染め上げていく。ペニスと乳肌の内部にも染み込んでいき、両者を粘らせる。

「ではお願いします、少尉殿」

「あ、ああ……」

（なんていやらしい光景なのだ……）

照明を浴びて極彩色にヌメ光る亀頭と乳房は、見ているだけで興奮する。

ニチャ、ヌチュツ、ニチュニチュ。外側から乳房を掴み、挟み込む肉棒を押し潰すように前後に擦り合わせる。

熱く硬い肉棒は、乳肌に粘りつきながら内側から押し返してくる。

ずつしりとした重量感と存在感、乳肌を越えて手に伝わってきた。

（硬い……熱い……あんっ）

逞しい牡棒に胸奉仕しているという実感が、官能的な陶酔をますます深く大きくし、奉仕心を膨らませる。

「その調子です。気持ちいいですよ」

褒め言葉が更に心を沸かせた。

ニチャニチャニチュニチュッ！

乳肌で肉棒を前後に擦るだけでなく、上下に擦り上げる動作も織り交ぜる。

乳肌ですつかり亀頭を包み込み、上下左右に揉みこむと、気持ちよさそうにビクついてくれる。

ローションのヌメリが利いているのでペニスや竿の研磨は至極スムーズだ。





# 毎朝の習慣



千客万来!  
如月神社にやってくるのは  
福!? それとも鬼!?



怨霊退散!!

ふたご  
巫女

妹を追う謎の美女

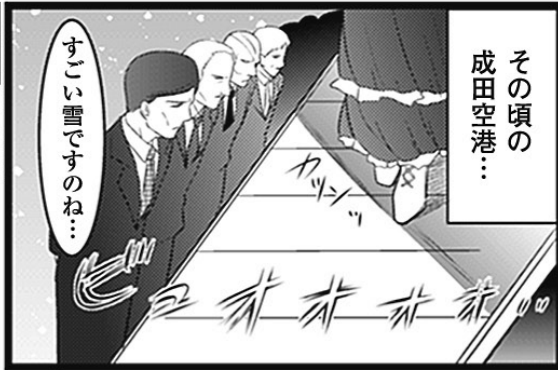
六巻

漫画 COMIC かのう 嘉納あいら

# ナゾの女性



如月珠音  
如月神社の双子巫女の姉。おっとり巨乳で、男の靈に憑かれやすい。



すごい雪ですね…

その頃の  
成田空港…

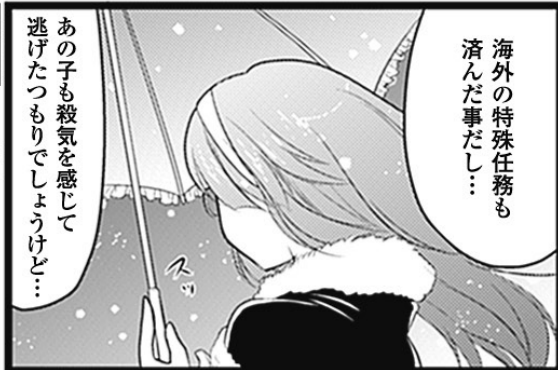
# 一先ず本題



今更言うのも  
なんだけど…



如月鈴音  
如月神社の双子巫女の妹。靈力は弱いがしっかり者の常識人。



あの子も殺気を感じて  
逃げたつもりでしょうけど…

海外の特殊任務も  
済んだ事だし…



一体いつ帰るん  
ですか？

ここにきてもう  
半年近いですけど…



真中  
如月神社に押しかけて居候している17歳、珠音の中学時代の同級生。



ザンネン

もう  
お見通し☆



帰り方が  
わからないなら  
私が送って…

違う!!



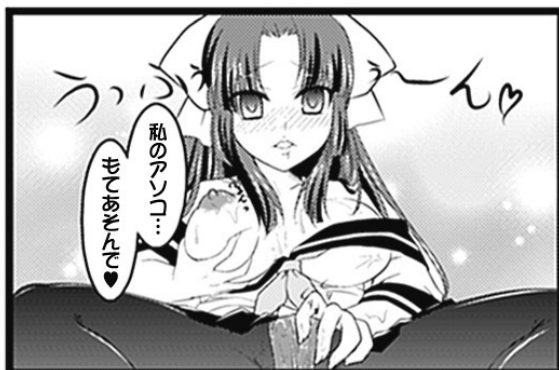
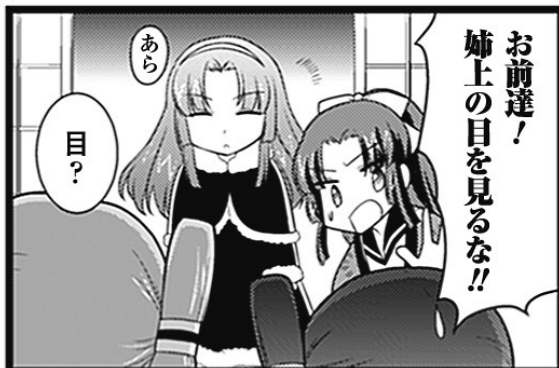
あらあら☆  
まだ寒いかしら？



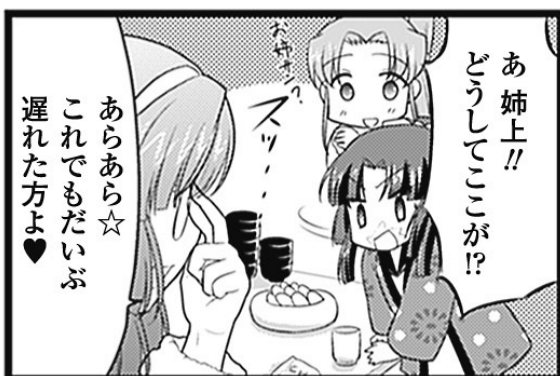
ヤツらが来るんだ!!

?  
…ヤツら…

18歳以上推奨…



嵐のように…



これがうわさの  
ダークエルフかい？  
兄さん

かっ...

ああずいぶん  
仲間がやられたが...

くっ...

捕らわれた  
むちむち♡褐色エルフ...

たっ♡

むっ♡ちり♡

まあ  
捕らえちまえば  
可愛いもんよ...!!

# Hypnotism Darkness

漫画  
COMIC

じえま  
jema

それにしても  
いい乳だな…

サウルナール

に兄さん!!

そうだね  
兄さん

っん  
♡

フン!!

ブキキ!!

おんおん♡





!?

いやー先ほどは  
兄が失礼しました  
おわびに我が家に伝わる  
リラククス術を…

はい  
アナタはすぐに  
リラククスー

おいおい  
そんな  
効くわけが…

とても凶暴なため  
ひとまず「催眠」に  
かけることにしました…



えー!?



くてん♡



成功した♡

さて…それじゃ  
このナマイキで  
けしからん乳を…

いやー  
久しぶりだから  
ドキドキだったよ

しかしお前に  
こんな技が  
あるとはっ！

OK!!  
それじゃ

たぶん

「ナマイキの胸は  
「ナンカン」になさる



んっ?  
効いたのか  
これ?

試して  
みなよ

うひよー  
すげえ  
ムネ♥

ポ  
ン  
ン

さあ  
さあ♥

た  
ん  
ん♥

それじゃ  
イタダキマス♥

んあ♥  
はああ♥  
あ♥

ビク  
ビク♥  
ビク♥

キ  
ン♥

た  
ん  
ん♥  
ん♥  
ん♥

た  
ん  
ん♥  
ん♥



あははっ!!  
すごいアへ顔♪

おばあ  
おお♡

んおっ♡  
んおお♡

んおっ♡♡

もみ♡

おおっ...!!  
乳首もこんなに  
ピンカンに!



んほお♡  
あは♡

はあ♡  
はあ♡  
はあ♡

ちゅ♡



うりゃ♡

ちゅ♡  
ちゅ♡  
ちゅ♡

んおおっ♡  
おっ♡

むちゅ♡  
ちゅ♡  
ちゅ♡



はあ♡  
あ♡  
ああ♡

んふ♡

んふ♡

それから先は  
とにかくおっぱいを  
責める二人

んお♡♡  
お■んぽお♡  
はむ♡

ぎゅ♡

始終お■んぽ大好き催眠もかけ  
「パイズリ」「フェエラ」も  
思うがまま♪

すっかり  
ち■ぽエルフ  
だね♪

うひょー  
気持ちいいぜ

んぽ♡

スッぽ  
ヌッぽ♡

たった一度の、初めてを奪われる屈辱  
それすらも疼く肉体には  
甘美な刺激となる



対魔忍  
**アキカゼ**  
TAIMARIN YUKIKAZE  
対魔忍魔調教に墮つ

第2話 処女喪失

あおいむらまさ  
小説 **蒼井村正**  
NOVEL  
原作 **Lilith**  
ORIGINAL

りんどう  
挿絵 **竜胆**  
ILLUSTRATION

## 登場人物紹介



### 水城ゆきかぜ

電撃の対魔忍の異名を持つ若き対魔忍。勝気で負けず嫌いな性格。幼馴染みの秋山達郎のことを気にかけている。



### 秋山達郎

ゆきかぜの通う学園の先輩対魔忍で達郎の姉。ゆきかぜと行動を共にし、先走りが必要な彼女をサポートする。

### 秋山達郎

対魔忍として成長中の少年。ゆきかぜとは幼馴染みであり、長い間互いを思っているが友達以上恋人未満の関係。

### 前号までのあらすじ

任務中に行方不明となったゆきかぜの母・不知火の情報を得て、魔界都市ヨミハラへ辿り着いた二人の対魔忍。しかしそこで活動するためには、双隼娼婦となつて存在をカモフラージュする必要があった。

「ふひやああああ！ 中でッ！ オンコの中でチポがズリユズリユツて動いてるッ！ 動いてるよおとおおお——ッ!!」

はしたなく裏返つた声を上げ、ゆきかぜは拘束された身体を悶え狂わせる。

「しっ、しっかりしろゆきかぜ！ 身体は……おつ、犯されていないぞ！ こつ、これは頭の中だけの感覚……んほおおおおウツ!!」

ゆきかぜに励ましの声をかけた凜子も、こみ上げる悦波に堪らず嬌声を響かせた。

双隼娼婦の契約を結ばされた二人の対魔忍は、一週間にわたる娼薬ローション塗布が終わつたあとも依然として、不気味な機械に硬状態で拘束されていた。

よがり悶える二人の頭部には、ヘッドアップディスプレイのような装置がかぶせられている。

「わかつてるんです。ホントに犯されてないつてわかつてるけど、チポがッ！ チポがオ——ンコの中で動いてる感触が……やらああああ！ もう犯さなれええ！ イクッ、イツちやううう！」

喜びの涎を滴らせる口から、双隼娼婦の印を刻まれた舌を突き出し、ゆきかぜは幾度目ともわからぬ

「ああああ！ 今度は尻に……につ、二本も……前にも……二本ッ！ そつ、そんなあ……うほおおおお——ッ!!」

拘束された二人の対魔忍は、新たな陵辱快感に悶え狂う。

ローション塗布訓練を終えたゆきかぜと凜子を待つていたのは、新たな快樂地獄であつた。

拘束機械からは解放されぬまま、頭部にも奇妙な機械を装着された二人は、延々と続く陵辱行為の疑似体験と、それがもたらす偽りの肉悦を、脳の快樂中枢に直接送り込まれた。

脳内に展開するイメージ内で、黒い影にしか見えぬ屈強な男どもが、ろくに抵抗もできぬ二人の対魔忍を組み敷き、そこだけが異様にリアルなペニスを容赦なくヴァギナにねじ込み注挿する。

意識をしっかりと保つて、送り込まれるイメージに抗おうとしても、張り出した亀頭冠で墜壁をゾリゾリと掻き擦られる感触は恐ろしい程のリアルさで少女たちの快樂中枢を掻きむしり、恥辱のアクメを強要した。

「ひゅおおおお！ チポお！ チポ凄いいチポ凄いいチポきもひいいいい——ッ!!」

実際には触れられてもいない膣口から、絶頂の証を水鉄砲のように噴き出させ、ゆきかぜのスレンダーボディがグンツッ！ と伸び上がる。

「みつ、認めないぞ……こんな……まやかしのペニスなんか……こつ、この私が……なつ、なんだと？ うあああああ！」

全身汗みどろになつて、こみ上げる悦波に抗つていた凜子の声が甘く裏返る。

「さつ、三本のペニスが、膣とアヌスの中でもつれ合つて、ドリルみたい……かつ、回転して……イツ、イグううううう——ッ!!」

現実ではあり得ない魔悦でアヌスとヴァギナを抉られた先輩対魔忍は、ひとときわ激しいアクメに拘束ボディをはね上がらせた。

際限なく二人を犯し続けていた男どもの映像が唐突に消え失せ、視界が暗黒に包まれる。

「終わった、の？ もう……もうやらああ、チポ……凄すぎて狂う。狂つちやうう……」

「ハアハアハア……駄目……だ、身体が……求めてしまう……こんなのは……嘘……だ！」

ペニス快感による絶頂を極め尽くした二人は、拘束された身体をグツタリとうなだれさせて喘ぐ。

陵辱映像が消えてもなお、ゆきかぜと凜子の脳内には、雄々しく猛つたペニスの残像が残り、膣内には荒々しい注挿の余韻がこびりついていた。

「やだ、嫌だつたはずなのに……チポ……欲しがっちゃうてる!!」

困惑するゆきかぜの身体を疼かせているのは、熱く、硬く反り返つた男根に対する渴望。

時間経過の感覚さえ失せる程の長時間にわたつて続けられた陵辱疑似体験は、対魔忍たちの脳に、ただひたすらに牡の勃起を求める淫らな牝の本能を植えてついていた。

アクメに舞い上がった。

対魔忍コスチュームの股間を破り取られ、あらわにされている秘裂から、ブジュルッ！ と恥音を立てて、愛液の飛沫が迸る。

「くああああ……耐えろ、耐えるんだ！ ひぎいいッ！ そつ、そんな……二本も、同時に……挿れられてるううう！ ダメだ……イツ、イツ、イクううううう——ッ!!」

官能の汗に濡れ光る爆乳をダイナミックに揺れ弾ませて、凜子の身体も絶頂痙攣に包まれる。

「ハアハアハアハア……あひゅうううんつ！ イツ、イツばかりなのに、また、チポ挿れるのやらああああ！」

「ああああ！ 今度は尻に……につ、二本も……前にも……二本ッ！ そつ、そんなあ……うほおおおお——ッ!!」

拘束された二人の対魔忍は、新たな陵辱快感に悶え狂う。

ローション塗布訓練を終えたゆきかぜと凜子を待つていたのは、新たな快樂地獄であつた。

拘束機械からは解放されぬまま、頭部にも奇妙な機械を装着された二人は、延々と続く陵辱行為の疑似体験と、それがもたらす偽りの肉悦を、脳の快樂中枢に直接送り込まれた。

脳内に展開するイメージ内で、黒い影にしか見えぬ屈強な男どもが、ろくに抵抗もできぬ二人の対魔忍を組み敷き、そこだけが異様にリアルなペニスを容赦なくヴァギナにねじ込み注挿する。

意識をしっかりと保つて、送り込まれるイメージに抗おうとしても、張り出した亀頭冠で墜壁をゾリゾリと掻き擦られる感触は恐ろしい程のリアルさで少女たちの快樂中枢を掻きむしり、恥辱のアクメを強要した。

「ひゅおおおお！ チポお！ チポ凄いいチポ凄いいチポきもひいいいい——ッ!!」

実際には触れられてもいない膣口から、絶頂の証を水鉄砲のように噴き出させ、ゆきかぜのスレンダーボディがグンツッ！ と伸び上がる。

「みつ、認めないぞ……こんな……まやかしのペニスなんか……こつ、この私が……なつ、なんだと？ うあああああ！」

全身汗みどろになつて、こみ上げる悦波に抗つていた凜子の声が甘く裏返る。

「さつ、三本のペニスが、膣とアヌスの中でもつれ合つて、ドリルみたい……かつ、回転して……イツ、イグううううう——ッ!!」

現実ではあり得ない魔悦でアヌスとヴァギナを抉られた先輩対魔忍は、ひとときわ激しいアクメに拘束ボディをはね上がらせた。

際限なく二人を犯し続けていた男どもの映像が唐突に消え失せ、視界が暗黒に包まれる。

「終わった、の？ もう……もうやらああ、チポ……凄すぎて狂う。狂つちやうう……」

「ハアハアハア……駄目……だ、身体が……求めてしまう……こんなのは……嘘……だ！」

ペニス快感による絶頂を極め尽くした二人は、拘束された身体をグツタリとうなだれさせて喘ぐ。

陵辱映像が消えてもなお、ゆきかぜと凜子の脳内には、雄々しく猛つたペニスの残像が残り、膣内には荒々しい注挿の余韻がこびりついていた。

「やだ、嫌だつたはずなのに……チポ……欲しがっちゃうてる!!」

困惑するゆきかぜの身体を疼かせているのは、熱く、硬く反り返つた男根に対する渴望。

時間経過の感覚さえ失せる程の長時間にわたつて続けられた陵辱疑似体験は、対魔忍たちの脳に、ただひたすらに牡の勃起を求める淫らな牝の本能を植えてついていた。

「二人とも、なかなかいいいきっぷりだったな。チポの魔力、満喫できただろう?」

「その声は……リアルね?! いつまでこんな機械に拘束しておくのよ!」

「俺を呼ぶときは、ご主人様、どうぞ?」

「脳改造を終えても、礼儀知らずなのは相変わらずか」

「娼館の主は、特に気分を害した様子もなく、冷たい声で告げる。」

「まあいい、奴隷娼婦としての礼儀作法は、これからじつくりと仕込んでやろう……」

「ガコッ……ギギギギ……ッ。」

「嫌な軋み音を立てながら、一ヶ月近い期間、二人を拘束していた機械が開いてゆく。」

「ああ……ッ!」

「くうう……」

「寝状態から解放されたゆきかぜと凜子は、自分が進らせた体液で汚れた床にへたり込んで喘ぐ。」

「元対魔忍ともあろう者が、まともに立てぬか……身体を洗って、服を着替えさせろ」

「リアルは、背後に控えていた男たちに素っ気ない口調で命じた。」

「コッ、コッ、コッ……」

「両側に幾つものドアが並んだ寒々しい廊下に、足音が響く。」

「快楽調教からようやく解放された二人の対魔忍、ゆきかぜと凜子は、硬い表情を浮かべ、肩を並べて歩いていた。」

「二人の顔を悠々と歩むのは、でっぷりと太った中年男。娼館の主、リアルだ。」

「凜子先輩……そこら中から見られてますよ」  
「扉の陰や廊下の向こうから投げかけられる幾つもの視線に気づいたゆきかぜは、隣を歩む凜子に声を潜めて囁きかける。」

「ああ。この娼館に暮らす奴隷娼婦たちだろうな。私たちの恰好が、よほど珍しいのだろう」

「静かにつぶやく凜子と、不快げに眉をひそめるゆきかぜは、対魔忍のコスチュームを着用していた。」

「しなやかに鍛え抜かれたボディラインにピッタリと密着した忍び装束は、胸と股間部分が微妙にきつく仕上げられており、歩を進めるたびに敏感な部分を締め上げ、圧迫する。」

「(ソッ……きつい……ッ。ちよつと締めつけられただけで、身体が疼いちやう……)」

「恥ずかしい呻きが漏れそうになるのを堪えながら、ゆきかぜは以前とは比べものにならない程感度を増した自分の性感を持て余していた。」

「全身に媚薬ローションを塗り込まれ、脳に直接、陵辱の快感を送り込まれて、心身ともに改造された対魔忍の少女は、わずかな刺激にも性的な反応を示してしまうのだ。」

「(この切ない感じ、凜子先輩も……?)」

「隣を歩む凜子を盗み見ると、彼女の頬も紅潮し、コスチュームに包まれた爆乳の先端では、勃起した乳首のポッチが布地を突き上げていた。」

「(凜子先輩の身体も、感じちゃってる……私の任務に付き合わせたばかりに……ゴメンなさい)」

「罪悪感と同時に、快楽の試練に晒されているのは自分だけではないという、妖しい安堵の感情もこみ上げてきて、勝ち気な対魔忍に複雑な表情を浮かべる。」

「さあ、着いたぞ」

「ゆきかぜと凜子が連れ込まれたのは、安宿の一室を思わせる部屋であった。」

「(ここが、奴隷娼婦が客を取るための部屋……)」

「どこのホテルにもある、ドレッサーやベッドといった調度品が、何故か禍々しい物に見えて、ゆきかぜの不安を煽り立てる。」

「メデイカルチェックの結果によると、お前たちは二人とも処女らしいな? 処女膜など、奴隷娼婦には必要ない。純潔の証を、今ここで除去してやろう」

「(いよいよ……なのね)」

「ゆきかぜの背を、絶望感と怖気が走り抜ける。奴隷娼婦の契約を結ばれて以来、さんざん辱められ、数えきれぬ程の絶頂を体験してはいたが、彼女はまた、処女のままだのだ。」

「(こいつに……リアルなんかには処女、奪われちゃうんだ。お母さんを助け出すため、覚悟してたけど、達郎、やっぱり怖いよ、嫌だよ……)」

「脳裏に浮かぶ、気弱そうな少年の顔に、ゆきかぜは呼びかける。」

「対魔忍としてのプライドを踏みにじられ、快楽責めに狂い泣かされる恥辱の日々の中で、心を通い合わせた達郎の存在は、折れてしまいそうになる少女の心を崩壊の瀬戸際で支えてくれていた。」

「(達郎、任務が終わったなら、あなたのところに必ず帰るから……待って。こんな奴になんか、絶対に負けないから……)」

「これから純血を奪われようかという状況にありながらも、少女は胸の内では恋人に語りかけ、消えそうになる勇氣の炎を燃え立たせる。」

「さて、どちらから犯されたい?」

「冷たい光をたたえたリアルが目、床に正座した二人をギロリ、とねめつける。」

「(わつ、私を先に犯してください!)」

「(聞いて、ゆきかぜ、ここは私が……)」

「(ダメです、先輩。私が巻き込んでしまったんだかんだ。))」

ら、私が先に！」

褐色に日焼けした表情をキツ、と引き締めた少女は、強い声で先輩に抵抗した。

互いを気遣いながら言い争う二人の対魔忍を、リアルは楽しみに眺めている。

彼にとつては、どちらが先でも関係ない。どう抗い、恥じらおうと、犯し抜き、よがり狂わせて、処女を奪うだけだ。

「言うことを聞け！ 私は先輩だぞ！ 処女を奪われるのは、私が先だ！」

声を荒らげて身を乗り出した凜子の美爆乳が、迫力満点に揺れ弾む。

(凜子先輩のおっぱい……やつぱりおっきい) ゆきかぜの脳裏に、ゾクトに爆乳を責め罵られてよがり狂っていた凜子の痴態が蘇る。

(これ以上、凜子先輩に、あんな恥ずかしい思いはさせられない……)

「わつ、私を先に犯してください、ご主人様！」 眉を吊り上げながら叫んだゆきかぜの秘部が、キュンッ！ と疼きながら引き絞られた。

(やだ……私、こんな嫌な奴に犯されるのを、期待しちゃってる)

肉体のみならず、脳を改造されたという事実をまだ認められない少女は、自分の感情と反応に戸惑いを禁じ得ない。

「ふむ、よかろう。ゆきかぜ、お前が先だ……こっちに来い！」

邪悪な笑みを浮かべた娼館の主は、ゆきかぜを指名する。

「はっ、はい……」

表情を強ばらせた少女は、ベッドの脇に立ったリアルに歩み寄り、足元にひざまずいた。

「そうそう、すっかり忘れるところだった。二人とも、ご主人様に対する感謝の言葉は覚えてるだろ

うな？」

うな？」

「そつ、そんなもの覚えてるわけないでしょ!! ……あ、なに、これ……恥ずかしい言葉が浮かんでく……！」

勝ち気な声で言い返した少女の目が、驚きに見開かれる。

「くうう、私もだ。頭の中に、服従のセリフが次々と……これは一体？」

凜子も、不快そうに眉を寄せつつ、脳内に溢れ返る卑猥なセリフに戸惑っている。

「睡眠学習、というやつさ。お前たち、ついさっきまで装着していた装置がどんなものか、身をもつて体験しただろうか？」

「う……うう……あの変な機械のエッチな映像なら、嫌つていう程見せられたわよッ！」

ゆきかぜの顔が、恥辱の記憶に歪む。

「映像など、感覚を明瞭にするためのオマケのようなものだ。挿入と注挿、そして射精……それを受け止める快感を、脳に直接送り込まれてよがり狂っていたではないか」

「ぐ……うううう……」

悔しげに唇を噛み、スレンダーボディをわななさせるゆきかぜ。

「あの疑似体験のついでに、お前たちの脳に服従の言葉や、客が喜ぶ卑猥なセリフをたっぷりとインプットしてやったのだ」

「なんですって!! そんなことをして、脳が壊れたら、どうするのよ！」

再び少女は声を荒らげる。

「お前たちが壊れようが狂おうが、知ったことではない」

憤るゆきかぜを、は虫類のように無表情なリアルはの三白眼が睨み据えた。

「製造過程で壊れるような不良品は、奴隷娼婦には

必要ないのだ」

「うぐうう……」

「どこまでも下劣な……」

人を人とも思わぬリアルは言葉に怒りを覚えながら、二人の対魔忍は何もできずにいた。

洗脳機械によって意識の奥深くに刻み込まれた服従の命令が、見えぬ枷となつて、抵抗を封じているのだ。

(リアル……任務が終わつたら、絶対に殺してやる！ この娼館も、ぶっ壊してやるわ！)

「さあ、ゆきかぜよ。感謝の言葉をのべてもらおうか？」

復讐を誓う対魔忍の少女に、抗いようのない命令が下される。

(言いたくない……言いたくないのに……言わなきゃ、息が詰まって……胸が苦しい……)

嘔吐感にも似た感触に耐えきれず、少女のつぶらな唇が開く。

「……ご主人様、奴隷娼婦に邪魔な純潔の証を除去するために労をとっていただき、ありがとうございます……淫らな牝ブタとなつた私、ゆきかぜの身体、存分に犯してください……」

わずかに声を震わせながらも、屈辱のセリフを喉奥から搾り出すゆきかぜの身体が、妖しい疼きに包まれた。

(これから、こんな男に犯されちゃうのに、身体が悦んじやつてる……ダメ！ 流されちゃ……洗脳になんて負けちゃ、ダメえ！)

卑猥なキーワードに反応して欲情を強めてゆく肉体を、必死にだめようとするゆきかぜであったが、脳と肉体を改造された少女の肢体は、ジットリと汗ばみ、感度を増して、男の愛撫と、たくましいペニ

スの挿入を待ちわびてしまっていた。

「さあ、立つてこっちに来い」

「はい……」

ふらりと立ち上がったスレンダーボディが、意思のない操り人形のような足取りで、中年男のところへと歩み寄ってゆく。

「ゆきかぜ……心だ。心だけは、誰にも造り替えることも、辱めることもできない……」

少女の背に、凜子が静かだが、力のこもった声をかけた。

「まだ、そんなに甘いことを言っているのか？ まあいい、快感の前には、心など何の意味もないことを、その身に思い知らせてやろう」

冷笑を浮かべた娼館の主は、小柄で細身なゆきかぜの身体を、背後から抱き締める。

「くふう……あ……あんツ……」

憎むべき男に抱擁されたゆきかぜの口から、鼻にかかった甘い吐息が漏れた。

（嫌なのに……嫌なはずなのに、どうして？ 気持ちいい……気持ちいいよお）

太い腕に抱き締められた筋肉の軋み、圧迫された骨格、そんな、何でもない刺激でさえ、肉の悦びに変換されて、黒い対魔忍装束に包まれた身体が、ギクツ、ピクツ、と反応してしまう。

「お前たちは、やはり、この対魔忍姿が一番似合っているな」

ポツテリと肉厚な中年男の手が、スリムで筋肉質に引き締まった少女の肢体をコスチューム越しに弄り回す。

「ひやう……んんんっ……くふう……ッ！」

コスチュームからスラリと伸び出した褐色の太腿を撫で上げた指は、華奢な骨盤のラインをなぞり、肋骨の凹凸が浮き出た脇腹を揉み上げて、汗ばんだ脇の下へと滑り込む。

「あひ……ンッ！」

男の腕の中で、華奢な肢体がクンッ！ と伸び上

がった。

「しなやかに鍛えられた筋肉のうねりは、そこらの女どもとはひと味違う。さすがは対魔忍の肉体、と、いったところかな？」

撫でるたびに敏感に悶える少女の肉体を楽しみながら、娼館の主は満足げに唇を笑み歪める。

「んは……あふうう……ひう……はん……ッ」

恥じらいに頬を染めたゆきかぜは、指の蠢きに連動して小さな声を上げ、弱々しく身を振ることしかできない。

「物好きなことだな……そんなに対魔忍としての私たちを辱めたいか？」

ゆきかぜの気持ちを代弁するかのよう吐き捨てた凜子の声には、精いっぱい皮肉と、何もできぬことに対する諦めの響きが込められていた。

「当然だ。この娼館にやってくる客は、対魔忍どもに煮え湯を飲まされたことのある者も多い。それ故に、元対魔忍というのは、奴隷娼婦となったお前たち二人が客を取る上で、大きなセールスポイントになる」

ゆきかぜの腹部に指を這わせ、敏感に躍動する腹筋の感触を楽しみながら、リアルは告げる。

「おしゃべりはこままだ。凜子よ、お前はこれから起きる一部始終を、一言も発せずに見届けるのだから目を背けることも許さん。いいな？」

「う……く……はっ……はい。ご主人様……」

床に正座した凜子は、感情を押し殺した声で答える。

「よし、これで心置きなくお前を犯してやれるぞゆきかぜ」

伏せていた少女の顔を上向かせたリアルは、勝ち気な光をたたえた琥珀色の瞳を至近距離から覗き込みつつ声をかけた。

「さっさとやりなさいよ！ 処女ぐらい奪われたつ

て、どうってことないんだから！」

こみ上げてくる不安を抑え込んでリアルはニヤケ面を睨み返し、虚勢を張るゆきかぜ。

「そんなに急ぐものではない。あつさりとブチ込んでしまつては、風情がないだろう？ お互いに楽しんでではないか」

中年男の太短い指が、コスチュームをツンと突き上げて自己主張している乳首を軽く摘んだ。

「ひやあんんっ！ あつ、くつ、んんんッ！」

息を呑むような悦波が乳先を包み込み、可愛らしく裏返った声が室内に響く。

（やだ、こいつの指……ゾクトよりも……上手い……きもち……いいッ！）

女体を颯り慣れているリアルは指使いは、ただ荒々しいだけだったゾクトの愛撫とは比べものにならない快感を送り込んできた。

乳頭を摘んだ指がわずかに動いただけで、快感の稲妻がささやかなバストを貫いて、身体が仰け反り硬直してしまう。

「ポリウム不足の胸だが、乳首の感度は上々なようだな」

リアルは、腕の中で弓なりになったスレンダーボディを支えつつ、乳頭を摘んだ指先を、左右に振れさせ、小さな突起に快感をねじ込んでくる。

「あひ……いいいい……ッ！ そつ、そんなに強く摘まないで……きやふうう！ やつ、あ、あつ、あつ、ああああ……ッ！」

親指と中指に挟まれて楕円形にひしゃげた乳頭が、

ジンジンと甘い疼きを発しながら、勃起をさらに強めてゆく。

緊張を極めたスレンダーボディが、男の腕の中で小刻みに打ち震え、すっかり彼女の体臭と一体化した娼薬ローションの匂いをフワリ、と立ちのぼらせ

る。



「おやおや、威勢のいいことを言っておいて、乳房をちよつと捻られただけでこの様か？」

勃起乳首の生硬い反発力を楽しみつつ、リアルは反対側の手で、小麦色に日焼けした少女の太腿を撫で直す。

「ふひっ！ や……あつ、んうっ……くすぐつたい……ひんっ！ や……はああん……ッ！」

冷たく粘ついた男の手で、滑らかな太腿をサワサワと撫でくすぐられると、くすぐつたさびが変じた甘く切ない快感が際限なく湧き起こり、対魔忍として鍛え抜かれた筋肉をわななかせ、骨の芯まで浸透してくる。

「あつ……ンッ……やだ……太腿……どうしてこんなに……くっ……んっ……は……あああつ」

男の腕の中で、小柄で細身な肢体が振れ、内股気味に閉じ合わされた美脚がガクガクと震えた。

「お前の肉体は、既に改造の大半を終えている。どんなに意地を張ったところで、男に愛撫されれば、欲情を抑えることなどできないのだ」

きめ細かな太腿の触り心地を堪能した男の指は、閉じ合わされた腿の隙間に何度も滑り込み、汗ばんで震える内腿を執拗に撫でくすぐって、対魔忍の少女に悩ましげな身悶えを強いる。

（駄目、濡れちゃう。こんな嫌な奴に触られてるのに……気持ちよくて……やあ……）

太腿をまさぐられる快感が、下半身全体に拡がり、下腹の奥が淫熱を帯びて疼き昂ってゆく。

全身が甘い匂いのする汗に包まれて火照りを増し、喘ぎ声もどんどん艶めかしい響きを増した。

（気持ちいい……太腿撫でられると、身体中ピリピリ痺れて……腰が抜けちゃうよ）

無意識のうちに、リアルな身体に体重を預けた対魔忍の少女は、抵抗を放棄し、身体の強張りを解いて中年男の指に身を委ねてしまう。

「ひや……はああん……」

緩んだ腿の合間に、掌が滑り込み、腿の付け根のあたりまでを撫で摩り始めると、心地良さに目を細めたゆきかぜは、スリムな肢体をくねらせ、細い喉を仰げ反らせる。

（耐えなきやいけないのに……身体が勝手に気持ちよくなつて……ガマン、できない……）

腰が突き出され、閉じ合わされていた腿が緩んでより深い部位にまで、男の指が入り込めるような隙間を作り出してしまふ。

奴隷娼婦となるための訓練として施された肉体改造の成果が、少女の意思に関係なく身体を発情させ、尋常でない快感を湧き起こらせて、理性をドロドロに煮溶かしているのだ。

「身体の強張りも解れてきたな。……さて、肝心の部分はどうかかな？」

内腿を撫でていた指が、鋭角のV字型に切れ込んだ股間に滑り込み、まろやかな曲面で構成された恥丘を驚掴みにした。

淫熱を帯びてポリウムを増していた大陰唇が、揉み歪まされ、ギチリ！ と軋んだ恥骨の奥で、快感の火花が散る。

「ひやああんッ！ そこお、掴むなああ！ あひい……ッ、あ、あ……あああつ！」

秘部にめり込んでくる指の感触から少しでも逃れようと、爪先立ちになりながら叫ぶゆきかぜ。

しかし、男の手は秘部を覆い尽くしたまま離れようとせず、さらに強く指をめり込ませてくる。

「身体の方は細身で肉付きが薄い、大陰唇のポリウムと弾力はなかなかのものだな。これなら、激しいピストンも受け止められるだろう」

卑猥な批評を交えつつ、中年男の巧みな指は、ブツクリと盛り上がった恥丘の柔肉を、左右から摘み揉んだ。

ふにゅっ……むにゅっ……くにゅっ……

つきたての餅のように熱く弾力に富んだ乙女の秘肉が、太い指の狭間でこね回され、股布を深々と食い込まされて、コスチュームの股間に秘裂の輪郭をあからさまに浮き出させる。

快樂調教によって、眠っていた性感を掘り起こされ、連日嬲られ続けたゆきかぜの性器は、そこだけが過剰成長してしまったかのようにムッチリと肉付きを増し、常に甘い疼きを溜め込んでいた。

「ふわあ、んほおお！ そつ、そこお、あつやつひっひいひい！ くひやああ……ッ！」

秘部に密着し食い込んだ股布越しに、充血した大陰唇を揉み嬲られたゆきかぜは、はしたない嬌声を上げながら、爪先立ちに伸び上がった肢体をワナワナと震わせて悶え狂う。

（ダメえ！ オンコ……そんなにされたら、もう、ガマンできなくなっちゃうッ！）

芋虫のような指の狭間で振れ、こね回され、ワレメをバクバクと開閉させられた肉アケビは、さらに充血を強め、火照り汗ばんでゆく。

卑猥な指使いで揉まれる陰唇の狭間で、間接的に刺激されたクリトリスが狂おしい程に充血して勃起を際立たせ、股布に押しつけられて、痺れるような悦波を発生させた。

（あ……あ……濡れるっ……やあ、溢れてきちゃうっ！）

腔壁を灼熱させて流れ下ってきた愛液が、揉みこねられている秘裂の奥にジュワッ、と溢れ出す。

「おやおや、もう溢れ出させているのか？」

「股布越しに滲み出てくる愛液の湿り気を指先に感じてリアルは、恥悦に震える少女の耳元に囁きかけて羞恥を煽る。

「はあはあ……だ、だから、何?」

開き直った少女は、荒い喘ぎを漏らしながらも、

精いっぱい反抗をしてみせる。

「この程度では、まだ理性が飛んでいないか？　では、もつと鳴かせてやろう」

淫蜜に濡れ、乙女のワレメに啞え込まれた股布の谷間に、人差し指と中指が侵入し、勃起クリトリスを左右から摘む。

「おふおおおおおつ！　くひいっ、あひつ、ひつ、いつ、あひいひいひいひいッ！！」

最も敏感な突起を男の指に圧迫されたゆきかぜの口から、悲鳴混じりの嬌声が迸った。

「ふむ、なかなかいい声で鳴くではないか」

激しく痙攣しながらも、男の手から逃れようとする少女の身体を抱き寄せたリーアルは、指先を蠢かせて、小さな肉芽を布越しに責め立てた。

既にぐしょ濡れになっている秘裂の頂点、包皮から顔を覗かせて、コリッと生硬くこった陰核海綿体が、絶妙の力加減で摘み揉まれ、小刻みな震えを加えながら扱き立てられる。

（嘘お、これ、きもちいい、クリトリス摘まれるの気持ちいいきもちいいいいいいッ！）

全身の感覚が、責め立てられているクリトリスに向かって絞り込まれ、快感を食うこと以外何も考えられなくなつてゆく。

股布を深々と啞え込んだヴァギナの奥が灼熱し、濃い愛液がブチュブチュと溢れ出して、恥ずかしい濡れ染みが一気に拡大する。

健康的に伸び出した日焼け美脚は、ガクガクと痙攣して、今にも崩れ落ちてしまいうさだ。

「痙攣が止まらないようだな。遠慮せずにアクメしてもいいんだぞ」

「やつ、嫌……いやああ……ッ！」

今にも弾けてしまいうさだになりながらも、ゆきかぜは絶頂に抗い続けていた。

（簡単に……そう簡単にイッたりしない……イかな

い……イキたくない！）

「どうした？　調教のときのようにな、派手にアクメしてみせる！」

快感の塊となった小突起を摘んだ指が、きゅつ、きゅむつ、と左右の捻りを加え、とどめの刺激を送り込む。

「うひいひい！　クリトリス捻っちゃ……あつあつあつあひああああああ……ッ！」

室内の空気をビリビリと震わせる程の叫びを上げたゆきかぜは、スレンダーな肢体を弓なりに仰け反らせ、あつさり絶頂へと舞い上がる。

「イッ、イクううううつ、ひいああああああ、ああああああッ！！」

快感の爆風が、頭の中から足の爪先まで駆け抜け、全身の細胞が震えおののく。

対魔忍としての誇りや、愛しい達郎の顔、任務のことさえも、白いアクメの光に包まれて消え失せ、頭の中が空っぽになる。

爪先立ちになった身体が、カクツ、カクンツ！と前後にしゃくり上げ、健康的に日焼けした内腿を、股布の隙間から溢れ出た愛液の滴が伝う。

「ゆきかぜ、イッたな？　どうだ、イクのは何回体験しても堪らないだろう？」

腕の中で、断続的に跳ね上がる少女の耳元で、娼館の主は囁きかける。

「う……ああ……ああ……」

絶頂の余韻に翻弄されている少女は、問いかけに答えることもできない。

「一度だけでは満足できないだろう？　連続で何度かアクメさせてやろう……その前に、邪魔な布を少し取り去っておこう……」

ビリッ……ビリビリビリイイッ！

リーアルは、淫蜜に濡れまみれて秘部に張り付いた股布と、痛々しい程に勃起した乳首の尖りを浮き

出させた胸の布地をたやすく引き裂き、バストと秘裂を剥き出しにした。

対魔忍のコスチュームを模したこの衣装は、胸と股間部分は特に破れやすく作られているのだ。

「ふあ！　ああああん……ッ！」

あらわになった秘部を舐める空気の感触だけで、ゆきかぜは絶頂の余韻に身をわななかせた。

褐色に日焼けした顔や手足とは対照的に、ミルク色の地肌も生々しい貧乳の頂点では、フレッシュピンの乳首が、乳輪とともども円錐形に尖り勃ち、噴き出した汗にきらめいていた。

股布を引きちぎられた股間は、はしたなく濡れ蕩けた生殖器が紅色に充血したワレメをさらけ出し、甘酸っぱい少女の淫臭を立ちのぼらせている。

「貧乳のくせに、乳首だけは一人前に育っているではないか。今度は直に弄つてやろう」

ささやかな膨らみの頂点で過剰勃起した乳首が太い指に摘まれ、グリッ、グリッと揉み捻られる。

「ふひいひい！　乳首っ！　いつ……いつ……あつあつああああ……ッ！！」

布越しに摘まれたときとは桁違いに鮮烈な快感に襲われた対魔忍の少女は、指の動きに合わせるかのように喘ぎ声のピッチを高めた。

「同時に責めたら、どんな歌声が聞けるかな？」

蜜を噴きこぼす股間のワレメに、男の指がヌルリと滑り込み、弾けそうな程に勃起したクリトリスを摘んで撪り抜く。

「ひやあああああううううう！　クツ、クリトリス……いつ、ヒッ、うひいひいひいッ！！」

もはや意味を成さぬ声を上げたゆきかぜは、勃起陰核を掻き弾かれるたびに新たな絶頂を迎え、女悦の高みへと飛翔する。

「どうだ、ゆきかぜよ、イカされる気分は？」

「あひゅつ、いつ、ひつ、イッてるつ、クリトリス

きもひいいい！ きもひいいい、なんで、なんでこんなきもひいいいのお？ イクッ、イクイクイク……あつ、ああああ——ん!!」

甘い声を上げながら、ゆきかぜは男の指に摘まれた秘部を突き上げ、連続アクメに酔いしれる。

プチャツ、プチャツ、と卑猥な濡れ音を立てて収縮する秘裂の奥から、まるで射精でもしているかのような勢いで愛液が射出され、床に甘酸っぱい飛沫を散らした。

「はひいいい……いあ……あ、はあはあはあ、あひいいい……いつ、まらあ、まらイクッ……」

幾度もエクスタシーを極めているうちに、ゆきかぜの反応は弱々しく、単調な痙攣を繰り返すだけになる。

「アクメしすぎて感度が鈍ってきたな？ しかし、随分派手にイクではないか。これなら、お前を抱いた客も喜ぶだろう」

全身を躍動させて絶頂する元対魔忍の痴態に満足したらしいリアルは、噴き出した愛液で汚れた指を、コスチュームで拭う。

「あ……あんっ……はあはあはあ……た、たつろお……私……まだ、大丈夫だよ……」

男の腕に、弛緩した身体を委ねてしまひながら、ゆきかぜはうわごとのようにつぶやいている。

「達郎君か……お前の恋人のようだが、彼にアクメさせてもらったこともないのだから？」

絶頂の余韻に震えるスレンダーボディを撫で回しながら、中年男は勝ち誇った口調で問いかける。

「うっ……うるさい……たつろおは……お前と違って、紳士なんらあ！」

連続絶頂に痺れた身体を、ギクッ、と強ばらせた対魔忍の少女は、首を捻ってリアル顔の顔を睨みつけ、舌をもつれさせながらも、言い返す。

「フン、どんな男かは知らないが、恋人の処女も奪

えぬとは、とんだ腑抜けだな」

「たつ、達郎を悪く言うなあ！」

「腑抜け男に随分操を立てているようだが、彼が今のお前を見たらどう思うかな？ 他の男にクリトリスを弄られて、浅ましくアクメしてマン汁を垂れ流しているのだから……」

あざけりの声をかけた中年男の指が、勃起陰核をグリッ、と捻り上げる。

「あつひいいい……んんん、イクッ！ イクイクイクイクううううんんんっつ!!」

絶頂のスイッチと化した肉芽を責め立てられた少女は、ひとたまりもなく新たなアクメへと追い込まれ、膣口から蜜の飛沫を噴き出した。

「お前は、誰に弄られてもすぐにアクメする淫らな牝ブタだ、腑抜けた恋人のことなど忘れて、肉の悦びに狂っていいはい！」

(達郎、ゴメンね……達郎じゃない男に、いつぱいイカされてる。気持ちいいッ、クリトリス気持ちよすぎて、ガマンできないの、イクッ！ イツちゃう、イツちゃうよおお！)

心の奥底で思い人に詫びながら、ゆきかぜはカクカクと腰を振り、クリトリスを摘む男の指に恥骨を擦りつけて、恥辱のアクメを極め続けた。

「どうだ、そろそろオ●ンコにチ●ポを挿れて欲しくなってきたんじゃないのか？」

クリトリスを摘んでいた指を放し、愛撫を中断したりリアルは、意地悪な質問を投げかける。

「そつ、そんなこと……なつ、あひ……ないっ！ おつ、オ●ンコに、チ●ポなんて、ほひっ、欲しくなんて……ないい！」

いきなり愛撫を中断されたゆきかぜは、自分に暗示でもかけるような口調で言い返す。

しかし、ペニスの挿入を意識した性器は、奥の方から搾り上げるような妖しい蠕動を起こし、新たな

愛液が膣口からドロリと溢れ出した。

「やせ我慢はよした方がいい。お前の身体は既に、奴隷娼婦として改造されている。本能に逆らうと心が壊れてしまうぞ」

「んあ、やせ我慢じゃないッ！ チ●ポなんて欲しくないっ！ いっぱいイカされたけど、違うのお、わたしは……ひぐう……うんんん……」

頑なに反論しながらも、ゆきかぜは切なげに腰をくねらせ、褐色に日焼けした太腿を擦り合わせて身悶えてしまう。

「もう少し正直になれ。お前のオ●ンコは、涎を垂らしてチ●ポを欲しがっているではないか」

尻の側から滑り込んできた男の指が、熱く濡れ蕩けた膣口にズルリ、と挿入された。

「ひああああう！ らめえええ、オマンコ……中につ、指ッ、指挿れちゃ、あつあつあつ、中ッ、やつ、らつ、らめえええっ！」

引きつった声を上げて身を振る少女の抵抗を易々と抑え込みながら、リアルは太い指を屈伸させて、狭い処女穴を掘り返す。

ぬちゅ、ぶちゅるっ、くちゅ、くちゅ、くちゅ、ちゅぶ、ちゅぶ、ちゅぶ……

卑猥な蜜鳴りの音を立てて、男の太い指が、初々しい薄紅色の膣口を掻き回した。

侵入を受けた膣粘膜はキュウウウウッ、ときつく引き絞られ、内部で暴れる指を抑え込もうとするのが、それがかえって快感を倍増させている。

「あぐふうううんっ！ くうううんんっ！ あひ……イッ、やつ、抜いてえ……んひいん！」

クリトリス責めの鮮烈な快感とはひと味違う、ジワジワと蕩けさせられるような妖艶に困惑したゆきかぜは、乳房と性器だけを剥き出しにされた対魔忍姿で身悶えた。

(やだ、自分で弄るのよりも、ずつと……凄いッ！

オ■ンコが溶けちゃう……壊れちゃう！」

ゆきかぜとて、健康な思春期の少女だ。自慰行為で性器に浅く指を挿入してみた経験はあるが、今彼女を襲っている快感は、それとは比べものにならない程強烈であった。

「ほお、お前のオ■ンコ、外見はいいが、中はミミズ千匹の名器だな。柔らかな肉壁がみつちりと詰まっついで、指に絡みついてくるぞ」

壁壁に列なる柔らかな粘膜壁を、リアル指先がプルプルと掻き鳴らし、挿入に恐れおののく処女腔に未知の快感を送り込む。

「これならば、客に対するアピールに使えるな。ミミズ千匹の名器を持った元対魔忍、こいつは人氣が出るぞ」

「そつ、そんなこと言うなああ！ あひつ、指ッ、掻かれると……きつ、気が狂いそう……んきひいいい、やつ、ふおつ！ おおお……ッ！」

身体の内側から送り込まれてくる魔悦に、少女の喘ぎは発情した牝獣のような響きを帯びてゆく。

「その調子でよがり狂え！ 男に抱かれてイキ狂い、全身で欲望に奉仕する。それが奴隷娼婦だ」

ヴァギナを犯すリアル指は、さらに深く潜り込み、処女腔の性感帯を探る。

「ひやふうううう！ らめえ、そんなに弄らないで……中でクネクネしてないれえ!!」

甘く裏返つた声を上げて抗っていた少女の身体が、ピクンッ！ とひととき大きな反応を見せつけて伸び上がった。

「ここか……Gスポットが随分と浅いところにあるようだな」

「ひつ、いつ、Gスポットって？」

尿意を何十倍にも濃厚にしたような切迫感に眉を寄せ、声を震わせて問いかけるゆきかぜ。

「クリトリスにも匹敵する女の急所だ……その快感、

たっぷり味わうがいい」

百戦錬磨の中年男の指が、未知の快感におののく少女の急所を突き、擦り、小刻みに揺すり立てて責め廻る。

「や……やあああんつ！ ヒツ、あつ、うあああ、らめええ、そこお！ そんなにされたら、オシッコ……出ちゃう……ッ！」

執拗な指責めを受けた少女の美脚は、いつの間にかガニ股気味に開かれ、内腿の筋肉を突つ張らせて、卑猥なポーズをとっていた。

「そうだ、客にオ■ンコを穿られたら、そうやって足を開いて、卑猥な姿を見せつけろ」

Gスポットを擦る指の動きを早めながら、娼館の主が指示を出す。

「やああ、恥ずかしい、こんな……こんな恰好、あああんつ！ らめええ、グリグリッつてしたらやらあああ……ッ!!」

大股開きで腰を突き出した体勢のまま、スレンダーボディが恥悦にわなないた。

「どうだ、切なくて堪らないだろう？」

「ひぎつ、やはあん、そこお、そこつ、気持ちよすぎるうう！ オシッコ漏れそうで、興奮して……どんどんエッチになって、やあああ……頭、変になっちゃうよお」

髪を振り乱し、下腹の筋肉をうねらせて、少女は初体験の魔悦に追い詰められてゆく。

「廻られて悦び、辱められて興奮する。それが奴隷娼婦の本能。脳改造も上手くいったようだな、ゆきかぜ、お前は立派な淫乱だぞ！」

中年男は、嬉しくもない贅辞の言葉をかけながら、鉤型に曲げた指先で隆天井の急所を掻き廻る。

「ちつ、ちがあう！ わらしは淫乱じゃ、にやいつ！ あひつ、やあああ、漏れちゃうつ、オシッコ漏れちゃうからあ、らめえええ！」

大股開きで股間を突き出した、あられもない姿を晒した対魔忍の少女は、抑えようもなくこみ上げてくる妖しい放欲欲求に耐えられず、右に、左に振れ悶える。

恥骨の裏側は、炎に炙られているかのように灼熱し、疼きのたつぷり溜め込まれた膀胱と尿道、そしてヴァギナがジンジンと疼き昂つて、今にも爆発してしまいううだ。

「そら、もうガマンも限界だろう？ 尿管が張り詰めて震えているのが、オ■ンコ越しにもわかるぞ、イッてしまえ！」

充血を極めてプツクリと盛り上がったGスポットを、太い指が絶妙の速度、圧力で擦り廻つて、耐えに耐えた堤防を決壊させた。

「えつひやああああ！ はへああああああ！ あひあつああああああ……ッ!!」

ぷしぷしぷしぷしやあああ……ッ!!

恥じらいもかなぐり捨てた絶叫とともに果てたゆきかぜの股間から、大量の喜悦水が吹き上がり、床をぐしょ濡れにする。

「そおら、一滴残らず掻き出してやる！」

「ぷちやびちやびちや……ぷしやあつ！ ぐちゅぐちゅぐちゅ……ぷしゅいっ！」

素早い指ピストンで乙女の急所を擦り上げた指が勢い良く引き抜かれるたびに、新たな潮噴きが起きる。

「ひあ！ あひい……いっ……ひっ……あえあひひあああいいいい……ッ!!」

焦点の定まらぬ目を見開き、半開きになって喘ぐ口から舌を突き出した対魔忍の少女は、恥辱の証を最後の一滴まで搾り出された。

「こんなものかな……。随分と溜め込んでいたものだな、フフフッ」

18世紀  
フランス

片田舎にある  
とある子爵家  
におこった怪異

家臣に見守られる中  
その姫君は  
手淫に溺れ続けた

いくっ

またいくっ  
う——っ

それは、とある  
錬金術師のお話

淑女どうたわれた  
御方が  
何という有様  
……!

まさか  
ルイ陛下に頂いた  
ワインのせい  
なのか……!?

# 禁断の小壘

とめてえっ  
だれか  
とめてえ——っ

失礼  
諸君!

お……  
おお！ おまちして  
おりました！

サンジェルマン  
伯爵!!

漫画 おおたたくし



まだ  
闇に沈みゆく魂へ  
さしのべる手は  
届く様だな

貴卿らは  
さがって  
いたまえ!

エクリ  
マルタ!

はい

只今

4人

4人

オートマトン  
オ...自動人形...!?

いかにも!

まちがい  
ありません

6番の  
びん  
壺です



見えざる陰の  
刻印、だな

なら  
七十二ページの  
精霊など  
いかがかな？

トク

あつ

トク

いやあ  
あ——っ!!

やめなさいっ

やめてっ

こ…これは  
何なの  
ですかっ

トク

爺っ  
やめさせて  
え——っ

おめっ

うう





まっ…

なかで  
まわっています

まわって  
るっ!

おなかの奥  
入ってくる

はい  
マイロード

よし  
入ったな

いけ  
エクリ  
マルタ!

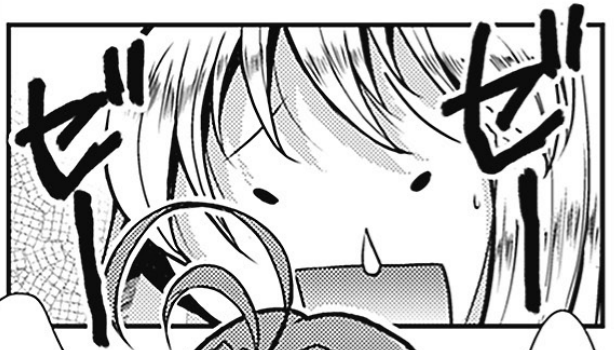
わたくしのおなか  
狂ってしまいます

こんなの  
ムリですっ





急に  
雪降りすぎ!



信用されて  
ないなあー

エーテルランドも  
あつという間に滅...

沙枝<sup>さえ</sup>じや違反者が  
近くにいても  
気付かなくて

カバンの中はずっと居たから  
冷えちゃったのよ



あつ!  
あれはっ...!

# 魔法少女 沙枝

氷使いの違反者

漫画 SHUKO  
COMIC

湯たんぽ  
買って行くから  
先に帰っていて



おおっ  
雪だるま

カマクラも  
セットだーっ



雪つゆきぎも  
あるー



これ下手だなあ

エミットはしゃぎ  
過ぎだよー

クッス  
クッス



わあああ  
あああつ

…って  
あれ？



ひやあつ

どうしたの？

ああああ  
あれ



ばん









それ私が

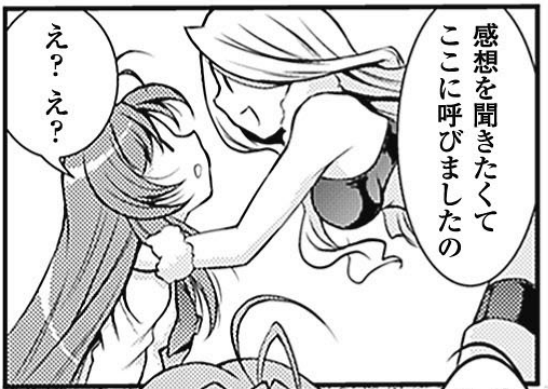
作りましたもの



!!

あんなのに  
奥の奥まで突かれたら  
どうなっちゃういますか?

例えばあの大きな  
おちんちん



感想を聞きたくて  
ここに呼びましたの

え? え?



トウッ...



ちゅるるる

あっ!

意識を吸われ...た!?



そしてそのちんちんが  
ゆっくりとピストンを繰り返す

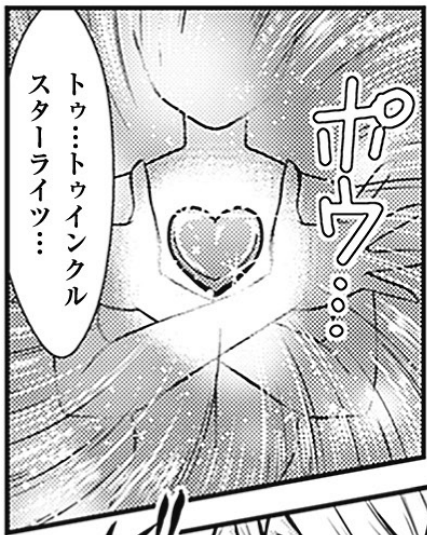
いきなり  
Hな事を巨元で...

肉壁を押し広げつつ  
徐々に...

な...何この人

この人  
違反者ー!

ワッ...



トウ...トウインクル  
スターライツ...

ポウ...

そんな状態で  
変身だなんて



フォームア——ツプ!!

きゃあああああつ

ズッ

私なんでも凍らせる  
ことができますの



これはご挨拶がわりの凍らせた  
ローションの触手ですわ

しゅるるるっ

ひあっ

冷たっ

冷たい——

あらあら

早速感じているの？

ローション触手が  
溶けてきますわ

ちっ違っ……

ぬるるるるっ

あんっ  
なんていい声

素敵よ  
あなたの凍える顔

三千ッ

うふふ  
溶けた触手お腹に溜めて  
何言っているの？



遠慮せずに  
もっと感じて  
いいんですよ？

ひっ



んっ...んっ...

いやあ...

うあっ

おっ...

...

すっ

びびっ

びびっ

びびっ

びびっ

は

は

びびっ

びびっ





ブツッブツッ

ブツッ  
ブツッ  
ブツッ

なんて素敵な  
シャワーなの

はぁ

凄いわ

はぁ

はぁ

はぁ

はぁ

はぁ

さか い ひとし  
小説 酒井仁

挿絵 SAIPACo.  
ILLUSTRATION

すべては敏腕  
プロデューサーの思惑どおり!?

正義のヒロインと  
悪の女幹部が  
生中継でポロリする  
ようです

第2話 過激拷問生中継!?  
ベラドンナ調教完了

シテイグロリア最大手TV局、グロリアTVの敏腕女プロデューサー、ナタリー・ヘントマンの朝は、一杯のエスプレッソから始まる。

既に早朝から局内では大勢のテレビマンが走り回っているが、ナタリーはあくまでも優雅に、地獄のように濃厚な苦みを堪能する。いわばこれが彼女の「儀式」なのだ。

「ふう……」  
シャープな金属フレームの奥のまなざしは、いつになく上機嫌に見える。

女だてらに生き馬の目を抜く業界での地位を掴み取り、視聴率のためなら上司とも渡りあう自信が肉感的なボディから滲み出てくるようだ。

「き、キミイ、待ちたまえ！」  
「るっさいわね、放しなさいよお！」  
すごい剣幕で怒鳴り散らす若い女の声、制止しているのは警備員だろうか。

どすどすと猪のように床を踏みならす「それ」は、一直線にナタリーのいる部屋に近づいてくる。

「……来たわね」  
女プロデューサーは慌てた様子もなく、ゆつくりとエスプレッソを飲み干し、扉に目を向ける。と同時に、ドアを吹き飛ばさんばかりの勢いで茶髪の少女が乗り込んできた。

「グッモーニン、キャサリン。その様子だと昨夜の疲れは残っていないようね」  
やや呆れたようなナタリーの顔も道理、華奢な少女の首に屈強な警備員二人がしがみついて目を白黒させている。

自分の体重の倍はあるかという大男二人をもものともせず、ここまで歩いてきたのだろう。

「あーもお、あんたら邪魔っ」  
少女は警備員の襟首をむずと掴むや、やすやすと引き剥がして廊下の向こうに投げ飛ばす。尋常では

ない怪力である。

「あ、あ、あんたはあゝゝ……！」  
言葉にならぬ怒りに震え、ずかずかと迫ってくる少女の茶色の髪が、見る間にピンク色に染まってい

く。

これは少女——キャサリン・グレイス——のメタモル能力「怪力」の副作用。つまり警備員を投げ飛ばしたのはキャサリンの素の力だということになる。

「ど、ど、どういう、あ、あんたはっ……」  
「落ち着きなさい。エスプレッソでも淹れてあげましょうか？」

なんの特殊能力も持たない女プロデューサーは、しかし落ち着き払ってエスプレッソメーカーのスイッチを入れようとする。

少女がその気になれば、まったくの素手で彼女の命をも脅かせるというのに、ナタリーはなんの恐怖も感じてはいない。

当然だ——少女は悪党から一般市民を守る正義の「ヒーロー」なのだから。

「ななななんだったのよ、昨夜のあれはっ！ なんだあしがあんな、ヒーローショウ・アダルトとか、あんなっ、エッチな目に……」

「契約書」  
余裕綽々のアダルトな美女は、こともなげに書類を一枚つまみ上げてみせる。

「ぐっ……た、確かに昨夜帰ってから書類を見たら、そんなことが細々と書いてあったけど……」  
「番組の趣旨もろくに理解していなかったわりには、昨夜の放送はおおむね、いえ大成功と言ってもいいわ。視聴率は予測の五割を超す数値を叩き出したし、反響も上々よ」

そう言っただスクの上の新聞の山を示す。  
ヒーローショウ・Aについて二面で大々的に取り

上げているのは、さすがにゴシップ芸能紙といった大衆紙。

だが、いわゆるクオリティ・ペーパー（高級紙）でも経済面からグロリアTVの新企画について興味深く論評している記事が目立つ。

「無論、クレームがなかったわけじゃないわ。でもそれを遥かに上回る市民があなたたちの美とエロスの供宴を歓迎したのよ。ロートル犯罪者と新米ヒーローにしては誇るべき快挙だわ」

「いまいち喜べないっつーか……大体あたし初体験だったんですけどー。別に好きな人とか特にないけど、初めてはもう少しロマンティックについていうか、そもそも相手が人間ですらないとか、ありえないんですけどー」

「怪人に処女を捧げるとか、ヒーローじゃないとできない貴重な経験じゃない」  
「そういう問題っ?! そ、そうよっ！ あれはなんなのよ、あのSOKO||AGEがどうかこうとか！ なんてあのおばさんだけがあんなものもちやつてるのよ、不公平じゃないっつー！」

「あら、よく覚えてたわね。あれは試験的に導入したもので、まだ実用段階じゃないの。でも成果は上々、ベラドンナのようなロートル犯罪者でもあなただを圧倒することができたわ」

「あ、あれはちよつと油断しただけで……それより、ずるいじゃない！ あれ、あたしにもよこしなさいよ!!」

鼻息も荒く詰め寄る少女の顔に、ナタリーはエスプレッソの小さなカップを突き出している。

「そう……そうね。一方にだけ肩入れするというのも不公平ね。それに、あなた意外と戦闘になると慎重で画的にいまいちだし」

「い、いまいち……クレバーな戦い方と言っただけいわ」

「ぶるんと張りのある胸を張ってみせると、受け取ったカップの中身を一気に吸る。と、一瞬で美少女らしからぬ凄まじい形相になる。」

「ぐええええ、なにこれまっずう……」

「オーケイ、キャサリン・グレイス。次回の放送ではあなたにもSOKO||AGEシステムが使えるようにします。放送日はまだ未定だけど、十日後をめどにプロジェクトは進行中です。出演者に関する行動の規制について、もう一度よく契約書に目を通しておくことをお勧めするわ」

理路整然と話を進める美人Pに、世間ずれしていない小娘は頷くしかない。

「わかったら、行ってちょうだい、私には私の仕事があるのよ。視聴者からの要望は、より過激な、より刺激的な映像なの。もう一度企画を練り直さないと……そうね、あなたせっかく都会に来たんですもの、シテイの観光でもしてきたら？」

「か、観光か……そう言えは田舎じや見たこともないお洒落なブティックが……」

すっかり毒気を抜かれたキャサリンは、体よく部屋を追い出される。

少女が、対戦相手であるベラドンナ女史との同居を強いられていることについてクレームをつけ忘れたことを思い出すのは、それから一時間も後のことであつた。

タッタタッタタッタ……。

朝もやけむる早朝の街をジョギングしているのは、スウェット姿の女性。黒髪をポニーテールにくくりかたりのハイペースで人気のない街を疾走する。

最後にものを言うのは特殊能力でも若さでも知恵でもない、「基礎体力」だというのが、彼女、マキ・城崎・ダナウェイ——またの名をレディ・ベラドンナ——の座右の銘である。

「ふうっ」

たっ、とあるアパートメントの前で停止して息を整える。ぐっぐつと身体の筋を伸ばしてクールダウンのストレッチを終えてから、部屋に戻ってシャワーを浴びる。

ジャージを脱いだ女体は、均整が取れていて美しい。引き締まってはいるが筋肉質というほどではなく、ふつくと成熟した女性の曲線が大人の色気を放っている。

東洋人の血が入った肌はきめが細かく、蠟石のような白い肌を熱い湯が玉になって転がる。ジョギングによって温まった血行がさらに促進される。

「……よし！」

洗面所の鏡を覗き、両手でパンと自分の頬を叩いて気合を入れる。

今日は特に何があるというわけではないが、こうやって自分に活を入れないと人間はすぐに墮落する生き物だと彼女は思っている。

特に——ぬくぬくと甘やかされた環境で育ってきた小娘などは。

「う……ううん……」

バスローブ姿でリビングに足を踏み入れたマキの肩が、ピクリと吊り上がる。スリッパが簡易レンジ食品の空トレイを蹴ってしまったのだ。

「うん……もう朝あ……？」

びく、と額に軽く血管が浮かぶ。

「あー、お腹すいた……コーヒー飲みたい……砂糖とミルクたっぷりなのやつ……」

もぞもぞ、とシーツの中でたうちながら勝手なことをつぶやいている同居人に、ベラドンナ——マキは辛辣な一言を浴びせかける。

「そういうことはお抱えのメイドか、ランプの魔人にでも頼みなさい、この自堕落娘！」

「……によお、朝つばらからかりかりして……」

ふああ、と乙女らしからぬ大あくびをしながらむつくりと身を起すのは、茶髪の少女。

マキと同じアパートメントで暮らすキャサリン、またの名をセイバードール・キティという。

「またあんたのゴミがこつちにはみ出してるのよ、何度言わせるつもり？」

リビングをカーテンで間仕切りしようと言いだしたのは、マキの方だった。

ルームシェアしているとはいえマキとキャサリンは正義のヒーローと悪の女幹部、互いに馴れあうつもりはないし、最低限のプライバシーは守りたかつた。

少女の方も同意したのだが、もつばら領地侵犯してくるのはキャサリンの方だった——主に生活ゴミの類で。

「わかってるわよう、可燃ゴミをちよつと出し損ねただけじゃない。つたく都会つてゴミの分別しなきゃいけないとか、マジでめんどくさつ」

（これだから田舎者は……）

冷やかな視線を向けるが、あえて口には出さない。身支度を整えてからキッチンに向かい、簡単な朝食を作る。

パンと生野菜をちぎつただけのサラダに昨日の野菜スープの残り。いたつて質素だがパンは天然酵母入りの限定品、野菜もオレレンジジュースも無農薬のものだ。

健康な朝食は一日の活力、というのもマキの座右の銘の一つである。

「あんたも毎日大変ねえ、ダミー会社だっけ？ 悪党が毎日スーツ着て出勤してるだなんて思わなかつたわ」

朝食を終えたマキが地味なスーツに身を包むのを、キャサリンはベッドの中から眺めている。

彼女たちは基本的に「ザ・ヒーローショウ・A」

に出演するためにこの街にいる。だから次の出演日までは特に何もする必要はないのだが、マキは毎日定時にスーツ姿で出かけ、定時になると帰宅するという生活パターンを守っている。

「……いちおう所属組織がある手前よ。本部の活動は無期限延期中だけど」

「ふう〜〜〜ん」

気のない生返事をあつさり無視し、スーツの美女はさつきと部屋を出ていってしまふ。

キャサリンは気にした様子もなく、ごろりとベッドに仰向けになる。実のところキャサリンはベラドンナにマキに対する興味はほとんどない。

実家の親以上に口喧しいし、鬱陶しいおばさんだ。とつと次の戦いで叩きのめして、もつと凶悪な悪党と戦いたいと思っていない。

（それに、次はあたしもSOKO||AGEなんとかをさせるみたいだしね、むふふふ）

一人にまにましながら携帯モバイルを取り出す。

これはスーパージャスティス協会に登録したヒーローに支給される特殊なモバイルパッド。

ヒーローランキングの確認やメタモル犯罪者のデータなどを閲覧することができる。

キャサリンは自分の——つまりセイバードール・キティのパーソナルデータを呼び出して満足げにそれを眺める。

「ふふふ、この個人データにあたしが倒した犯罪者が列挙されていくのね……今はまだゼロだけど、近々ここにおおさんが加えられるのよ」

ついでのので、キャサリンはベラドンナのデータに目を通すことにする。

「確か、動物を怪人に変えちゃうメタモルなのよね、えーとどれどれ……レディ・ペラドンナ。犯罪結社メタバラノシアに所属。最初の犯罪履歴は十一年前か」

と、ここでキャサリンの眼が驚きに見開かれる。「ちよつ!? 最初にメタモル犯罪を犯したのは弱冠十三歳の時ツ? え、えつ、あのおばさんまだ二十四歳ってこと? ていうか十三歳で犯罪者デビューってどういう育ち方したのよ」

続くベラドンナの生い立ちに目を通すうち、少女の顔は次第に引き締まってくる。

（………両親の存在が確認されるも、両親はベラドンナとの関係を否定。事実上、一切の血縁関係は破棄される。メタモル能力の発現とともに両親から虐待されていた噂もあったが真相は不明……）

メタモル能力がどのように遺伝、発現するかは現在のところまだ完全には解明されていない。

だが突然異能力を身につけた人間に対し、たとえそれが身内であっても差別的な感情が生まれることは決して珍しいことではないのだ。

（十三歳で親に見捨てられて、犯罪組織に拾われたつてことか……あたしの家族みたいなのは、少数派なんだろうな）

キャサリンがメタモルに目覚めたのは六歳の時。自分の体重の何倍もあるベッドを片手で持ち上げる娘に驚きこそすれ、両親はその能力ごとキャサリンを受け入れてくれた。

そして力を持った者の責任をしつかり教え込み、その力を人のために役立てるよう、厳しくも優しく育ててくれた、立派な両親だ。

もちろん、メタモルに対する差別感情がまだ根強い地域があることくらいは知っている。だが、温かな家庭のお陰で、彼女はそれを肌で感じることなく健やかに育ってきたのだった。

「つと、いけないいけない」

少女は身を起し、ぶるぶると頭を振る。

たとえどんな不幸な生い立ちでも、相手はメタモル犯罪者。そして自分が倒すべき敵なのだ。

それに、下手な同情をしてもベラドンナはそれを喜んではいないだろう。

「あたしは正義のヒロイン、セイバードール・キティ! あのおばさん——意外と若かったけど、あいつをここで叩きのめして更生させる、それがあたしの役目のよ!」

前回は後れを取ったが今度こそ……と、決意を新たにしているキャサリンであった。

ピルの屋上を吹きすさぶ風は冷たい。ましてや深夜ともなると身を切るような寒さだが、そこに佇む二人の女性はどちらも露出が大きく薄手のコスチュームに身を包んでいる。

ピンク色のツインテールにボディスーツ状の防護スーツの少女と、SMの女王様のような黒ずくめの美女。美女の傍らには鼻面の尖った獣人が歯を剥き出して少女を威嚇している。

「ほ〜〜つぽつぽつぽつ! 覚悟はいいかしら、セイバードール・キティ。今回の怪人は生命力強靱なドブネズミ怪人よ。前回の猫怪人より敏捷な上に、どんな病原菌を持つてるかわからないバイオテロ兵器! 迂闊に攻撃を受けると大変よ!」

「………」

「ああら、びびって声も出ないのかしら、田舎育ちの小娘はさつきと尻尾を巻いて帰郷した方がいいのではなくて?」

「………」

対峙するスーパーヒロインは無言のまま。

その耳につけたインカムから、ナタリーの叱責が突き刺さる。

「何してるのキティ! 悪党の挑発にはきちんと正義の名乗りで答えなきゃだめでしょ! 待ちに待った「ザ・ヒーローショウ・A」の第二回生放送なのよ!!」

「………」

「……………っさい」  
「ほほほほほ、そつちから来ないのなら、遠慮なく先制攻撃をさせてもらうわよ。お前たち、やつておしまいっ」

「ギンシャアアアアアアツツッ！」  
ベラドンナが腕を振ると同時に、二体のネズミ怪人が飛び出していく。

ベラドンナの言った通り、猫怪人を遙かに上回る超スピードでキティに肉薄し、病原菌まみれの牙で少女の柔肌を傷つけようとした、その瞬間――。  
びゅわんっつっ。

「え……………」

その時「誰が」「何を」したのか、ベラドンナの目には何一つ捉えることができなかった。

一陣の風が巻き起こったと思った次の瞬間、ドブネズミ怪人の姿が消え、ビル屋上の給水塔がひしゃげていた。

吹きこぼれる水煙の向こうから、うっすらと浮かび上がるのは給水塔にめり込み昏倒しているネズミ怪人たち。超スピードを上回る超々スピードで叩きのめされ、吹き飛ばされたのだ。

「ま、まさか」  
じやりっ。

ゆっくりと構えを解きながら、一步を踏み出す。

少女のツイントールを止めている髪飾りが不思議な光を放ち、心なしか少女の身体もうっすらと光っているようだ。

「S O K O I I A G E システム――！」

そう、メタモル能力者の細胞一つ一つに働き掛け、一時的に能力を底上げする禁断のシステム。戦闘が始まると同時にキティはそれを発動させ、怪人たちを瞬殺したのだ。

それを悟ったベラドンナは、自分にも支給されている紫のペンダントを発動させようとする。ただで

さえベラドンナの身体能力はそれほど高くはない上に、強化されたキティになど敵うはずもない。

だが、何もかもが遅かった。  
再び「じやりっ」と音が響くと同時に、フィルムのコマ落としのように、目の前にキティが現れる。

特別なことは何もしていない――ただ足を踏み出し、接近しただけだ。ただそのスピードが常人の何十倍、何百倍に加速されていただけ。

（これが、この娘の――本当の力！）  
ベラドンナは、キティの能力の本質を知り、戦慄した。

怪力とはすなわち筋力の上昇であり、筋力の上昇はすなわちスピードを生み出す。

キティのように純粋な肉体強化能力の場合、それが底上げされるということはただ単に力が強くなった、攻撃力が高まったというだけではない。

「相手が何かをするよりも早く」「なんでもできる」ということを意味しているのだ。

「ぐっ……………」

気がつけば身構えることすらできないベラドンナの鳩尾に、キティの拳が決まっていた。

ぐったりと倒れ込む女体を抱きかかえるようにして横たえようと、スーパーヒーローは「ふうっ」と吐息をついた。

そしてどこからか撮影しているであろうカメラに向かって高らかに宣言する。

「さあっ、もうくだらないショーはおしましょ！

勝負は見ての通り、あたしの圧勝、次からはこのキティちゃんが悪党をバツバツと叩きのめすスーパーヒーローインショーが……って、聞いている？」

「ええ、聞いているわよキティ」

「なら、さっさとこんな番組終了――」

「くすくす……あなたがこういう行動に出ることくらい、私が予測してなかったと思うのかしら？ 海

千山千のテレビマンなめんじやないわよ」  
まったく焦っていないナタリーの声に不審を抱いたその時、背後に人の気配を感じて振り返る。  
「あ、あんた誰……って、う、うっそー！」

戦闘開始わずか十秒で怪人とベラドンナを倒したセイバードール・キティ。

当然、ぼろりもあるでよな深夜特別契約チャンネル「ザ・ヒーローショウ・A」としてはまったくありえない展開ではあるが、そこに現れた人物を前に、キティは言葉を失っていた。

「あ、ああ……………」

「ふっふっふっ……見事な勝利、おめでとう素敵な仔猫ちゃん」

スポットライトに照らされた白タキシードのスマートな男性は、キティにウィングを投げよこす。

ぱっちり整えられた金髪リーゼントに、彫りの深い苦み走った美貌。年の頃なら三十代前半か、カメラ慣れしているのか立ち姿も決まっている。

それもそのはず、彼こそはアレックス・グッドウィン。グローリアTVをはじめ数々の高視聴率番組の司会をこなしてきた、超人気、超有名・超名物司会者。

「そうっ、ボクは世界的大人気司会者アレックス・グッドウィン！ この「ザ・ヒーローショウ・A」のために参上したってわけさ」

今度はカメラ視線でばかりとウィング。

この番組は男性をメイン視聴者層にしているが、もしも女性視聴者がいたらテレビの向こうでうっつりと瞳を潤ませていたことだろう。

グッドウィンはその甘いマスクで数々の美女と浮名を流してきた、名うてのプレイボーイとしても有名なのだ。

（ど、どどど、どうしよう……あのテレビで見た

ことある、めっちゃ見たことある！ ゆめゆめ有名人だよ、さ、さすがは大都会だよ〜〜〜つつつ」

先ほどまで無数のカメラに囲まれながら平気で戦っていたキティだが、「テレビで見たことある有名人」を前に、すっかりただの素人娘に戻ってしまった。

「さて——キミとベラドンナの勝負は確かにキミの勝利だ。だがこれで番組を終えるわけにはいかないんだよ、仔猫ちゃん」

「へっ?」

グッドウインがばちんと指を鳴らすや、インカムをつけた男たちが何人も現れ、何も無いビルの屋上に見る間にセットを組み上げていく。

「派手派手しい看板には『敗者の罰ゲームショウ!』の文字が躍り、舞台の真中には奇妙な形の椅子が設置される。

「な、何よあれ……ちよ、そいつどうすんの?」

呆気に取られるキティの目の前で男たち——A D軍団はベラドンナを担ぎ上げてその椅子に縛りつけてしまう。

黒のエナメルブーツに包まれた両足が持ち上げられ、Mの字に開脚させられた格好で固定される。大股開きになった股間の真ん前にはさらに奇怪な道具が据えつけられる。

一見すると小さな水車のように見えるが、周囲ぐるりと刷毛のようなものがついている。何に使うのかさっぱりわからないが、キティの背中がぞくりと震える。

「さあつ、仔猫ちゃんはボクとともにこちらの司会者席に。勝者には栄光を、敗者には罰を!」

突如浴びせられたスポットライトに目がくらみ、高らかにファンファーレが鳴り響く。その音にベラドンナも気付いたのか、ぼんやりと目を開ける。

「ううん………わ、私どうなって………きゃあつ、

な、なんなのこれ!」

「お目覚めかね、レディ・ベラドンナ。キティくん

に敗北したあなたには、これから自らが犯してきた罪を告白し、懺悔してもらおう」

「あつ、あんたはグッドウイン!? つてことはまだ番組は終わってないって言うこと?」

自分が拘束されていることに気付いたベラドンナの顔が、さすがに青ざめる。

「ヒーローに敗北したメタモル犯罪者は、その能力故に過剰な扱いを受けることも稀ではない。マスクをはがされ正体を暴かれてしまうのか、はたまたおぞましい悪事の数々を、白日の下に晒されてしまうのか。」

「レディ・スアンドジェントルマン! これより敗者レディ・ベラドンナ尋問ショーが始まります!! では仔猫ちゃん、勝者であるキミは尋問役をやつてもらおうよ」

いきなりの無茶ぶりに、キティは面食らう。

「じ、尋問役? そんなの無理無理ッ! あ、わたしはその、ヒーローだし、えっ、もしかしてもう戦わないの? マジで?」

せつかくナタリーからせしめたS O K O || A G Eシステムも、戦闘以外では使えない。

圧倒的な強さで勝利した喜びもつかの間、キティは司会者席に無理やりつかされ、カンペを読むように言われる。

「どうしてこんな……こ、これを読むんですか?」

と、カンペに目を落としたキティの顔が硬直する。

「こつ、こ、これ……」

見るからに挙動不審に陥った少女の顔が茹で蛸のように赤く染まっていく。

「さあ、仔猫ちゃん、第一問だ!」

「え、えつと、あのその……『あ、あなたは処女ですか』………つて、何聞かせんじやあぁ〜〜つつ!」

「おおつ、最初はストレート且つイージーな質問だあ! さあレディ・ベラドンナ、回答は!」

「いつ、言えるか! つていうか前回、猫怪人が暴走して……ごによごによ」

質問したキティもキティなら、答えさせられるベラドンナの顔も紅潮せざるを得ない。

しかし口ごもる女幹部部にグッドウインはにやりと底意地の悪そうな笑みを浮かべ、司会者席のスイッチを入れた。

ういんういんういん……。

「何この音………つて、ひああああああ!」

下の方から聞こえるモーター音にベラドンナが目をやると、股間の前に設置された水車状の物体がぐるぐると回転を始めていた。

「レディ、これは犯罪者に対する尋問なのです。答えられなければ当然ペナルティがあります……」

グッドウインがさらにレバーを引くと、刷毛のついた車輪はういんういんと前に傾いていく。

そして椅子にくくりつけられ開脚させられた女幹部の股間に、回転刷毛がじわじわと近づいていく。

拷問道具というほど残酷なものではないが、拷問より変質的で変態的な責め道具に、キティは唖然とするしかない。

「さあ答えるのです、レディ! あなたは処女ですか、ヴァージンですか?」

「う、ううう……」

前回の戦いでベラドンナは猫怪人にレイプされてしまっている。それはヒーローショウ・Aを見た人間なら誰もが知っていることだ。

それをベラドンナの口から言わせようというのはあまりにも悪趣味なハラスメント行為。悪党とはいえ同じ女として許しがたい行為に、キティの心につつと怒りが込み上げてくる。

「ちよつとあんた! いくら敗者相手の罰ゲームで

もやっついていいことと悪いことが……きやひんっ！」  
すっぱああんっつ。

大きな大人の平手が少女の臀部を鋭くひっぱたく。  
グッドウインが強烈なスパキンキングをお見舞いしたのだ。

「仔猫チャン……キミは尋問役なんですよ。質問をスムーズに読みこなせないと、キミにも当然ペナルティは与えられます」

「な、何を勝手な……きやうんっ」  
すばんっ、すばああんっ。

続けざまに二発、左右の尻を交互にひっぱたかれる。音に比して痛みはそれほどではないが、なぜかキティのヒップはじんじん痺れ、腰から力が抜けそうになる。

（あ、れ……なんかあたし、変……？）

「さあレディ、回答はまだですか？ お答えいただけないと大変なことになりますよ」

刷毛車はゆつくりとペラドンナの股間に近づきながら回転を増していく。

女幹部のコスチュームは布地が薄く、食い込んだ下肢の付け根は肌が露出している。そこを刷毛で擦り上げられたらどうなるのか、ペラドンナ自身も想像できない。

「や、やめ……い、言うわ！ わ、私は……先日、自分の生み出した猫型怪人に、レ、レイプされました……」

恥辱に唇を震わせつつ、恥ずかしい告白を始めるペラドンナを、グッドウインの無遠慮な視線がさらに辱める。

（仕方ない……私はあの小娘に負けたんだから。でもまさかあの女プロデューサーがこんな趣向まで考えていたなんて）

「ザ・ヒーローショウ・A」はキティとペラドンナが戦う姿だけを見せものになっているわけではない。

戦いの中でエロエロな目にあう彼女たちの痴態で視聴者を楽しませるのが目的。

（それはわかっているけど、く、悔しい……ッ）

「では仔猫チャン、次の質問だあ！」  
グッドウインの手の動きにびくつと身をすくめたキティが、慌ててカンペに目をやる。ちゃんと読みこなせないと、また尻をひっぱたかれてしまう。

「では、第二問です！ 『あなたは人間の男性とセックスをしたことがありますか？』」

これもまた、前回の放送を見たものならわかっている答えだ。にもかかわらず、あえて言わせようという底意地の悪さに呆れ果てる。

「……私は、人間の男性とセックスしたことはありません……」

「あなたの処女を奪った、猫のペニスの具合はいかがでしたか……？」

「……お、大きくて硬くて、熱かったわ……」

「では、ケダモノのペニスでどこをどんなふうにしたのか、具体的に説明していただきましょう」

どこまでも爽やかな笑みを浮かべつつ、名司会者の目にはこの上なく残忍な光が宿っている。

「さあ、答えなさい、これはあなたへのペナルティなのでから」

「……怪人のペニスを、ヴァギナに挿入されました。そして一番深いところ……し、子宮の入り口を激しく突かれまくったわ。これでいい？」

「気持ちよかったですか、獣に犯されて」

「いいわけないでしょう。あれは怪人が言うことをきかなくなつて」

しかし前回の放送を見ているグッドウインのいやや笑いは止まらない。

怪人に処女を奪われたペラドンナは愉悅に狂い、呆気なくエクスタシーに達してしまったことを彼は知っている。

（なんてゲス野郎なの、こいつ……ッ）

「さあ、次の質問を読みたまえ、仔猫チャン」

質問の紙に目をやったキティの動きが一瞬止まる。  
「……次の質問、です……」

「……仔猫チャン？」

「次の質問、ですつ！ 『あなたは、マスターベーションをしたことはありませんか？ あつ？』」

言いきつた少女は耳まで真っ赤になる。だが質問はそれで終わりではなかった。

「マスターベーションとは、自慰、オナニー、せんざり、手淫……自分で、自分の乳房や性器を弄って快感を得る行為……で、す……」

最後は消え入りそうになるが、どうにか最後まで読むことに成功する。が、これはペラドンナだけに對する罰ゲームではないということに今さら気付かされる。

辱めを受けているのはキティも同じ。

今頃この生放送を見ている視聴者は、自慰だのオナニーだの口にする正義のヒロインの姿に興奮していることだろう。

性的知識が豊富とは決して言えないキティ……キヤサリンでも、オナニーくらいは知っている。

「おや、レディ・ペラドンナ。回答は？」

そして、当然質問に答えなければいけないペラドンナもこの悪趣味な羞恥ブレイの生け贄。

「……な、ないわよ、そんなものっ！」

吐き捨てるようにそう言っつて目をそらす女幹部に、人気司会者はざらりと目を光らせる。

「ほ、ほおう……ナルホドナルホド、レディはこれまでただの一度もオナニーをしたことがないと仰るのですね？」

「そ、そう言っつたでしょう！」

キッと睨みつけるペラドンナの視線を軽く受け流すと、グッドウインはおもむろにペラドンナに近づ



いていく。

身動きのできない女体を見下ろすそのまなざしはまるで爬虫類のようで、ベラドンナのうなじがぞわりと逆立つ。

「前回のあなたの放送……ボクも見せていただきましたよ。自分が処女であることを告白するあなたの姿……そして自ら生み出した怪人に無残にも犯されるあなた。ええ、興奮しました」

「ふん、世界的人気司会者が聞いて呆れるわね、この変態！」

「英雄色を好むと言うでしょう。かく言うこのボクもこれまで星の数ほどの女性と付き合ってきましたね、女性を見る目はそこそこあるですよ」

まるで全身を舐め回すようなねちっこい視線に、鳥肌が立ちそうになる。

「レディ……あなたの立ち居振る舞い、プロポーション、なるほど確かにヴァージンに相違ないとボクは確信しました。と同時に、怪人のペニスに貫かれ、悶えるあなたを見てこうも思いました」

「回りにくい男はモテないわよ」

股間の前で回転する刷毛車から目をそらしながら、ベラドンナはせせら笑ってみせる。

だがそんな虚勢をすべて見透かしているように、グッドウインは息も触れればかりに顔を近づけ、囁くような小声でこう言った。

「確かに処女かもしれないが、この女「快感に慣れてやがるな」……つてね」

「……ッ！」

火を噴きそうな視線をそよ風のように受け流すと、グッドウインはくるくると華麗に司会者席に戻るや「すばあんっ！」とキティのヒップに平手の一撃を入れる。

「んくううっ」

「さっき一回つつかえた分ですよ。ではレディ・ベ

ラドンナ。もう一度お尋ねしますよ。今度は正直に答えてください。あなたは、マスターベーションをしたことがありますか？」

目はベラドンナに向けつつ、グッドウインの手はキティの尻に押し当てられたままだ。

あからさまなセクハラ行為にキティは怒りを感じているはずなのだが、なぜかその手を振り払おうという気持ち起きない。そのうちに男の手は無礼にも少女のヒップを撫で始める。

（こいつ……でも、いちおう有名人名だだし、ここでこいつをぶっ飛ばしちゃったら番組がめちゃくちゃになっちゃうし、こ、ここは我慢するしかないのかな……）

この時、キティは重要なことを見落としている自分に、まったく気付いていなかった。

番組の進行を気にして、よく知らない中年男に尻を撫で回されても我慢する……そんな気の回し方をするほど、自分は気配りのできる性格ではないということに。

（しょ、しょうがないよね……この人も仕事でやっているだけなんだし。あ、あたしはヒーローで、メタモル能力を持ってない一般人に手を出すわけにはいかないもんね……）

グッドウインの手はますます調子に乗って、つると少女の尻の上をせわしなく動き回る。布地越しに、ごつごつした成人男性の手のひらの感触が伝わってくるが、嫌悪感をもたらすはずのそれはなぜかキティの胸を熱くする。

「くつくつくつく……レディ・ベラドンナ、そろそろ答えていただきましょうか」

回転する刷毛車に顔を青ざめさせるベラドンナと、尻を弄ばれて赤面するキティ。

二人の女体を言いように弄ぶ世界的有名司会者の目つきは、明らかに尋常ではなかった。

録画と違い、生放送の緊張感は一時も油断が許されないところにある。

もちろんそれは現場だけではない。スイッチャーはナタリーの指示でときばきとカメラを切り替え、タイムキーパーは次のCM入りの指示を待ち、ADはあらゆる部門からの通達をナタリーに伝えるべく走り回っている。

「視聴率、どう？」

「いいですね、前回のような爆発的な伸びはありませんが、同じ数字をキープしたまま、じわじわと右肩上がりです。それにしても、グッドウインつて……」

正義のヒロインと女幹部を手玉に取る司会つぷりは、一般向けバラエティショーでは見せないサディスティックな面を隠そうとしてもしていない。

だが、それが敏感腕プロデューサー、ナタリーの狙いだつた。

「キティにSOKO||AGEシステムを渡した時点で、まともな勝負になるとは思ってたわ。どの道、あの子たちはテレビに関してはずぶの素人なんだし。それに、グッドウインは単にハンサムで才能のある司会者じゃないのよ。どんな有名女優も弄んではゴミのように捨てる……そんな危険な香りが人気なのよ」

「は、はあ……」

若いADには理解できないが、そういうものなのだろうか。確かに、容赦なくベラドンナを言葉で攻め立て、向こう気の強そうなキティを従わせている姿は、とても「メタモルを持っていない一般人」には見えない。

「あ……まさかとは思いますが、あのグッドウインつて、メタモルじゃないですよ？ 女限定で自分のいいなりにさせる能力者だとか……」

その言葉に、ぎろりとナタリーはADを睨みつける。

「メタモルの発現を確認しながら市当局にそれを申告していない人間は罪に問われるのよ。『そんなことが』『あるはずない』でしょう?」

「は、はいっ、失言でした!」

青ざめて仕事に戻るADに興味を失うと、ナタリーはモニターに目を移す。

「さあ……ショーはここからが本番よ!」

（おかし……何が間違ってる……）

拘束椅子に縛りつけられ、今にも刷毛車で拷問されようという寸前のベラドンナの脳裏からは、違和感が消えない。

（あの直情単純脳みそ筋肉のお嬢ちゃんが、あんなすかした優男にセクハラされて、じっと耐えてるだなんて……）

アレックス・グッドウィンのごとは一般常識程度には知っている。

数々の浮名を流してきた名うてのプレイボーイ、決して一人の女に縛られないジゴロ。多くの男性には羨望と嫉妬の目で見られ、それ以上に多くの女性から支持を得ている、超人気司会者だ。

地方出身者のキティが芸能人のオーラに威圧され、されるがままになっているという可能性が、ないわけではない……のだが。

「んっ、ちよ……あの、グ、グッドウィンさん」

「何かな、仔猫ちゃん? まだ尋問は終わってはいませんよ」

片手を刷毛車の操作レバーに、もう片方の手は今やしつかりとキティの尻肉を掴んでいる。ただでなく、緩急をつけて揉みしだき、乙女の尻肉の感触を楽しんでる。

キティは時折肩を震わせるが、それは嫌がっている

というより、込み上げる快感を必死にこらえているように見える。

「さあ、レディ。尋問には正直に答えないと、ペナルティですよ」

ベラドンナに尋ねつつ、男の手はさらにもぞりと尻の割れ目をなぞる。薄い布地にかろうじて守られた下肢の付け根を、下から手を差し入れるようにしていやらしくまさぐってくる。

「あっ、ん、んふううっ……!」

（あの娘、快感を感じてる……いえ、感じさせられている?）

プレイボーイの愛撫テクニクがいかに卓越しているようと、カメラに囲まれたこの状況で尻を撫で回された程度であの反応。

まさか、と不吉な予感に襲われたその時、刷毛車が「ぐうんっ」と前に傾斜してきた。

「んっ! あ……ッッ」

ぎゅるるるる……にゅるるるる……。

ぬるぬるした液体の感触と股間を撫で上げられる感覚に、ベラドンナの身体がびくんと跳ねる。

手足を拘束台に固定されているとはいえ、まったく予想もしていなかった未知の感覚に、女幹部はざりりと唇を噛み締める。

（これは、ローション? くっ、こんな機能まであるなんて……ッ）

ぎゅるるるる……毛にたっぷりと染み込んだローションのぬめりを利用して、刷毛車は容赦なくベラドンナの花弁をねぶり上げてくる。

肉ひだが絶妙な力で押しつぶされ、粘液の中でわななき、汁を飛ばす。

それは生き物の舌と違い無機質な感触。

だが、モーター駆動によって一瞬も休むことなく敏感な肉芽を擦り立て続ける。薄い布地がローションでてかり、そこにくつきりと貝の身のような花弁

が浮き上がる。

（くっ、あの女のことだから、きつと局部をアツで流してに決まってる）

冷徹な女プロデューサーの顔を思い出し、ベラドンナは恥辱に唇を噛む。

「さあ、質問の続きです。あなたには自慰の経験がありますか、レディ・ベラドンナ?」

「うっ、くううっ。あ、ある、わ……あるわよ、そう言えればいいんでしようっ」

いづれにせよ自由を奪われ、罵られ辱められるしかないのだ。

今さらセクハラ尋問に答えることを拒んでも仕方がない。しかし、刷毛車は離れるどころかますます強く押しつけられ、回転速度は上がっていく。

ぎゅるる……ぬりぬりぬりぬり……。

「ん、ひいうっ! ちゃんと答えたわよっ」

「ああ、これは失礼。ですがレディは最初、ウソの回答をしましたね、そのペナルティですよ」

「くっ……あ、ひううんっ!」

突然、刷毛車の回転が止まり、今度は逆に回り始める。

クリトリスを下から舐め上げる動きから、上から舐め下ろす刺激に変わり、膣奥までずんずんと響く衝撃に、ベラドンナはがくがくと全身を痙攣させ、

半開きの唇から舌を突き出して悶える。

（こんなんっ、ただのおもちやに刺激されるのが気持ちいいだなんて、み、認めないッ……）

だが成熟した女性の奥からは「じゅわっ」と熱い蜜が滲み出て、摩擦で温められたローションと混じりあい、牝の臭いを放つ。

「あひっ、はっ、ひうう……ッ!」

「では、次の尋問に移りましょうか」

「……」

あッ

しかしよく  
見つけてきたよなあ

こんな肉便器

くツッ：  
ああッ！

すっげー  
気持ちいいよ  
このマコッ

あん

やッ…らあー

もつと…  
ゆっくり…

陰惨な陵辱劇は終わらない…

NO.ゴメス最新刊  
グラビティ・ダイ



好評発売中!

# 紫乃

退魔剣士

第四話

漫画  
COMIC

NO.ゴメス

で…出るぞッ!!

ほら早く  
どけよ

次やらせろ

はあ…

はあ…

はあ…

あれから…

何人も

お腹あッ…

ッ  
ッ  
ッ  
ッ

何十人もの  
精子をそそぎ  
込まれて…

はあ…

はあ…

あッ

ひゃうんッ

どれくらい  
の時間  
が過ぎた  
の  
だろウ…

ッ  
ッ  
ッ  
ッ  
ッ



おッ

んはああ♥

はッ

はあ

オラッもつと  
激しく突いて  
やるぞッ!!



ひはあッ

ら…乱暴にッ

…しちゃ…  
やだあ…あんッ

や…ああ  
また出てッ…♥



ああ〜気持ちよかった!



ツ……!!

あ…  
あう…

はあ…

出た出た♥



もう使いすぎてマコがばがばんなってんじゃねーの?

んんん…

う…  
うう…

ずいぶん腹が膨らんでんなあ…  
妊娠でもしてるみてーだな紫乃ちゃん



はあ  
はあ

やだ…

そんな…  
ちがうのに…

そろそろ縄ほどいて違うことしよーぜ



今度は  
ケツ穴を使って  
みようか

なッ...  
なにをするのだ!?

ほらほら  
ちゃんとフェラしつっ  
腰を動かすんだよ

チンポ入れるに  
決まってるんだろ



はあ?  
何言ってるんだ

そ...そんなの  
無理なのだ...

だって神人が  
そっちの穴は  
ちがうって...

入れるッ...ぞ!!



ふおおッ!?

おっ

お尻ッ

あぢゅいッ

ひいッ

引っ張...めくれ  
ちやううう...!!

ほっ♡

おっ♡

ほっ♡

おっ♡

おっ♡

おっ

おもしれーピストン  
するたびに間抜けな  
声が出るよ

んあああ  
ほっ♡おっ♡...

ひいッ

ギー

カウ

う

おっ

おっ

おっ

おっ

おっ



初めてアナル犯された  
くせに感じてやがるよ

くうッ

ああーやべえ

ザーメンより先に  
別のモンが  
出ちまいそうだ…!

やっぱり紫乃ちゃん  
って変態なんだな

えッ!!

ほまッ♡  
あッ♡

やっやだ…  
お尻の中に  
オシッコされ  
てる…!?

ぬッ抜いてええッ!!

やだああッ

何言ってるんだ  
便器なんだから  
いいだろ?

こっこんなの  
だめえええ

お腹も頭もっ…  
バカになっちゃううう  
うううッ

洗練されたクールメイドが恥辱に喘ぐ！  
期待の新人作家デビュー作！！

# ニルヴァニア

～メイドを狙う卑劣な淫謀～

にかいどうあき  
二階堂安芸

小説  
NOVEL

挿絵  
ILLUSTRATION

kinntarou

路地裏のテナントビルの地下にある

クラブ。いかにもガラの悪い連中の溜まり場らしい雰囲気のお店だ。実際フロアはそんな客で溢れていた。

店の中を一望できるボックス席で古河統弥は数人の取り巻きに囲まれていた。ジャケットを適度に着崩して場になじんでいるが、見るものが見れば身に付けている物が全て高級品だとわかるだろう。

「みんな今日も盛り上がっていいぜ」  
統弥の一声で店内が一斉にオーという歓声に包まれる。  
(まったく単純な連中だ)

フロアを見下ろして統弥は満足そうに笑った。  
「ねえ、このパーティー全部統弥くん

の貸し切りなんでしょ? 超すごいよね」  
隣に座っている女が、わざとらしく胸の谷間を見せるように上目づかいでのぞきこんでくる。場の仕切りを任せている部下が連れてきた今夜の遊び用の女である。

「そんなに大したことじゃないよ。普段からこの店は使わせてもらっているからね」

「やばい。超すごい」

女が乏しすぎるボキャブラリーで褒めたたえる。注文どおり頭の軽そうな女だ。身長が少し高め、胸は大きいのが全体のシルエットはすらりとしていて、ショートパンツからのぞく脚はほどよく引き締まっており、見た目も統弥の好みの条件を良く満たしている。

古河は伝統あるグループ会社だが、そのせいで老人が上に居座り自ら先導していくタイプの人材が育っていない。統弥がここまで奔放に振る舞っているのも、自分の統率力があればグループのトップを取るなど造作もないという自信の表れであった。

「グラスが空じゃないか、この店で一番高いのをもらえるかな」  
いい物遊び道具を探してきた部下たちにも、わずかさばかりの褒美をくれてやるのを忘れない。  
「やっぱ統弥さんはヤベェわ。オレ一生ついてくよ」

頭を金髪にしている派手好きの男が、調子よく声を上げた。周りにいた部下たちもそれに釣られて一気コールをして盛り上がる。  
(最高の気分だ)

今この瞬間、自分はこの店の王者である。場を完全に支配するという、選ばれた者にしか許されない高揚は、一度味わってみなければ理解できない感覚だろう。

そこにちょうど、先ほど注文した最高級のシャンパンが運ばれてきて場が一層盛り上がる。

一層盛り上がる。

統弥がパフォーマンズとして、派手に栓を飛ばしてやろうと手をかけたところでそれは起こった。  
——ダン!!

勢い良く扉が開け放たれる。盛り上がっていた空気は一瞬にして霧散し、そこにいる全員視線が入り口に向かった。

かつかつと足音を響かせ、ドアを開けた人物が現れる。  
それはあまりにも場違いな格好をした女だった。

メイドである。明らかに日本人とは異なる銀色の髪にヘッドドレスを乗せ、細部にまで糊付けが行き届いた深い藍色と純白のエプロンドレスの着こなしには一分の隙もなく、巷に溢れるコスプレとは違う本物の風格を感じさせる。  
メイドは何かを探するように店内を一瞥する。その視線がボックス席にやってくる

すると、ガラスのような感情の読み取れない瞳が統弥を射抜いた。整いすぎて冷たい印象を与える顔立ちが白磁のような透き通った肌と相まって、まるでビスクドールを思わせる。それが見つめくこちらに近づいてくる。  
こんなときに盾にするために飼っているフロアの連中は、雰囲気にかまわれて棒立ちのまま見送った。

(実に不愉快だ)  
自分が作った空気を他人に——それも使用人の格好をした女に壊された。それはこの小さな空間の王者を自認

する統弥の神経を逆撫でした。

「古河統弥さまですね」  
目の前にやってきたメイドが初めて口を開いた。抑揚に乏しいながらも良く通る声は、不思議と場の緊張感を高める。

「何なんだお前は?」  
統弥は無機嫌さを隠すことなく、低い声を出した。それによってただ惚けていた取り巻きたちが、ようやくメイドを取り囲むように動き出す。  
「お初にお目にかかります。統一郎さまより統弥さまのお世話係り兼教育係りとして遣わされましたシルヴィアと申します」

自分を取り囲む敵意を少しも意に介した様子もなく、シルヴィアと名乗ったメイドは恭しく頭を下げる。

「はあつ、親父が?」  
評判の良くない連中と付き合っているなんて噂を聞いて、お目付役を派遣してきたといったところだろう。  
(それにしても送ってくるのがメイド一人とは、親父は自分を馬鹿にしているのか?)

しかしせっかくだけ自分のために遣わされたのだ、有効に使ってやろう。自分なりのやり方で。

「わかった、よろしくシルヴィア」  
事情を理解した統弥は、勉めて明るく答えた。

統弥が迎え入れたということもあり、周りに集まってきていた力自慢の部下たちも警戒を解く。

その間も統弥の視線は改めて値踏みをするように、シルヴィアの身体をなぞっていた。

まず目を引くのはその大きな胸である。ボタンを首までしつかりと留めているせいで豊かな双丘がメイド服を引っ張り、はつきりと形がわかるほど膨らんでいる。頂の間に溝を作るように配置されたボタンが深い谷間を余計に想像させた。頭を下げているのを見下ろす格好は、ヒップラインも無防備に晒している。少し屈むだけでスカートを持ち上げる桃尻は、日本人ではまず見られない挑発的なラインを描いている。

(思ったよりエロい身体をしているな)

いつもの使い捨てのお手軽な女とは違い、壊してやりたいという欲求を掻き立てられる。

「じゃあ早速みんなにドリリンクを配ってくれないか」

まずは軽く主従として当たり前の命令を下す。

立場を明確にすると共に、このメイドがどれだけ使えるかも見せてもらおう。普通に側仕えをするならあまりグズでは困る。

「いえ、統弥さまには即刻お屋敷にお戻りいただきます」

少しも考えることなく、シルヴィアは命令を拒否した。

「このような輩と時間を無駄にして良い御身分ではございません」

「おいおい、主催者の俺が空気を悪くしたまま帰れる訳ないだろう？」

予想外の展開に湧き上がる怒気を抑えて笑顔を作る。そしてもう一度、ゆつくりと言いつけ聞かせるように問いかける。

「主人の命令が聞けないのか」

「私の雇い主はお父君です。統弥さまとは雇用関係がありません」

しかし目の前のメイドは、やはり眉一つ動かさずに淡々と自分に従う必要はないと言いつけ放つ。

(なんて生意気なヤツだ。一度わからせてやらないといけならしいな)

近くにいる部下に見えるようさり気なく腕を回す。簡単な合図の一つだ。男なら単純に殴り倒し、女は無理やりモノにする。

統弥の意図を察した部下たちは嗜虐的な笑みを浮かべた。

「せっかくのパーティーなんだからメイドちゃんも遊ぼうぜ」

部下の中でも一番腕っ節が強いスキンヘッドの男が、酒瓶を片手に近づいていく。なれなれしい様子で肩に手を置こうとしたときシルヴィアはわずかに身をよじった。たつたそれだけの動作で男の手は空を切り、そのままの勢いで床に転がった。

「だせえな、あれくらいで酔ってんじやねえよ」

それを見て笑っていた男も、シルヴィアの手を掴んだと思つた瞬間には一回転して頭からテーブルに突つこんで

いた。

グラスの酒がひっくり返って見事に引つ被つた男に對し、シルヴィアは飛んできた水滴すら当たつた様子がない。

さすがにこの時点で男たちはシルヴィアがただ者でないことを理解した。

「では統弥さま、即刻お屋敷にお戻りいただきます」

シルヴィアは何事もなかつたように、同じ言葉を繰り返す。本当に命令されたことを実行するだけのロボットのようだ。

「待てよ。テメえ、この野郎」

初めに転ばされた部下が立ち上がる。額には青筋が立ち、完全に怒りの形相を浮かべていた。

この男は統弥に腕っ節を買われているいろいと甘い蜜を吸ってきた手前、女一人に軽くあしらわれたままにはしておけないのだ。

「舐めた真似してんじやねえぞ！」

男は怒りに任せて突進していく。シルヴィアはわずかな重心移動だけでそれをかわした。

「クソッ！ このっ！ ちよこまかしやがつて！」

スキンヘッドは初め捕まえようという動きだったが、ことごとく避けられると単純に殴りかかる動きへと変わった。しかし男は、翻るスカートの裾すら掴むことができない。

「クソアマがあつて!!」

さらに興奮した男が全力で拳を振り降ろす。シルヴィアはそれを初めて手

を使って、小さく円を描くように受け流した。

それだけの動作で男の巨体が浮き上がり、床に叩きつけられる。

暴れていた男は白眼をむいて動かなくなつた。

(何なんだよ、あのメイドは!?)

正確にはわからないが何かの武道——おそらくは合気道や柔術のような物の達人であるのは間違いないだろう。

「では統弥さま、お戻りいただきます」

息一つ乱していないシルヴィアに、統弥は無言で頷いた。

教育係としてシルヴィアは起床を七時、就寝を二十二時までとして、その間はほぼ付きっきりで経済と語学の講習を行った。徹底した生活管理で心身ともに健全な生活をさせ、悪い仲間との交際を物理的に絶たせたのである。

もちろんその間も食事の準備や清掃といった世話係としての働きも疎かにしておらず、実際統弥は血色も良くなり心身ともに健康になつていった。

現在統弥は講習の区切りの一つとして経済のテストを進んで受けるようになっていた。

長期にわたつて安定的ではあるが収益は低いA案と、短期的には高い収益を上げるが安定しないB案どちらを採用するかという、明確な正解を設定していない二択である。

「B案だ。資料の条件なら、A案では初期費用の回収に時間がかかりすぎる。

ならB案である程度の利益を出して業績が落ちたらストップさせれば良い」資料にさっと目を通し、統弥は淀みなく答えた。

「お見事です」

この問題で真に問われるのは理由を述べる時の態度である。人を動かし決断をする者は、実際に動く者が不安や疑いを持つことがないよう己の選択に自信を持たなくてはならない。

資料を渡してから目を通して考える時間、そして理由を述べる態度まで加味して、今回の統弥は文句なしに合格であった。

(できすぎているのが気になりますがこの資質が自信の裏付けだったということでしょうか?)

強引に更生させたにしては、統弥の変化はあまりに優等生すぎた。しかし注意していても怪しい点がないのも事実である。

ここは公の場に出て試す時期なのかもしれない。

「来週は、二十時からグランドホテルで行われるパーティーに出席していただきます」

その日は古河グループの前身である古河鉄鋼の創業八十周年記念パーティーが行われる予定であった。統弥を古河グループの後継者としてお披露目するのに最善のタイミングだろう。

「そうか。……では来週はよろしく頼むぞ、シルヴィア」

「かしこまりました」

少し思案するようなそぶりを見せ、統弥は自信たっぷりに笑みを浮かべた。

その日シルヴィアは、パーティーのために服を新調したという統弥の買い物に同行していた。

本来こういつた物の手配はメイドである自分の仕事なのだが、気分転換として特別に許可したので。

趣味と自称するだけあつて統弥のファッションセンスは確かなものであるし、自信を付けるという意味で自分が選んだ服で出席するのも悪くはないだろう。

しかしそれがすぐに失敗であつたと悟ることとなる。

「よう、統弥くん久しぶりい」

高級店の入り口に似つかわしくない連中がたむろしていた。かつて統弥が連れていた男たちである。仕切りをやっていた金髪の男や、派手に投げ飛ばした男たちもいる。

(少々、甘くなりすぎましたか)

しかしシルヴィアにも気付かれずに連絡を取っていたにしては、ただ大勢で待ち構えていたという杜撰さが気になる。

「最近冷たいじゃない? 統弥くんがないと派手な遊びができなくてつまらないんだよ」

男たちがなれなれしく距離を詰めてくる。

「遊ぶには十分な金を渡してやっただろう。あれで最後だと言ったはずだ」

シルヴィアは主を疑った自分を恥じて、男たちの前に割って入った。

「下がちなさい。このお方に近づくとは許しません」

低い声を出して男たちを威嚇する。一度シルヴィアの実力を目の当たりにしている男たちの間に、わずかな緊張が走る。

「メイドは引つ込んで。俺らは統弥くんと話してるんだからよ」

だが男たちは強気に、また一歩近づいてきた。こうなつてはパーティーの直前でトラブルを避けたいこちらの方が不利である。

(仕方がありません)

シルヴィアは騒ぎを起こしてでも、力づくで男たちを排除する覚悟を決めた。周囲に遠慮してためらっていたが、あくまで統弥の安全が優先である。

しかしその瞬間、男たちとシルヴィアが互いに気を取られている隙に、統弥が駆け出した。

「こつちだ」

すぐさま包囲の薄い路地へと入っていく。

「ダメです! お待ちください!!」

待ち伏せをされた時点で、逃げ回るのは下策である。まして一瞬で判断できるほど包囲が薄い場所があるならば、十中八九それは異だ。

「おっと、そつちは通行止めだぜ」

シルヴィアは慌てて後を追つたが、案の定細い道に入った途端に四方の路地裏から男たちの仲間が現れ行く手を

阻まれた。

「くっ……」

そして統弥は方向転換のために立ち止まった瞬間、路地裏のさらに奥、ピルのわずかな隙間から手が伸びてきて、捕えられてしまった。

(こうまで失態を重ねようとは……) いつでも片付けられるチンピラと、タカを括つたのが仇となった。

「あがつ……」

統弥を捕えている細身の男の腕が、ちようど顎の下に入り込んで首を締め付けている。

一刻も早く助けたいところだが、この狭い路地裏では人質を避けて攻撃することもままならない。

「そのお方を放しなさい」

「ああ、いつでも放してやるさ。俺たちはただ前みたいに派手に遊びたいだけだからな」

「そぞ。統弥くんがいなくても、コレさえあれば別に満足だし」

金髪の男は親指と人差し指で作った輪を突き出した。

(下衆が)

普段滅多に感情を表に出さないシルヴィアが眉をひそめる。

「わかりました。お望みの金額を用意いたします」

「へへへ、そうこなくっちゃな」

へらへらと笑いを浮かべて、金髪の男が近づいてくる。

(受け渡しの際に全員叩く) 財布を取り出すふりをして、全力で

動き出せるよう重心を低く落とす。

「なんてな、見え見えなんだよ」

シルヴィアの間合いに入る直前、男がベルトから棒状の物を取り出した。

（避けるのは無理ですね。ですが問題ありません）

シルヴィアは警棒を振り上げる男を冷静に観察していた。この狭さでは振り降ろす軌道も制限される。ならばその動きに合わせていなしてやれば良い。

——パチイッ！

警棒が手に触れた瞬間、何かが破裂するような音がして一瞬だけ痛みなのか熱さなのか判別ができない感覚が走り抜ける。

「ぐうっ……!!」

男が持っていたのは警棒型のスタンガンだったのだ。

（しまっ……た！）

そう思ったときにはすでに遅く、シルヴィアの意識は闇へと沈んでいった。

「なあもう始めちゃおうぜ」

「それはダメでしょ、一応……」

「……んっ……」

床に転がされたシルヴィアは、周りの男たちの声で目を覚ました。

（縛られてはいくないようです。まだ痺れはありますが、感覚におかしなところもないので薬を打たれたということもなさそうです）

自身の状態を把握したシルヴィアは、続いて周囲の状況を観察した。

内装に見覚えがある。初めて統弥の

元に遭わされた日に連れ帰った店だ。

室内にいる男は十人程度、先ほど自分たちを襲ってきたときより増えている。そして統弥は別の場所に捕らわれているらしい。

（あまりよろしくない状況ですね）

護衛の任に就く者にとつてこの状況は物理的に縛られるよりよほどの枷となる。

「統弥さまはどこです？ 無事なのでしようね？」

シルヴィアはまだふらつく身体を気力で起こした。

「さあ？ 教える訳ないじゃん。まあ心配なら大人しくしてよ」

正面に座っている金髪が意味あり気に携帯を見せびらかす。

「ちなみに、もうメール送信するだけでやっちゃまえてることになってるから、妙な気は起こさないでね」

「あつちの連中は女がいないハズレ組だつて気が立つてるからなににするかわからないぜ」

周りの男たちも、ゲラゲラと軽薄な笑みを浮かべていた。

「統弥さまを解放しなさい。今ならばまだ穏便に済ませることも可能ですよ」

今回のようなゴシップやスキャンダルのネタを潰すくらい裁量はシルヴィアにも与えられている。今回は自分にも非があったことを認め、本当に何事もなかったと処理してもいい。シルヴィアにとつて最大限に譲歩したつもりであった。

「はんつ。頭の悪いメイドだな。こんな事までしておいて、はいそうですかなんて言うヤツはいねえんだよ」

シルヴィアを囲む男たちの中で一際体格の良い男が一步前に出てきた。統弥を連れ戻しに行つたときにも初めに近寄つてきた相手だ。

「この前はずいぶん恥をかかせてくれたよなあ！ その礼はさせてもらうぜ、たつぷりとなあ！」

男はヘッドドレスごとシルヴィアの銀髪を鷲掴みにして、床に引き倒した。

「……う……」

ここで抵抗すれば身は守れるだろう。しかし我が身可愛さに主人を危険に晒したとあれば、メイドとしての矜持が死んでしまう。反射的に攻撃を仕掛けようとする身体をあえて制止する。

「人質を取つて、無抵抗の相手をいたぶつて満足ですか。低俗すぎて理解できかねますね」

暴力を振るわれた後でもシルヴィアは、怯えた様子も怒った様子も見せずただ淡々としていた。

「けっ、ホントに生意気なヤツだな」

その態度に腹を立てた男が、うつ伏せに組み伏せられたシルヴィアの上に男が馬乗りで跨がってくる。

「男だつたらぶん殴つて大人しくさせるんだが、女にしかできないことつてのがあんだらう？」

その言葉をきっかけに場の空気が、暴力的な緊張感からもつとねつとりと絡みつくような不快なものへと変わった。周りを囲む男たちは、ニタニタと気持の悪いにやけ顔になり目を血走らせていた。

「く……放しなさい」

シルヴィアが学んできた技術は、相手の重心を崩し制圧するものである。こんな風にマウントをとられるという事態は想定していなかった。主を護る為身に付けた技術など無意味になつてしまふ現実に悔しさがつもの。

「古河の力を見くびらないことです。このような罪を犯して……たとえここに逃げようとも必ず警察に捕まりますよ」

捕まつてから初めてシルヴィアが無表情を崩し、男たちを睨みつける。

「あれえ、もしかしてメイドちゃん焦つてる？」

「マジで!? あんまり無表情だからリアルドールかと思つてたわ」

「クールな女も良いけどさあ、そういうのはヤメテヤメテつて泣き叫ぶときのギャップでまた萌えるんだよなあ」

初めて表情を崩したシルヴィアを面白がって男たちがはやし立てた。

「それじゃ、お楽しみとしようか」

馬乗りになつていた男が羽交ひ締めにして、シルヴィアの身体を持ち上げウスを引き裂いた。

派手にボタンを飛ばし、服の上からでも視線を惹きつけるGカップのバストがまるび出る。

男たちの視線は清潔感のある白いブラジャーと、それにも劣らない新雪を思わせる乳肌に釘付けとなっていた。まるで餌を見つけた肉食獣のようにギラついていく。

ゴクリと、生唾を飲む音が聞こえてきた。

シルヴィアも自分の身体が異性に對して魅力的に映ることは自覚している。しかし実際にこのような形で獣欲を向けられるのは初めてだった。

「こんな手段を使ってまで女に乱暴しようとは、恥ずかしいと思わないのですか」

嗜虐的な笑みを浮かべる男をまっすぐに見つめ、毅然とした態度で問いかけた。

先ほどよりも近い位置で、より確実に視線が交差する。

「おいおい、そんなマジな顔しないでよ。ホラ、びびって送信ボタン押しちゃうかもよ」

「つか、一番恥ずかしいのはそんな格好してるメイドさんだと思います」

一瞬だけ怯んだ金髪だったが、別の男のおどけた一言で、室内は一気に弱者を攻撃する意図を含んだ嘲笑に包まれる。

（群れて気を大きくした男というのは、なんと醜悪な存在なのでしょう）

目の前の男たちよりも、そんな存在をどうすることもできない自分に腹が立つ。

「すげえ。ぶるぶる震えて誘ってるみたいだよ」

目の前の男が、ブラジャーに包まれた胸をたぶたぶとボールで遊ぶように転ず。

「だ、誰が……その汚らしい手をどけなさい！」

人格を全く無視して物のように扱われる不快感に思わず声を荒らげた。

「いつまでもお高くとまってんじやねえよ！」

揺さぶっていた手が胸を鷲掴みにする。思い切り力が込められ、揉むというより握り潰そうとしているようだ。

「うぐっ！……ひ、くうう……」

白磁の肌が、男の手の形に赤くなっていく。怒った男はさらにブラジャーを乱暴に剥ぎ取った。零れおちそうなほど突き出していた二つのロケットは、大きく弾んだあと元の位置に戻る。しなやかに鍛えられた上半身は支えを失つても形を崩さずに、薄い桜色の乳首をツンと上を向かせている。握り潰された新雪の肌には赤く男の手の跡が残っていた。

「うひょー、さすが外人だな。じゃあ俺はこっちのおっぱいもーらい」

横からもう一人の手が伸びてきて、それぞれの乳丘が掴まれた。左右の腕を別々に抱え込んで抵抗を封じ、むき出しになった巨乳をまさぐられる。

「すげーデカパイだ。手が完全におっぱいの中に埋まっちゃうぜ」

「何食ったらこんなになるんだ？」

子供がおもちゃに触るような気安さで、手のひらが胸の表面を撫でる。胸がぐにやぐにやと歪むのを面白がって、たまに胸肉の感触を確かめるように強く揉みしだかれた。

「こんな良いおっぱいしてたらいろんなことができそうだよなあ」

それと同時に乳首の方も擦り潰すような勢いで摘まれる。

「しっかし、イマイチ反応が薄いんだよなあ。乳首の勃ちも悪いし」

「お前たちのような最低の男に触られて気持ちよくなるものですか」

実際に感じているのは快感などではなく、他人に触られるという違和感や、男たちに対する嫌悪と怒りだった。

「まあ良いけどな。濡れてないと痛い目見るのはお前の方だぜ。しっかり押さえてろよ」

不意に背中から男が離れ、苦しい羽交い締めから解放された。ほっと一瞬だけ気を抜いたのもつかの間、シルヴィアは再び腰を突き出すような格好で床に倒される。

「こっちの方も楽しませてもらうぜ」

普段はスカートに隠れて目立たないハートを逆に描いた美しいヒップライオンが露わにされる。その格好を恥ずかしがる暇もなくロングスカートの捲り上げられていく。腕を押さえる男に遮られ振り向くこともできず、スカートの裏地が脚の上を滑る感触だけが敏感に伝わってきた。

「おお、ガーターベルトじゃん！ エ

ロいなあ  
「へへ。きれいな足しやがってよ。たまんねえなコイツ」

脚が徐々に露わになっていく度に、男たちが歓声を上げた。

「あなた方は、そんな風の下劣な見方しかできないのですか」

「何言ってるの、そんなこんな美人だったら当然じゃん」

「だよなあ、こんだけエロい身体してたら、何やっててもエロいわ」

ねっとりとした空気はさらに濃くなり、全身が不快な視線に晒される。

「すべすべしてんのに柔らかくってさあ……エロいよなあ」

完全に脚が露出すると、今度はそこに無遠慮に手が伸ばされた。普段人目に晒さない部分を撫でられる嫌悪感に肌が粟立つ。

そしてついにショーツが完全に丸見えにされてしまった。

「こんなエロいパンツ穿いて澄まし顔で説教たれたたのかよ。とんだエロメイドだな」

羞恥に思わず顔が熱くなるのを自覚する。レースの使い方が好みでブラジャーと合わせて購入したのだが、紐で横を結んだだけでシルヴィアの尻を隠すにはいささか小さく大胆なデザインのものだった。

「う、いつ……く……う……」

突然爪を立てて秘裂の周りをカリカリと引っかかれ、腰のあたりから来るびりびりと痛痒いような独特な感覚に





菌を食いしばって耐える。

幼い頃から古河家に引き取られ、メイドとして教育を受けてきたシルヴィアは掛け値なしの処女であった。

オナニーの経験すら無いシルヴィアにとつては全くの未知の刺激であった。「急に大人しくなったなあ。淫乱メイドがやつと楽しむ気になつてきやがったか?」

結び目はあつけなく解かれ、貞操を守るには心許ないショーツが下に落ちる。まだ誰にも見せたことがない秘所が露わになった。髪と同じ銀糸の茂みにうつつすと覆われた秘裂は硬く閉じられていた。それでも成熟した女性器特有の甘さと酸味が混じった匂いが周囲に広がった。ガーターだけを身に付けている下半身は、スースーして妙に頼りない気分させる。

「うわあ、外人つてやっぱ下の毛も黒じゃないんだ」

プラチナブロンドのアンダーヘアは、男たちの好奇の目を引いた。

「にしても全然濡れてねえな」  
節くれだつた太い指が割れ目をこじ開ける。快感などみじんも感じていない蜜壺は、当然何の湿り気も帯びていない。

（女が今までの行為で感じると、本気で思っているのでしょうか）

今までされてきたことは、ただの苦痛でしかなかった。

愛撫と言うより拷問と言った方が正しい。

「オラ、早く濡らせよ。こんなとこに突つこんだら俺も痛えんだからよ」

身勝手な理由で男が秘所に指をねじ込んできた。

「……ぐっ!」

全く濡れていない秘裂は、男の指一本でも異物感がある。

「何だよ。コイツ不感症なんじゃないか」

身体の中で気味悪く蠢いていた指が何かに触れた。

「お? なんだお前処女だったのかよ」

「あ、当たり前でしょう! 貞操は守るべきものなのですから!」

「またクソ真面目発言かよ。いい加減そんな口がきけなくなるように今からたつぷりと男の味を覚えさせてやるぜ」

カチャカチャという金属質の音がした。続いてファスナーが下ろされる音が聞こえてくる。

レイプされるという事実がまた一段と意識され、血の気が引いていくのがわかった。

「よく覚えておけよ、クソメイド。俺がお前の初めての男になるんだからなあ」

鼻息を荒くした男がのしかかってくる。熱く滾った塊が秘所にあてがわれる。

「……う、最後通告です。今すぐその薄汚い物をどけなさい」

必死で脚を閉じようとするが、単純な力では男の腕力にはかなわない。

「無駄な抵抗してんじゃねえよ!」

受け入れの準備さえできていない身体に、男は無理やり挿入を始めた。

「おっ……キツ……やっぱ処女は締めまりが違うな……」

めりめりと身体の内側を引き裂き、男の肉棒がねじ込まれていく。

「……っ……く……」

自分の指すら受け入れたことがない膣壁を正に開通させるべく、男の肉棒が掘り進んでいる。

痛みと共に、身体の中を押し広げられる未知の感覚が襲ってきた。

（入ってくるのが、ハッキリと伝わってくる……。こんな太い物、入るはずがありません）

本当にこのまま引き裂かれるのではないかという馬鹿げた妄想を首を振って打ち消す。

ふと何かに当たる感覚があつて、痛みが途切れる。

（こんなにはつきりと、突かれているのがわかるだなんて……）

身体の中にペニスが押しこまれるような圧迫感と、わずかな痛みが走る。

「今から俺のデカマラでぶち抜いてやるから覚悟しろよ!」

一度腰を引いて勢いを付けてから男が腰を突き入れた。

「……う、びちいいいいいっ!!」

処女膜があつてなく千切れ、身体の内側から裂けるような音というか、感

覚が走り抜けた。

「ひぐうっ! くう、あつ! はあああああああつ!!」

今まで感じたことがないほど大きく、異質な痛みについていけず抑えきれなくなつてしまった。

「うるせえな! 濡れてない処女マンコに突つこんでる俺も痛えんだよ!!」

任務を優先するあまり恋愛など想像もしたことがなかったシルヴィアだが、それでも漠然と夫となる人物に捧げるのだからと思つていた。

（それが任務のためとは言え、こんな最低な男に散らされてしまうなんて……）

「ひいっ! は、ぐう……いたつ、痛いっ!! ああ……ぐうっ」

だが身体の中から蹂躪される強烈な痛みが、悔しさと悲しみさえも塗りつぶしていく。

「ひいっ、んんっ……んんくう……ぬ、抜いてえ! いあああつ! んあ……かあ! ……ぐうっ、あああつ!!」

必死に歯を食いしばっていた口から声漏れるのと一緒に涎が垂れる。それでも思い切り目をつぶって涙を流すことだけは耐えた。

それでも男の腰は止まらない。力任せに突き上げられて、性器がヒリヒリと痛み出す。

「ギャーギャーうるさい口は俺が塞いでおいてやるよ」

眼前にむき出しになった男の下半身が迫る。間近で見る怒張したペニスは

膨らんだ先端の下に血管の浮き出た幹が上向きにそり立つており、とても人間の一部分であるとは思えないほどドロテスクだった。

「ほら、どうしたの？ 睨えてよ。それくらいわかるでしょ？」

待ちきれない様子で、びちびちと硬くなった肉棒で顔を叩かれる。

「……んはあ、やめな……ふごっ?! んんんっ!!」

少し開いた途端に、逸物が口に突き入れられた。

口の中いっぱいに獣のようなすえた臭いが広がった。こんな物が入っていたら、息がこの臭いになってしまいうだ。

「ううっ……ぐっ……!」

亀頭の先端が喉の奥に当たる。

「おっと、吐き出さないでよ」

反射的に引きそうになった頭を掴まれて固定される。

「歯は立てないでよね」

好きに口内を犯した肉棒は、奉仕を促すように動きを止める。

（最早私に残されたのは、統弥さまを守る使命のみです。ならば大人しく従って、決定的な隙を窺うのみ）

そう考えてシルヴィアは異物に舌を伸ばした。

「うぐうっ……ちゅ……ちゅるっ……んぐっ……んっ……ちゅぱっ……んんっ……れる……ちろ……」

舌が触れると味覚は苦みとえぐ味を、触覚は硬いのに弾力がある不思議な感

触をそれぞれ伝えてきた。

「れろ、れろ……ちゅぶっ……んく……ちゅぶっ……あっ……んぐ……」

次々と溢れてくる唾液をすする下品な音が響き渡る。

「上手いね、やつぱりメイドさんはご奉仕が得意なんだ」

（そんな訳あるはずないでしょう）

口の中に男のモノがあるので、反論すらまならない。

かつて少女であった自分が憧れ、努力し続けてきたメイドという職業の誇りすら汚そうというのか。

そして理性では演技だとわかっていても、一度男を受け入れると意識した身体は勝手に熱を帯びていく。

（どうして、こんなの、嫌だまらなはずなのに……）

舌で肉棒を扱っている間にも、下半身には男の腰が乱暴に打ち付けられる肉と肉がぶつかるパンパンという音に、じゅぶじゅぶと水音が混じり始めた。

「こつちもやつと濡れてきたぜ。こんな風にされないと濡れないなんてよお! この女相当なマゾだぜえ!!」

肉棒を挿入していた男が嘲るように笑う。

（違います。そんなこと、あるはずがない!）

これは身体が無理やり挿入されて傷つかないようにしている防御反応だ。決してこんなことで感じている訳ではない。まして飲みなどするものか）

「あれれ……舌止まってるよメイドちゃん? しつかりご奉仕してくれな

や……」

だが熱く滾った逸物に口を塞がれているシルヴィアは反論することもかなわず、男たちの中で乱暴にされて感じる淫乱なマゾヒストだと決めつけられた。

「濡れてくると、結構良い具合じゃねえか。ぬつぶりと締め付けてくるぜ」

動きがスムーズになったせいか、ただ乱暴に叩き付けるようだった抽送が、リズムカルになっていく。

それでも男を受け入れたばかりでまだ狭い腔道は、肉棒が通過する度に痛みを訴える。

「ちゅぶ! んん……ちゅぶ……ふごっ! んぐう……あぐ、じゅっ……ぐがあ……」

苦痛を紛らわせるために声を出すと言葉にならないそれは獣の唸り声のよう聞こえた。

「ほら、お前ももつと自分から腰をくねらせてみろよ」

男は逃げられないように掴まれていた腰を、自分の抽送に合わせて引き寄せた。より深くまで入り込んだ先端の硬い部分が子宮にぶつかると、思

い切り殴られたみたいに背中が跳ねる。「んぐっ、あううっ……! ふあっ、あああっ!!」

苦しむシルヴィアの様子を楽しむように、子宮を犯している男は大きく腰をグラインドさせた。初めに比べて抵抗は減っているはずなのに、中に入っ

ているペニス先が先ほどよりも太くなっているように感じる。

「う、そろそろ射精するぜえ!」

小刻みに震えるように腰の動きが一段と早くなる。

「俺も、そろそろ出るよ」

子宮で犯されながら口淫奉仕も続けるシルヴィアの口の中で、逸物がびくん、びくんと強く脈動を始めた。

「一発目は派手にぶっかけて、全身をザーメンでマキングしてやるぜ!」

最後の一押しという感じで、男がまた一際強く剛直を突き入れると勢よく引いていく。未だ広げられることに慣れていない腔壁は、元に戻ろうとしてキュッと窄まり、肉棒を締め付ける。

——どぶっ! びゅぎゅ! どびゅびゅ! びゅぶっ!

引き抜かれた瞬間、暴発するように白濁がシルヴィアの身体めがけて放たれた。

——びゅくっ! びゅるるっ! どびゅるっ! びゅ! びゅくるっ!

同時に口の中のペニスも射精を開始する。

「ふんんっ! んんっ、んんっ、む、んんんん!」

全身を熱いナメクジが身体を這うような、おぞましい感触が包んだ。かけられた部分から身体が毒されるような気分である。早く洗い流してしまいたい。

「ごほっ……けほっ……ごほっ……おえええっ……」

「ごほっ……けほっ……ごほっ……おえええっ……」



# イセリア 英雄戦記

*The Legend of the Aesya War*

第18話 淫辱、そして逃走

小説 **青空白雲** 挿絵 **牡丹**  
あおぞらはくうん ぼたん

皇帝の完全なる牝奴隷にされる前に  
帝国脱出を決意するフィオナ。  
協力を求めたメイベルローゼから  
その条件として強要されたのは、  
**敵兵への輪姦奉仕!**

「ほらほら、どう？ どんな気分？」  
 メイベルローゼの哄笑に、フィオナ  
 の声が重なる。

「いやああ、やめてええええええ」  
 若洞に埋め込まれた触手が奥までほ  
 じくり返し、少女姫を悩ませる。

蜜汁がぶしゃああああーと噴き出  
 した。太腿がびくくんつと、震える。

「随分感じているじゃないの、このス  
 ケベ犬！ さあ、さつさとあの豚野郎  
 の子供と、魔物の子供を産むことね」  
 勝ち誇った表情で、フィオナの豊か  
 な胸をヒールでぐりぐりする。

「あ、つうう……」  
 フィオナの顔が歪んだ。

この痛みにはなかなか慣れない。だ  
 が、同時に快感も憶えていた。甘く切  
 ない疼きが乳房の芯から湧き出てくる。  
 ゆつたりと細波のように快感が広がり、  
 乳首をも覆う。

（うそ……。痛いの、感じてしまつ  
 ているの？ わたくししたら、そんな  
 にはしたくない女だったの？）

懸命に首を横に振る。自分の身体が  
 意思を越えて変化していきそうで怖い。  
 はあ……という乱れた息遣いに、果肉  
 のような濃桃色唇が開き、真珠のごと  
 き函が濡れて光る。

ギユスターヴに初めて陵辱されてか  
 ら、数日が過ぎただけだが、散々犯さ  
 れたためだろうか、身体が、性の快楽  
 を求めて、いやらしくなってきた。イ  
 セリアの民が見たら、どう思うだろ  
 うか。母や、幼馴染みの笑顔が浮かび、

胸が痛んだ。

（このままじゃ……。どうにもならなく  
 なるわ。一生、帝国の奴隷に……）

イセリア公国も当然、この恐ろしい  
 帝国のおもちゃにされてしまう。絶望  
 に目の前が暗くなつた。

「もつといいで鳴きなさいつ」  
 メイベルローゼが叫んだ。鼻筋に薄  
 い皺を寄せ、唇を吊り上げて。

「ん、ああ、ん、あううつ……。いや、  
 いやですつ。……。あああん」  
 触手の先、亀頭が中をほじくり返す。

カリ首が擦れて、肉髪が細部までピリ  
 ピリと熱く痺れていく。その痺悦は、  
 腰の内奥にまで響き渡り、下半身が溶  
 けていきそうだった。抑えようとして

も、浅ましい声ももれてしまふ。  
 萎えかけた心の中、自分の声が聞こ  
 えてきた。

（このままでいいの？ フィオナ！  
 イセリア公国の姫として、こんなこと  
 で負けてもいいの？ 何としてでも、  
 脱出するのよ！）

はつとした。目を大きく見開いて……

「ふふん。どうしたの？ その顔は。  
 ……もう降参かしら？ 不様な顔ねえ」  
 唇を歪め、お腹を撫でてくる。

「孕んだかしら？ 皇帝の子供はまだ  
 生まれていないけど、魔物の卵はもう  
 できているわよねえ？ ふふ。イセリ  
 アじゅうに伝えてやるわ。お姫様が、  
 魔物の卵を産んだことをね！」  
 「ほほほほほ。いいザマねつ」

触手を抜き去り、侍女が笑うと、フ  
 イオナは起き上がり、声をあげた。  
 「メイベルローゼ姫、話があるのつ。  
 お願い、聞いて。わたくしをここから  
 出して。お願い。一緒に戦いましょう」  
 「は？ 何をいきなり言い出すの？  
 馬鹿なことを言わないでよ」  
 帝国の末姫が鼻を鳴らす。腰に手を  
 当てて、見下した表情で。冷たい眼差  
 しにも怯まず、フィオナが声を重ねる。  
 「あなただって、本当は、皇帝が憎い  
 んじゃないですか？ 本当は、愛され  
 たいのに、愛されないから……。だか  
 ら、わたくしに八つ当たりでこんなこ  
 とを。違いますか？」  
 「馬鹿なこと、言わないでよ！」  
 「あなたは寂しいんでしょう？ 父親  
 に認めてもらえなくて、苦しいんでし  
 ょう？」

自分は、優しく気高い母親もいるし、  
 セリーヌもいる。慕ってくれている部  
 下はたくさんいる。わたくしは恵まれ  
 ていたのだと、しみじみ感じ、メイベ  
 ルローゼの孤独に想いを寄せる。メイ  
 ベルローゼの心の隙を突いて、脱出を  
 試みようとしていることに、後ろめた  
 さを憶えながら……。  
 （わたくしつて、卑怯かしら……）  
 今や、帝国の末姫への怒りがあつ  
 つも、同情する想いもある。  
 メイベルローゼは悩んでいるようだ。  
 言葉を使い、揺れる瞳で、フィオナを  
 見詰めている。唇をきゅ、と噛んだ。  
 （皇帝と戦うなんて……）

と、メイベルローゼは考える。

もし、失敗したら、どんな目に遭う  
 かもわからない。あの好色で、残忍な  
 男ならば、自分の娘すら毒牙にかけな  
 いとも限らない。ふと想像してしまい、  
 おぞましさに鳥肌が立つ。

「冗談じゃないわ！ あんたと一緒に、  
 パーンドベルグと戦うつ？ 無謀に  
 もほどがあるわよ」  
 侍女は呆れた様子。

「あんたの国はもうおしまいよ。帝国  
 はクレオラと同盟を結んでいる。もう  
 滅亡する運命なの」  
 「それでも、戻らなければいけないの  
 ですつ」

フィオナは懸命に訴えかける。わた  
 くしは、絶対に国に戻らなければなら  
 ないのだと。民を守るのだと……。

陵辱されてさえ、気高さを保つ姫に、  
 メイベルローゼも驚き、呆れ、反発す  
 る思いもあるが、感心してしまつてい  
 た。

（この女……。あの豚にも陵辱されて、  
 私にも辱められているのに、まだ気高  
 さを失わないなんて。信じられない……）

自分の汚らわしさを感じ、唇を噛む。  
 「お願い。わたくしの脱出を助けて」  
 「こんな女の言うこと、聞かないほう  
 がいいですよ」  
 耳打ちをする侍女に、フィオナが叫  
 んだ。

「あなたにも申し訳なかつたと思つて

あなたにも申し訳なかつたと思つて

います。ご家族を守ってあげられなくて……。だから、罪滅ぼしに、わたくしを戦わせて」

侍女が怯んだ。少女姫の涙に、顔が歪む。

メイベルローゼも次第に心を動かされる。

（せっかく、イセリアの姫を献上したのに、あの男の態度は何なの……。少しくらい、褒美があつてもいいだろうに。あいつに嫌がらせのひとつもしてやりたくなつたわ）

どうせ、解放しても、イセリアは挟み撃ちにされている。帝国が揺らぐことはあるまい。

「わかつたわ。でも、条件があるわ」  
怯えるフィオナ。しかし、すぐに瞳を強く輝かせ、頷いた。

「ふふん。メイベルローゼもよく考えてくれたじゃないか。またあの女を公開調教しようとは。がははははは」  
皇帝の高笑いが響く中、フィオナは肩を縮めている。

翌日の夜。ひとり、あてがわれた部屋で夕食をすませたフィオナは、大広間に連れてこられた。

少女姫は、公国で着ていたものと同じデザインドレスを身に着けていた。ユズリハを模した装飾が美しい。

メイベルローゼは、ギユスターヴの横で腕を組み、にやにや笑っている。

大広間。兵士たちが百人はいいる。皆戦から帰ったばかりなのか、鎧姿であ

る。むさくるしい男たちのおいに、フィオナは頭がくらくらしてくる。

（何てことなの……。またこんな目に遭うなんて）

兵士たちのいやらしい目つきに、思わず、顔を伏せる。

「いい女だな。見る、おっぱいがあんなにデカイぞ」  
「ち○ぽを挿んで欲しいな。さぞかし、気持ちがいいぞ」

「おお、勃起してきちまつたよ」  
下品な笑い声に、背筋が震える。ギユ、と手を握り締めた。胸の奥で、鼓動が速くなってくる。

皇帝がにやにやする。

（いったい、これから何をされるの……？）  
フィオナはギユスターヴのいやらしい笑顔に、肩を縮めた。手をぎゅ、と握り締める。

「今日は、この者どもの労をねぎらつてやれ。戦いで疲れているからな。戦で女日照りにもなっている。あくまで、お前はワシのものだが、まあ、たまにはこういう趣向もいいだろう」  
その言葉に、英雄国の姫は唇を震わせた。

（そんなつ……。こんなに多くの男の人に？ うそでしょう？）

面横に男たちが来て、何列かに並んだ兵士の前に連れていかれる。抵抗する気はない。ここで我慢すれば、国に帰れるのだから。果たして、イセリア

が帝国に勝てるかどうか、わからないが、やってみるしかない。

（絶対に、セリーヌに会って相談してこの戦争に勝つてみせる）

「さあ、さつさとしゃぶりな」  
「はい……」と目に涙が光る。

兵士らは皆鎧姿。腰には剣を差している。フィオナの前の壮年の色の黒い男がにやにやして、カチャカチャという音を鳴らして、鎧の前を開いた。

「舐めさせていただきます、どうう？  
フィオナ姫」

「はい……。舐めさせていただきます」  
「イセリアへの侵略、ご苦労さまです、は？」

「そこまで言わせるのか……。姫である自分をいたぶって喜んでるのだ。」  
「イ、イセリアへの侵略、ご苦労さまで……。ございます」

満足げに男が笑った。  
跪いて、兵士の剥き出しになった勃起を舐める。鼻につん、と汗臭さが感じられた。かなり長い間、洗っていないようだ。きつい臭気に、思わず眉間に皺が寄る。それでも、耐えねばならない。

「おおう、気持ちいいええええ」  
他の兵士が口々に言う。

「うらやましいな。早く出せよ」  
「俺も、しゃぶつてもらいたいぜ。全然出していなかったからな」

下品な歓声があがる。男たちの慰みものにされる痛みが胸を襲った。悲しみに、柳眉がカーブを大きく描く。

「待つていろつて。くはあ、イセリアの姫様もこのザマか」  
英雄国の美少女姫がペニスを含む根元までだ。苦い、そしてしょっぱい味がして、舌の味蕾を刺激した。

じゅぶ、ちゅぶ、ちゅぼ、ちゅぼ、ちゅぶん。

じゅわ……。と我慢汁が溢れている。鼻奥にイカ臭が抜けていく。

男がカクカク腰を振る。

「早く……。出してください」  
涙を滲えた少女姫の哀願に、男が頬を緩ませる。

「はぐう……」  
と、苦しそうなフィオナ。咽の奥まで亀頭が侵入してくる。亀頭がぶよぶよよっていて、この柔らかさに慣れることがない。ただ、竿は硬く、浮き出た血管に舌が這うと、妙に舌がびりびりする。どこか心地よさを伴う感覚に、フィオナの眉がたわみ、優しい鼻翼が膨らみ、柔らかい鼻息がもれる。

「うへえ、たまらねえぜ。おい、おっぱいも出しな」  
「はい……」

カップを外すと、ぼろん……。と双子の肉球が溢れ出る。素晴らしい巨乳。おそらく、男の手でも覆いきることができまい。丸々とした白肉は、豊かなラインを描きつつ、薄く静脈を浮かせている。頂点に位置する乳首は薄赤い。

「たまらねえな。おい、ち○ぽを挿んでくれや」

「はい、わかりました」

膝をついた兵士の肉幹を爆乳でサンドイッチにする。幹部分は埋まってしまい、先っぽだけが辛うじて顔を出す。薄赤の亀頭に我慢汁が滲む。

「ああ、すごいにおい……。嫌なおいなのに、頭がくらくらしてきます」

「激しく抜き立てるフィオナ。左右いっぺんに上下させたり、互い違いにずり上げ、ずり下げ。我慢汁と唾液が、亀頭と乳肌境界面に泡立ち、小さな雫を浮かせる。ギユスターヴの調教によ

って、身体に覚えさせられた愛撫方法だ。

「くあああ、気持ちいいぞ。おい、先っぽを啜えてくれ」

「屈辱に眉をひそめながら、亀頭を含む。

「ああ、この人は少し苦い……。ん、咽が熱い」

「唇を窄めて、ちゅう、と吸いながら、肉房を上下させる。何回も、何十回も……。いつしか、透き通るような白い乳房が、桜色に息づいていく。ぴよこん、と勃起した乳首が愛らしい。

「おお、出るっ。臭い精子出してやるぞおおお」

「出して下さいっ。いっばいっ」

「亀頭から口を離し、叫ぶ。さらに乳房を上下させた。

「どびゅ、びゅ、びゆるるるるるっ。亀頭が膨れ上がった感触が気持ち悪かった。

「一気に咽奥目がけてしぶいた。(うう……。気持ち悪い。なぜ、こん

なに、粘っこの……。?)」

「ギユスターヴの精液も何度か飲んだが、慣れることはない。咽に絡みつき、噎せそうになる。それでも、何とか飲み干した。

「まだまだ兵士は残っているぞ。次はま〇こで奉仕してもらおうか」

「うう、そんな……」

「嫌だっけ言うのか?」

「男の鋭い目つきに、慌てて首を横に振る。

「いいえ、奉仕させていただきます」

「次の男が仰向けになり、フィオナに跨がらせた。四つん這いだ。

「イセリアへの侵略、お疲れ様です。どうぞ、お疲れをわたくしのおま〇こでお癒やしてください。さあ、挿れてください」

「へへ。わかつているじゃねえか」

「男が、スカートを捲り、ショーツをずらす。ずぶつと若脛に太幹が埋まる。一方、背後からもうひとりの兵士が肉肛に硬幹を打ち込んだ。そして、周りを、多くの兵士たちが取り囲む。全員、緩みきった表情でせわしなくペニスを抜き立てる。男臭さに、目眩を起こし

そう。

「ぐへへへへ、こいつのケツはまた格別の味だなっ」

「ま〇こもうまいぜえええええええ」

「ぐはあ、ケツ振っているぜ。イセリアを侵略した敵に犯されて喘ぐ変態め。

「イセリアの国民が見たら、どう思うかなあ?」

「ああ、言わないでえ」

「涙目になりながらも、腰は動いてしまふ。男どもは力強く腰を使ってくる。二穴陵辱に、すっかり美少女姫は快感の嵐に飲まれていた。膣と直腸、双方から硬いペニスを突き入れられ、肉壁を通して、二本が擦れあう。

「(あの人よりも、短い……。ああ、何てことを考えているの?)」

「フィオナは、頭に浮かんだ想いを振り払った。

「うおおお、もうイクぞ。うりゃあああああ」

「ああ、出してっ。フィオナの中に出てくたさいいいいいいい」

「どつと熱く直腸管の奥でしぶいた。ズーンと悦楽衝撃が脊髄を駆け抜け、脳にまで響く。弱々しい息を吐くフィオナの頬に桜色が満開に咲く。睫が切

なげに揺れて、目元に薄い影を落とす

「俺も出る。おらあ、孕めやああああ」

「ああ、イク、ん、はう、イクううう」

「どびゅどびゅびゅびゅゆるるるるる。子宮口で弾ける熱い感覚に、腰が震えた。子宮から全身に凄まじい快楽のエナジーが走り抜けた。

「男の胸当てに、溢れんばかりに実った乳房が重なり、横に白い脂肪房を歪ませる。びく、びくん、と丸みの美しいお尻を震わせて。

「兵士らの嘲笑が木霊する。

「うわあ、イキやがったぞ」

「淫乱なお姫様だな。イセリアの敵に犯されてイクとは、淫乱だなっ」

「無様なものだなあ。わっはっはっは。敵のち〇ぽでイクとは、どういう神経しているのかね?」

「魔眼姫も高笑いしている。

「(ああ、何てことなの……。このままじゃ、わたくし、どうにかなってしま

う)

「肉の快楽に溺れてしまいそうな自分が怖い。

「もつと辱めてやれ。何だつたら、小便でもかけてやれ」

「フィオナがびくつとした。顔が青ざめる。まさか、そんなことまで……。兵士らが歓声をあげる。

「すると、ひとりの兵士がやってきた。頬のたるんだ、五十代と見える男だ。立派に腹ばかりが膨れている。

「[では、お言葉に甘えて」

「[ちよ、や、やだ、いやあああああ」

「兵士がズボンを下ろし、醜いものを剥き出しにした。そして、勢いよく少女姫の顔目がけて放尿する。途端、きつい小便臭がフィオナを襲った。

「はうう……」

「涙を零しながら、唇を噛む。

「秘園から蜜汁が溢れ、びくんつ、と太腿が震える。いったい、自分の身体はどうなってしまったのか……。小便をかけられて、感じてしまうなんて……。(こままでされてしまうなんて……。完全に)おもちや扱いなね)」

「顔がびっしょり薄黄色の液体で汚されてしまった。つー、と綺麗に通る鼻筋の脇を、雫が流れていく。形のいい

鼻翼も、黄色く濡れた。小さく開いた、さくらんぼを思わせる唇も……。

「綺麗にしてもらおうか」

男が唇を歪めた。

さらには、口にまでペニスを突っ込まれてしまう。男はぐいぐいと腰を振る。咽まで亀頭が突き刺さりそうで、吐き出しそうになる。小便のきつい苦味としよっぱさが、舌に染みる。鼻奥からおいが抜けて、顔が歪んだ。

次々に男どもがやってくる。

「次は俺だっ」

「いや、俺がやらせてもらうぜ」

汗臭い男どもが群がってくる。皆、目が充血して、鼻をぶひぶひと鳴らしている。

前を、後ろを犯されてしまう。

「いや、ああ、助けてえええ」

しかし、容赦はしない。小太りの中年兵士が、雪尻を抱えて、後ろから腰をいやらしく振る。バス、バスン、と肉衝撃音が耳を打つ。

「いやああ、感じるっ。ああ、気持ちいいですううううううう」

絶頂に至ったばかりで、若い肉体が敏感に反応してしまう。

「くはあ、たまらねえっ。中まで引きずりこまれそうだ。戦で頑張れば、またこの極上の身体を抱けるのかっ」

中年兵士が涎を垂らして笑う。

男の熱棒が奥まで突っ込まれ、蜜洞をかき回される。亀頭の出っ張りが、蜜鬘を刺激して、その度に、激感が弾ける。びくくんと背筋を震わせる。

若腰がバウンドした。尚更、牡幹が奥まで嵌まり、亀頭が子宮底を打つ。子宮までが蕩けてしまいそう。

「はう、イク、ん、あああ、イクますうう。フィオナ、イクううううううう」

「ぐおお、出るっ」

脳天にまで激烈な快感衝撃が突き抜けていく。全身の細胞ひとつひとつが、ぶちぶち音を鳴らすかのよう。肩を垂らし、瞳を潤ませたのへ顔に、不埒な男どもはますます赤らんだ顔を歪める。

「次は俺だっ」

「何を、俺だっ」

我先にと、男どもが群がる。

獣の体位で菊門に突っ込まれる。ぐりぐりと亀頭エラで扱かれて、熱く、甘い快感に玉の肌を震わせる。

前には中年小太りの男が立ち、唾えさせられる。咽まで突っ込まれてのイラマチオ。それすらも、感じてしまう。亀頭の出っ張りが口蓋を擦る度に、性感の火花が散るのだ。鼻翼を浅ましく膨らませて、頬を凹ませて、しゃぶる。ぶるぶるした赤桃色の唇からは、涎が溢れてくる。顎のシャープなラインを、涎が落ちていく。透明な糸を引き、キラッと光りながら……。

「ぐおおお、イク、出るっ」

どびゆ、どびゆるるるるるるっ。

絶頂とともに、尿道が緩んでいたのか、フィオナの股間から黄金水がしぶいた。

「うわあ、こいつ、しょんべん出して

いるぞっ」

「おう、すごいなっ。イセリア公国のお姫様ともあろうお方がどうなさったのですか？」

男たちの揶揄に、顔を横に向ける。(恥ずかしい……。いつから、わたしの身体はこんな風になってしまったのでしょうか?)

野蛮な皇帝はにやにやしなから声をかけてきた。

「まだまだ残っているぞ。せいぜい悦ばせることだな」

瞳をねっとり潤ませて、少女姫は小さく頷いた。

兵士たちへの奉仕があらかた終わり、いよいよ、ギユスターヴが出てきた。

マントを外し、衣服を脱ぎ、全裸になる。胸毛の生えた、体格のいい肉体を目にして、フィオナは恐れを抱きつつも、ぐくり、と生唾を飲んでしまった。

「まずは掃除しろ」

「はい。お掃除をさせていただきます……べろ、べろん」

フィオナは頷き、亀頭に舌を這わせた。

「ふふん。すつかりスケベになりおつたな。イセリアの女王が見たら、どう思うかな？」

(ああ、お母様……。フィオナはいけない娘です。お許しください)

涙をきらりと輝かせて、亀頭を含む。兵士らの亀頭よりも、一回り大きい。口に含むのにもひと苦労してしま

う。鼻奥に抜ける腐臭もきつい。腐りかけの生モノのような臭気に、吐き気を憶える。もちろん、そんな素振りを見せてはならない。

肉幹まで収めて、舌を細かく動かす。太く浮き上がった血管に、舌がくねる。そうしながら、唇を締める。

「うむ。まだまだごちないが、それでも、上手にはなってきた。ぐはははは」

腐臭漂う肉幹を、肩をひそめて、しやぶる。

ちゅぶ、じゅぶ、じゅぶ、じゅぶ、じゅぶ。ちゅぶ、ちゅぶ、ちゅぶ。

さらさらとプロンドの髪が、胸房に流れて、乳首を撫でる。大広間のシャ

ンデリアの灯りに、髪が眩しく光った。しばらくの間、フィオナの奉仕を受けるだけだった皇帝が、腰を動かす。

長大幹が奥まで突っ込まれて、噎せそうになる。

「ちゃんと首を振ってしゃぶれ」

皇帝の鋭い眼光に、肩が縮む。胸の底まで射抜かれるような恐怖を憶える。

それでも、亀頭を甘く吸ったり、竿に舌を這わせているうちに、身体の変化が大きくなっていく。

過熱するおしやぶりに、きゅん、と秘処が熱くなつた。

(ああ、おかしいわ。挿れて欲しくない女になつてしまったの……?)

自己嫌悪に陥りそうになる。敵国の皇帝のペニスを欲しがるとは……。



「だめよ。挫けちゃだめ！ 何のために、あの人に頼んだと思うの。こらえるのよっ」

「太く硬い牡茎を含み、首を振る。ぼつりとした唇を何度も、何度も前後させ、幹肌を抜く。唾の玉がいくつも浮き、豪幹の浅黒さを際立たせる。」

「出してっ……。出してっ……。」

「口を離し、叫ぶと、また唾え込む。」

「だんだんよくなってきたな。一発抜いておっか。おらあああ」

「そう言うと、腰を激しく動かしてきて、フィオナは涙目になりながらもこらえた。」

「口蓋を亀頭の出っ張りで擦られ、ビリビリした。出し入れされる亀頭がびゅ、びゅと先走りのエキスを吐き出し、咽にまで飛ぶ。美少女姫の肩が半月の弧を描く。髪の毛が、数本頬に絡んだ。ぼうつと頬が薄赤く染まり、しつとりと細かい汗の粒を浮かせる。」

「ぐほおおおおお。出すぞっ。飲めよ、一滴残さずっ」

「はい、出してっ……。」

「亀頭を舐めながら叫び、茎根元を指で擦り上げる。そして、再び、亀頭から太幹を一気に含んだ。」

「勢いよく牡汁がシャワーのように注ぎ込まれ、噎せそうになった。ふうふうと鼻を鳴らし、何とか飲む。咽がこくん、と上下する。」

「果肉のような瑞々しい唇の隙間から、浅黒の肉幹が抜けた。大きくしなり、鈴口から白露が何滴か飛び、びゅ、と

「姫の口元に落下する。」

「眉をたわめ、目元を上気させて、唇を波打たせる美少女姫に、獣欲の皇帝は顎を反らす。」

「おしゃぶりもよかつたぞ。躰け甲斐があるな。次は四つん這いになっておねだりしてみろ」

「はい、ただいま」

「言われた通りの格好をする。ゆで卵のような真っ白のしみひとつない双臀の小山を見せつける。けどものの視線を感じて、頬が火照った。」

「お、お願いします、わたくしのここに……い、挿れてください、ませ」

「顔から火の出る思いで声を搾り出す。悔しくて、悲しくて、背筋が震えた。」

「「こことはどこだ？ ちゃんと牝豚らしく、はつきり言えっ」

「お、おま○こ、です……」

「卑語を口にする、かあつと頬が火照った。思わず、「いや……」と首をくなく振る。」

「ふふん。フィオナのスケベおま○こに極太ち○ぽを挿れてハメハメしてください、だろう？ 一国の姫様ともあろう者が、随分国語力が低いじゃないか」

「ああ……」と弱々しい声をもらし、フィオナは身体を震わせた。

「そんなこと、言えるはず、ないわ」

「悲しみが込み上げてくる。しかし、卑語を口にしたことで、全身が火照っていた。若い女洞が疼いてたまらない。「フィオナの、スケベお、おま○こに

「……、極太ち○ぽを……、挿れてハメハメ、してくださいっ……あああつ。——んああああつ」

「と、言いきると、ずぶずぶと肉膣に豪幹が侵入してきた。」

「はうっ。ん、いやああ」

「くはあつ。相変わらず、お前のここはいいな。実に具合がいい。これから毎晩たつぷり可愛がってやる」

「長いプロンドヘアを右手で掴まれ、顔を起こされる。涙の膜の向こうに、多くのむさくるしい兵士どもが立っている。皆、ニヤニヤといやらしく笑っている。屈辱と悲しみに、胸の底が冷えていく。しかし、同時に、太茎に子宮底をノックされて、蕩けるような激感が襲ってくる。」

「ああ、やつぱり、このおちん○んが……」

「そんなことを思ってしまう。太さと硬さは、奉仕をした兵士らのペニスとずつと上回っている。」

「ん、ああ、ん、ああ、は、は、あう、いや、ん、んあああつ。だめ、ああ、だめえええ」

「何がだめなものか。おい、正直になれ。気持ちよくて仕方がないんだらう？ そうだよなあ？」

「さらに強い力で髪を引っ張られた。」

「あう、そ、そうです、ん、き、気持ちいい……ですうううう。——んああ、あ、い、いい、ん、すご、ひいいいいい」

「硬幹に打ち込まれ、激悦が駆け抜け

ていく。他のペニスでは、ここまでは感じないだろう。」

「ぐははは、自分からケツを振っているじゃねえか。この淫乱がつ」

「左手でバチーンとお尻をぶたれた。兵士らの嘲笑があがる。」

「イセリアのゴミどもが見たら、どう思うかな？」

「はは、見る、あの面を。あんなドスケベ、見たことないぜ」

「ち○ぽが勃つてきたぜ」

「もう一度、しゃぶってもらいてえ」すると、ギユスターヴの野太い声が響く。」

「貴様ら、この淫売にぶっかけてやれ」

「歓声があがる。うおおお、と大広間が震えるほどの声とともに、百人近い男どもが駆け寄ってきた。肩当てを外し、前を開き、一斉に醜い欲望幹をほじくり出す。」

「（あ、ああ、すごい、たくさんのおち○ぽ……。んああ、においが、ん、濃厚です）」

「眉根を寄せて、頬に蔷薇色を咲かせての淫ら顔で、美形姫が何十本もの牡茎を見詰める。太さも色もさまざまな牡のシンボルに、欲情が衝き上げてくる。思わず、舌を伸ばして舐めてしまう。さあつと肉体が濃棕色に息づく。たばんたばんと、豊満な牝乳の膨らみふたつをブランコのように前後にスイングさせて。」

「どっちのち○ぽがいい？ ワシの

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**